劇 場 版　機 動 戦 艦 ナ デ シ コ

劇場版　機動戦艦ナデシコ

Nadesico the movie

The prince of darkness

～失われし昭和40年代へ想いを込めて～

先ず何よりTVシリーズ『ナデシコ』のスタッフに御礼申しあげたい。TVシリーズなくして映画『ナデシコ』はありえなかった。この業界にはよくわからないルールのようなものがあり、そのルールなるものをことごとくブチ破ったと思われるのがTVシリーズの『ナデシコ』であった。

ふつうTVアニメというものはこのスタッフがいるからこのシリーズを、と考えるのが常識でありこの作品をやるのでそれにあったスタッフを、とは考えないのである。

しかし『ナデシコ』はそれをやった。映画やOVA向きのシステムをTVのそれに向けて実行した。ジーベックの現場はひたすら大変だった。あれから2年と数カ月が過ぎた（1998年7月現在）。TVのアニメーションの放映形態や見る側の対応も大きく変わった。良くなったのか悪くなったのか私にはよくわからないが。

映画『ナデシコ』に関してはアニメ映画とは呼ばずに“漫画映画”と呼ぶことに決めた。

天才・佐藤竜雄はTVシリーズ以上のねばりを見せた（一説にはねばりを見せすぎたという説もあるが）。あがってきたシナリオ、そして彼の寡黙な情熱をたたきつけた絵コンテは映画の成功を予感させた。予感させはしたもののそこから先は先でまた大変だった。『ナデシコ』はいつでも大変なのである。

“ホシノ少女ハ　サミシイ少女
　オモイハ　ハルカ　ホシノ海”

ありったけの昭和的叙情と10代だけが持つ夏の胸さわぎをぶちこんだ20世紀最後の青春映画、それが『ナデシコ』である。映画館を出たら「ナデシコいいよ、絶対見なよ」と友だちに言ってほしい。そうしてくれれば又、“大変”も出来ると思うから。

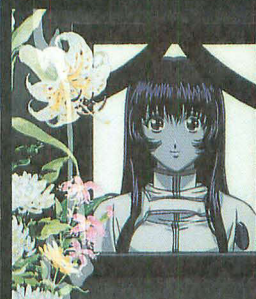
製作　大月俊倫

原画／後藤圭二

作画監修／後藤圭二
原画／山岡信一
美術／プロダクション　アイ

原画／後藤圭二

原画／後藤圭二　坂崎忠
特殊効果／村上正博
美術／プロダクション　アイ

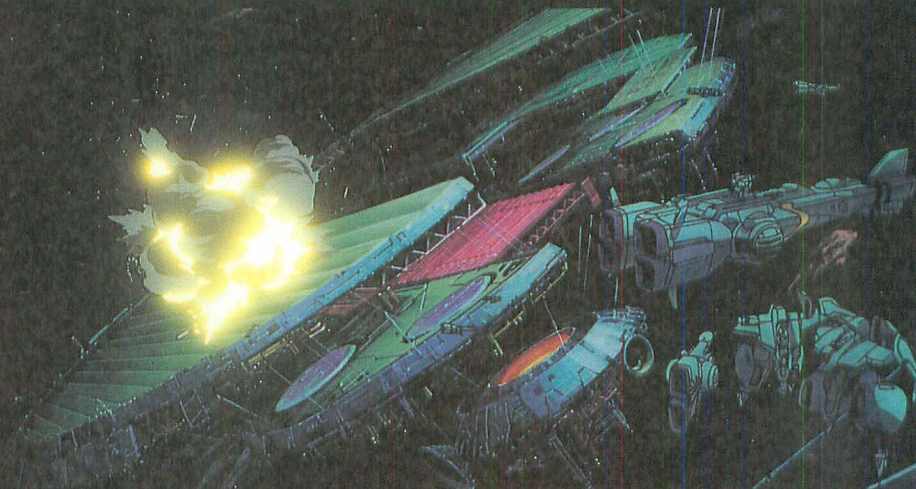
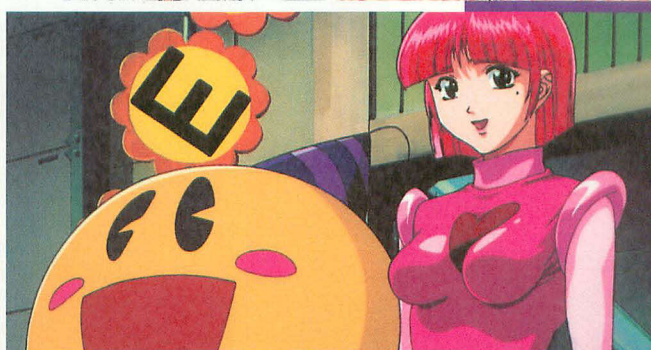
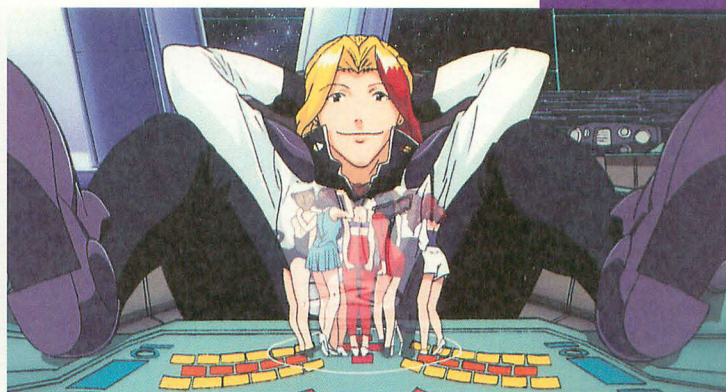
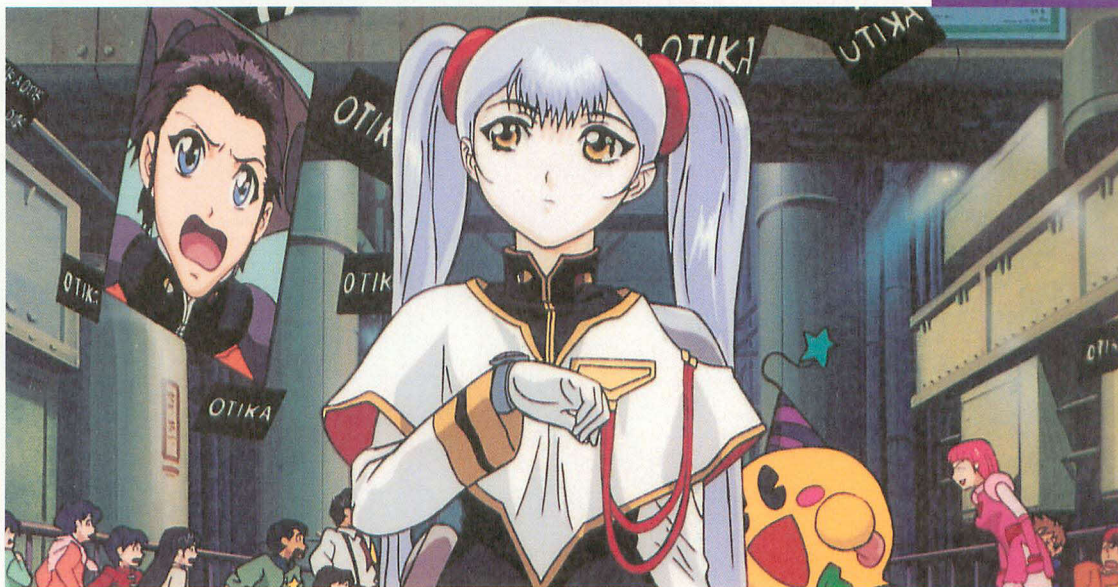
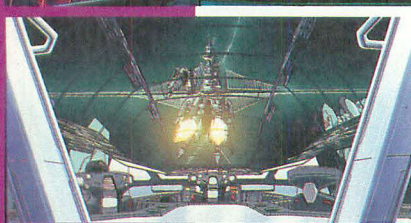
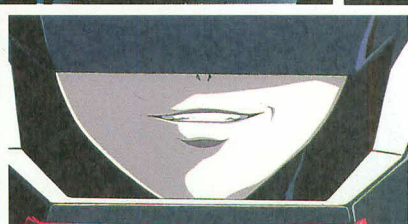
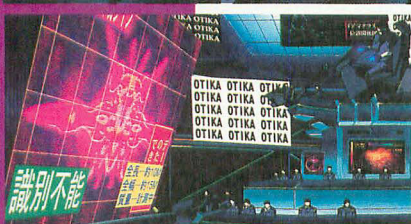
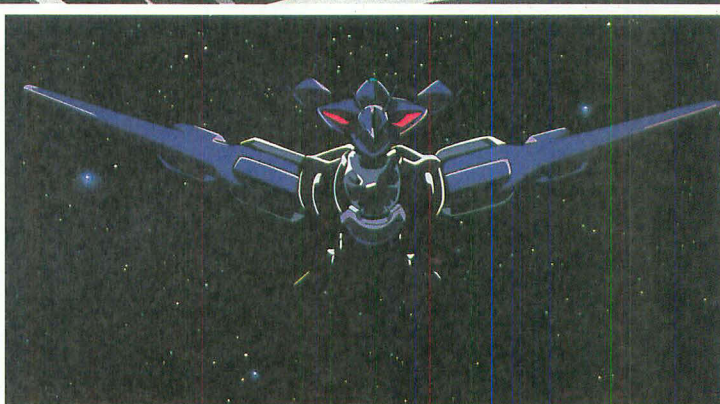
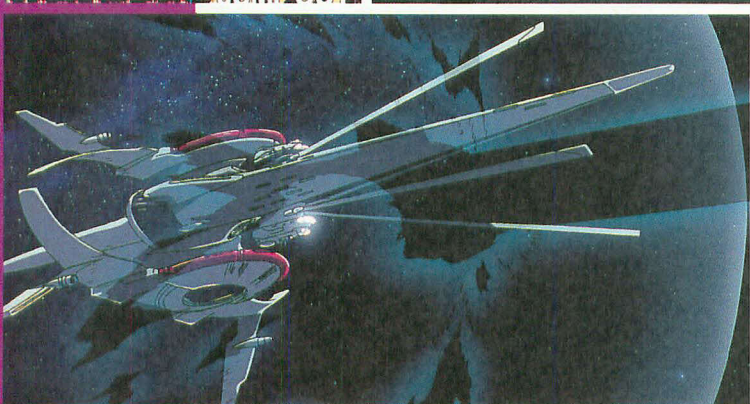
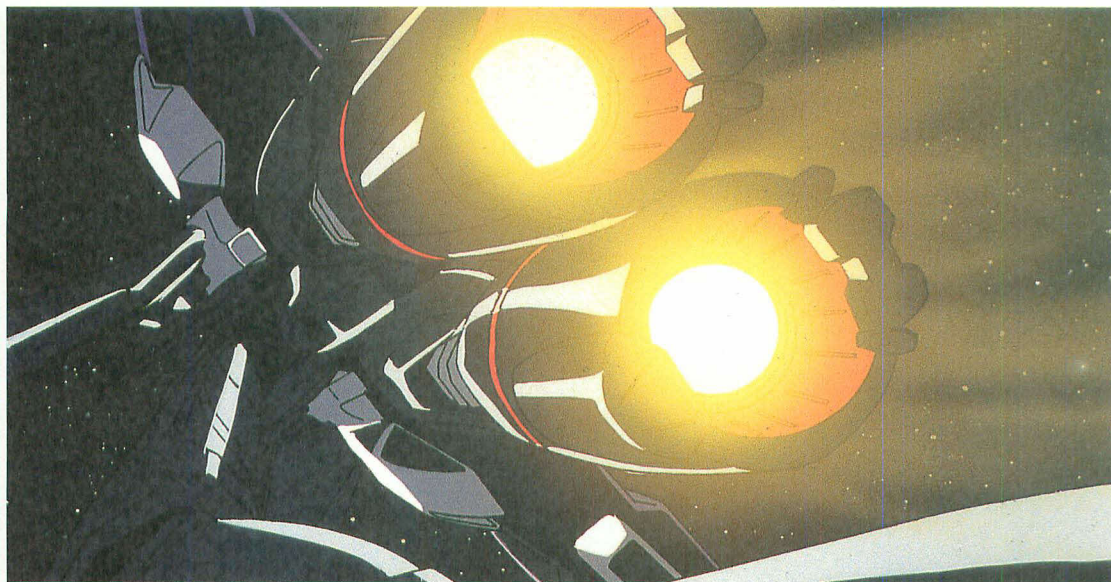
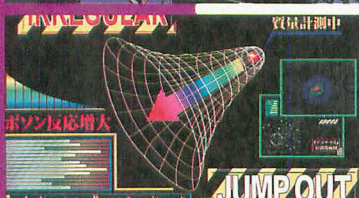
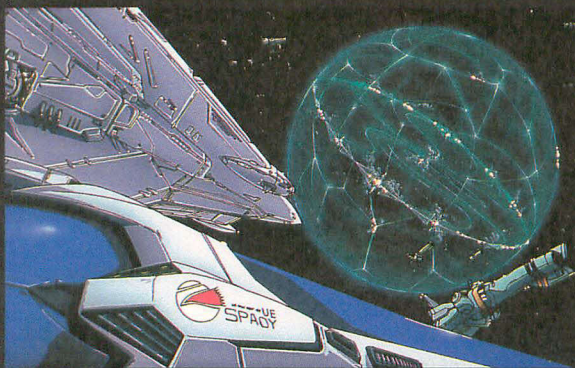
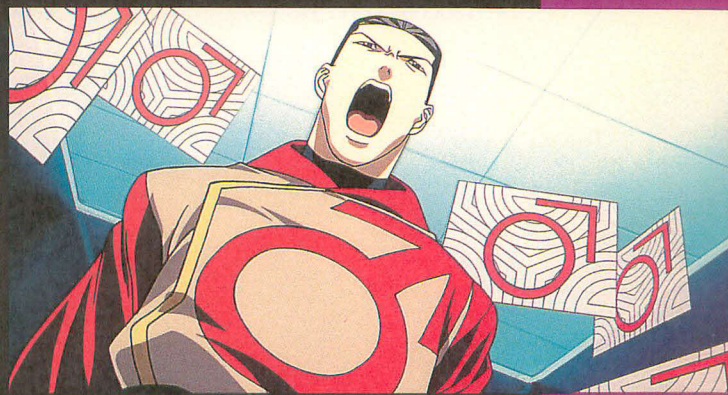
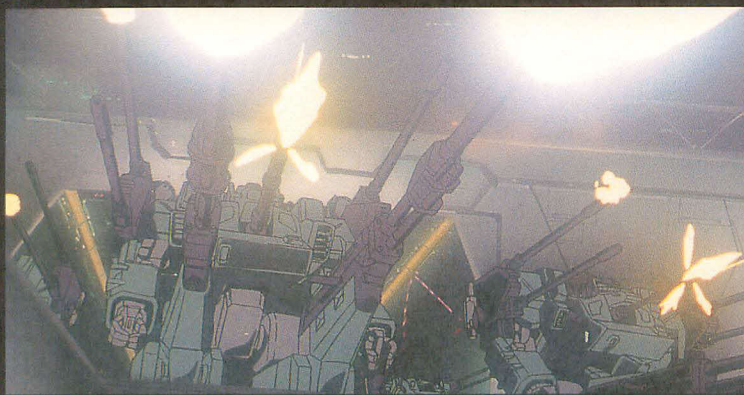
イラスト／麻宮騎亜

宇宙をめぐる大螺旋

西暦2201年。宇宙各地をボソンジャンプで結ぶ夢のネットワーク・ヒサゴプランの建造が進められていた。だが、そのターミナルコロニーが破壊される事件が連続して発生。この事件の調査のために地球連合宇宙軍は、機動戦艦ナデシコBをメインターミナルコロニー・アマテラスへ派遣した。

ナデシコBの艦長は、かつて初代ナデシコでオペレーターを務めていた、16歳の美少女ホシノ・ルリである。副長は木連出身の高杉三郎太、副長補佐はルリと同様に遺伝子操作で生まれた少年、マキビ・ハリ。初代ナデシコの艦長であったミスマル・ユリカと、その夫となったテンカワ・アキトが新婚旅行中の事故で帰らぬ人となってから、すでに2年が過ぎている。

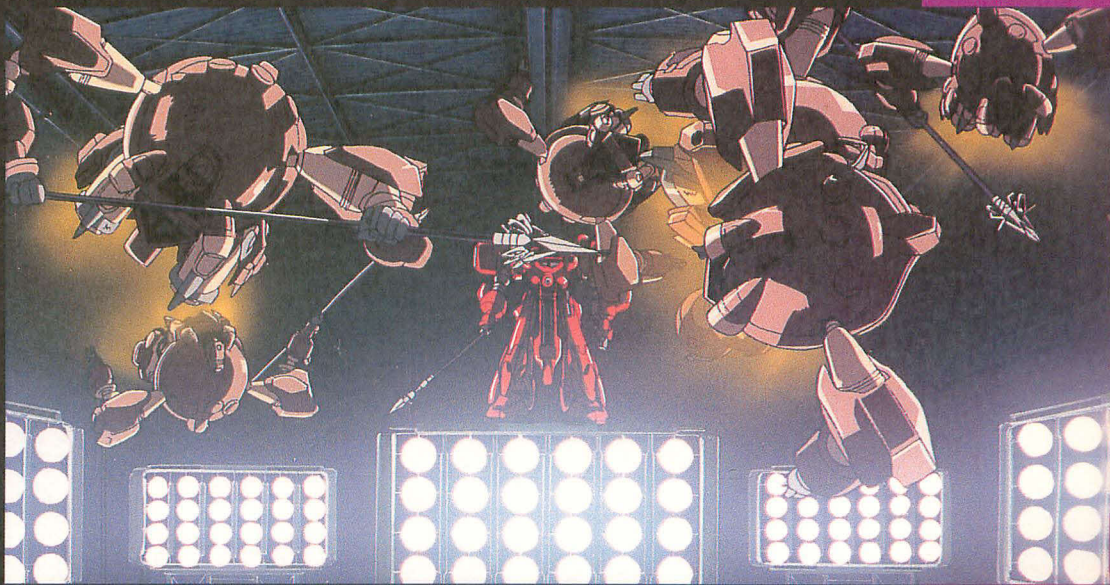
宇宙軍を目の敵にしている統合軍の将校アズマの妨害にあいつつ、ルリ達がアマテラスの調査を始めた時、異変が起きた。コロニー内の全てのコンピュータウィンドウに「OTIKA」の文字が表示され、操作できなくなったのだ。ルリは、敵の襲来を予感し、ナデシコBに走り戻る。彼女は考えていた。「OTIKA」の文字は、あのテンカワ・アキトと何か関係があるのだろうかと。

OTIKA

ボソン反応増大
JUMP OUT
識別不能
OTIKA OTIKA OTIKA
迎撃
『アマテラス』
ディストーション・フィールド出力
WARNING
警戒中
外部通信漏洩注意

火星の後継者

正体不明の黒い戦闘機・ブラックサレナがボソンジャンプして出現し、アマテラスを強襲した。ブラックサレナは驚異的な機動力で、守備艦隊、スバル・リョーコ率いる機動兵器部隊の攻撃を、巧みにかわす。さらに出現した謎の戦艦ユーチャリスが機動兵器をひきつけている間に、ブラックサレナは機動兵器形態に変形し、アマテラス内に侵入。秘密にされていた第13番ゲートに突入した。リョーコもそれを追ってゲートに。追跡劇の最中に、ウィンドウでリョーコと、ルリは再会を果たした。

一方、「火星の後継者」と名乗る組織が蜂起。アマテラスを占拠した。彼らは以前より、関係者としてアマテラスに潜入していたのだ。

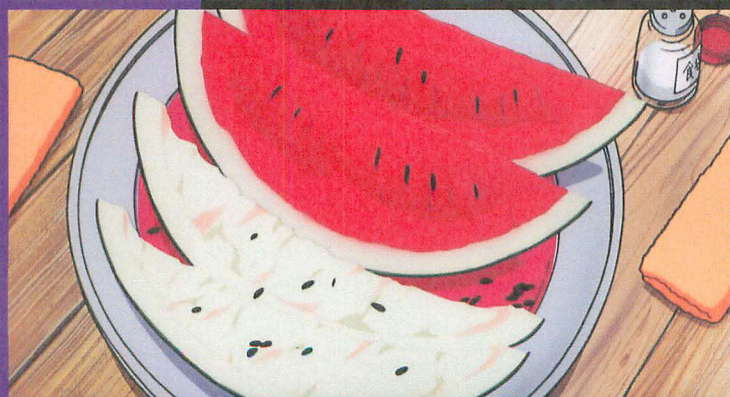
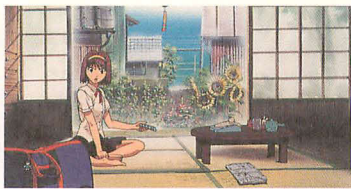
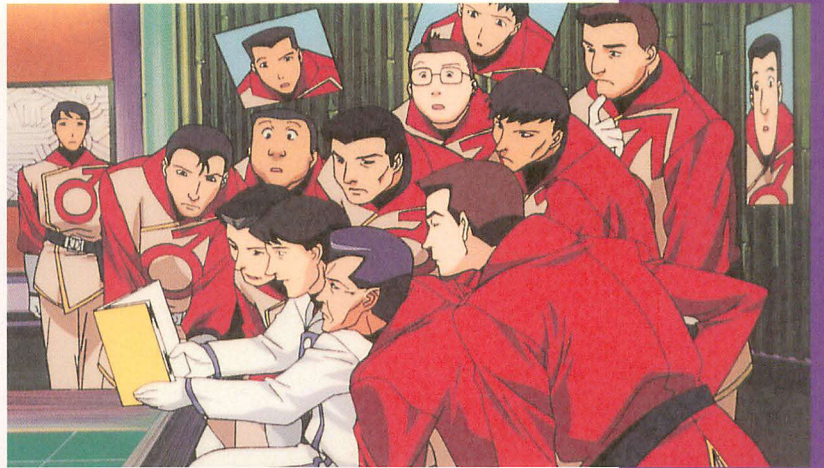
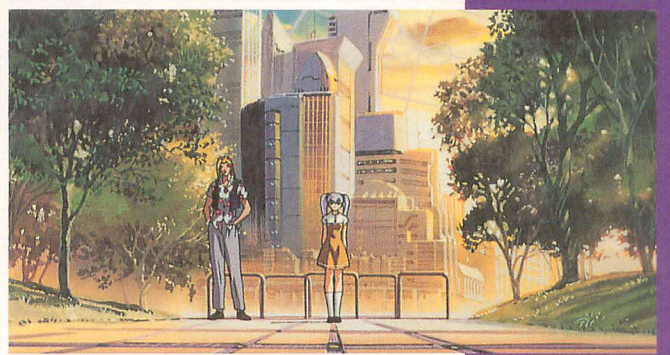
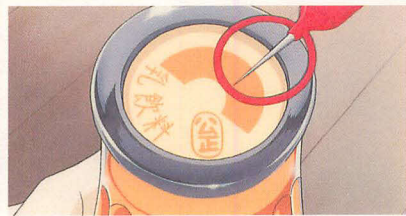
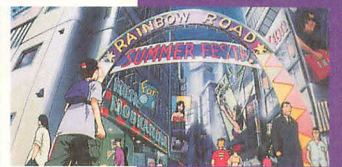
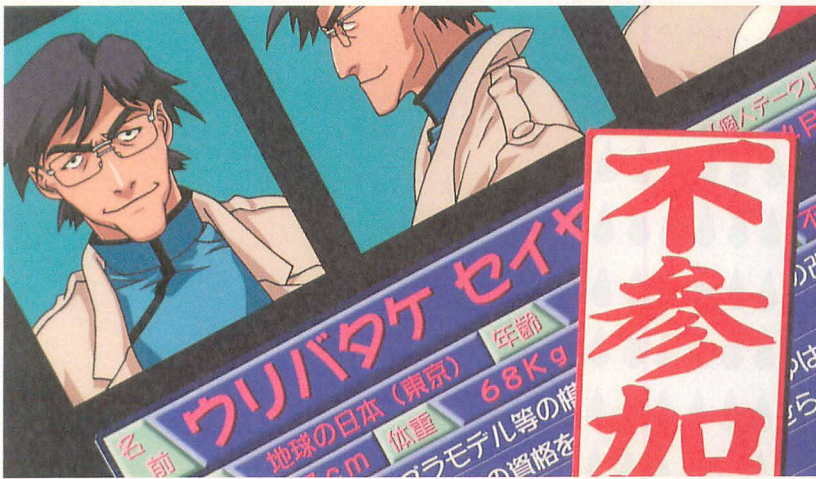
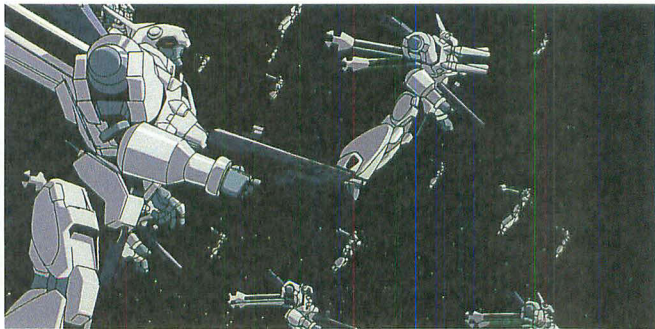
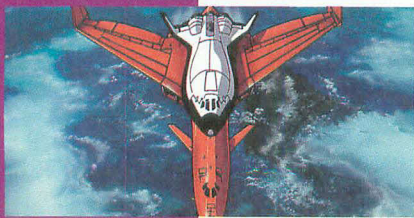
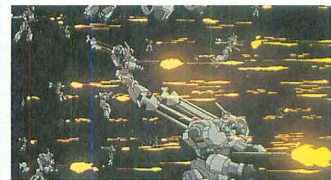
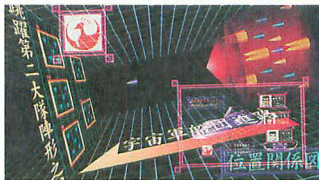
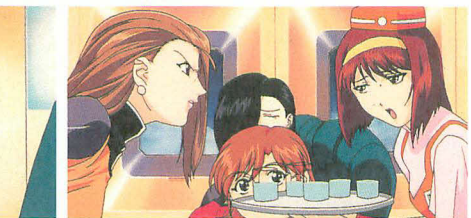
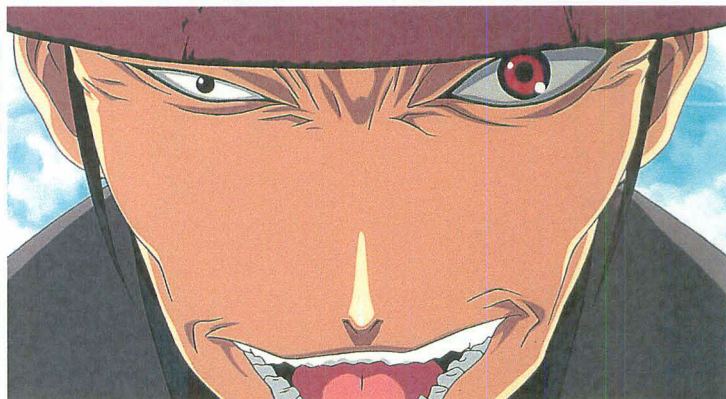
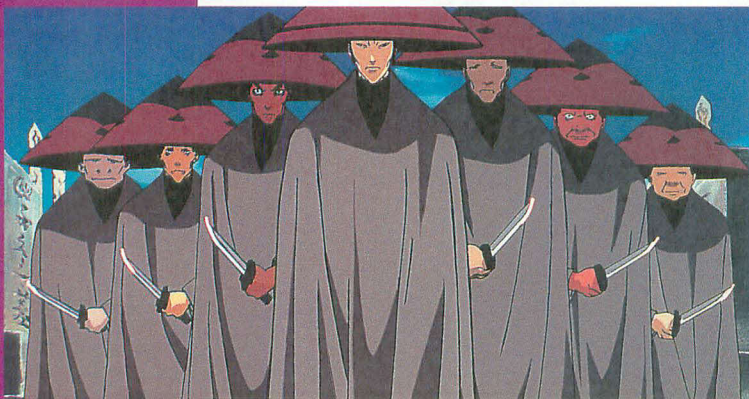
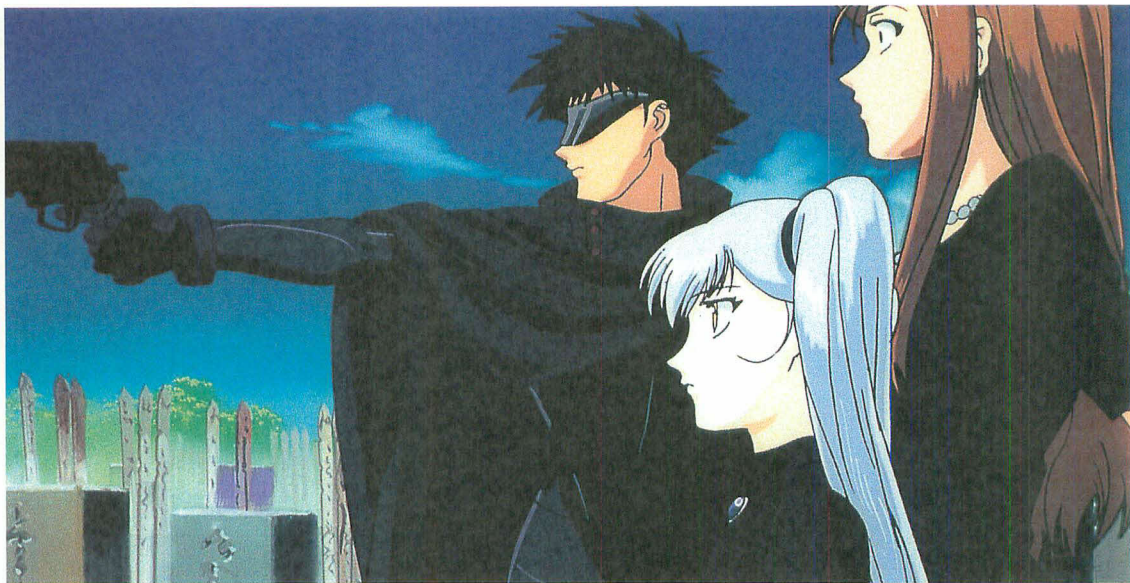
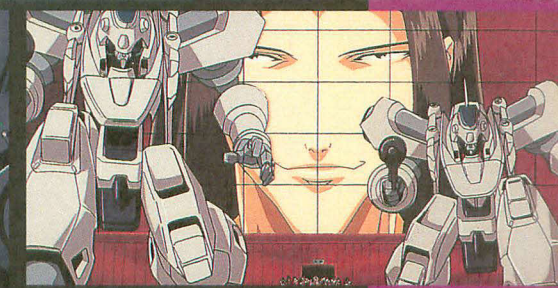
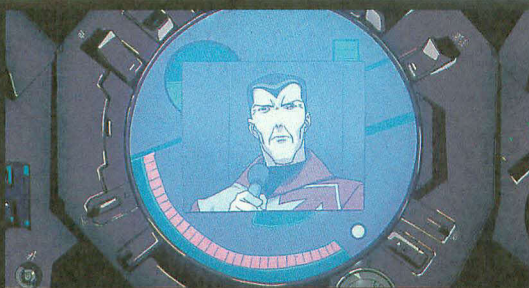
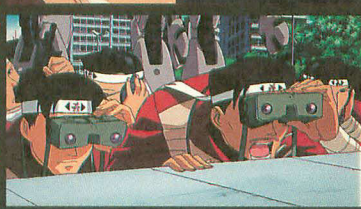
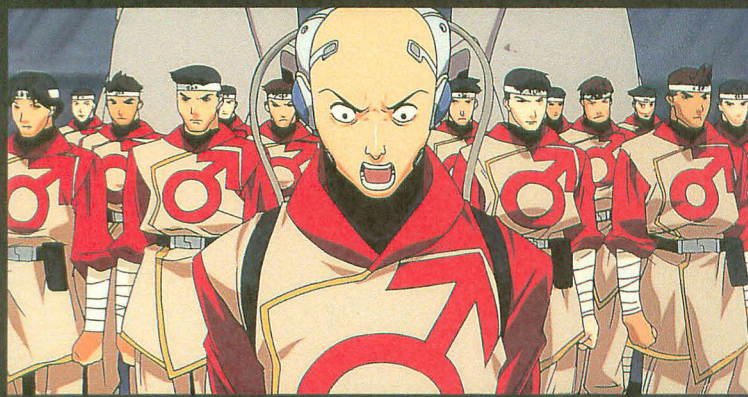
ブラックサレナとリョーコ、そして、ルリは、隠されていた秘密ドックで、3年前に火星の遺跡とともに宇宙の彼方へ飛ばしたはずの、旧ナデシコを発見した。そこに「火星の後継者」の暗殺集団、北辰達の機動兵器が出現し、リョーコ達を襲う。その戦いの中、ルリとリョーコはブラックサレナのパイロットが、アキトであることを確信した。「火星の後継者」はアマテラスを爆破。ナデシコBとリョーコは脱出したが、ブラックサレナは行方不明となった。

星の数ほど、人がいて、星の数ほど……

「火星の後継者」の実体が判明した。首謀者は、かつての木連のリーダーであった草壁春樹。彼らはボソンジャンプの技術を独占し、現在の政治体制を転覆させようというのだ。

宇宙軍は、ボソンジャンプの鍵となる遺跡を「火星の後継者」から奪還するために、独立ナデシコ部隊を組織。極秘任務であるため正規の軍人は使わない方がよいと判断し、民間人でメンバーを構成することになった。

ルリ達は、プロスペクターの力を借りて、軍を辞め、それぞれの人生を歩み始めている旧ナデシコの乗組員達を集めることにした。マンガ家になっていたヒカル、バーのママになっていたイズミ、教師になっていたミナト。奥さんと上手くいっているらしいウリバタケ。ルリの脳裏を、かつてのナデシコでの思い出が去来する。かつてのナデシコの仲間達、かつてのユリカ、かつてのアキト。そして、現在のアキトは……。

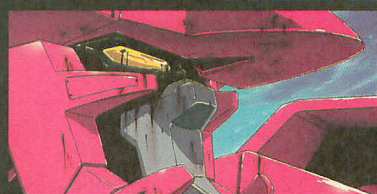
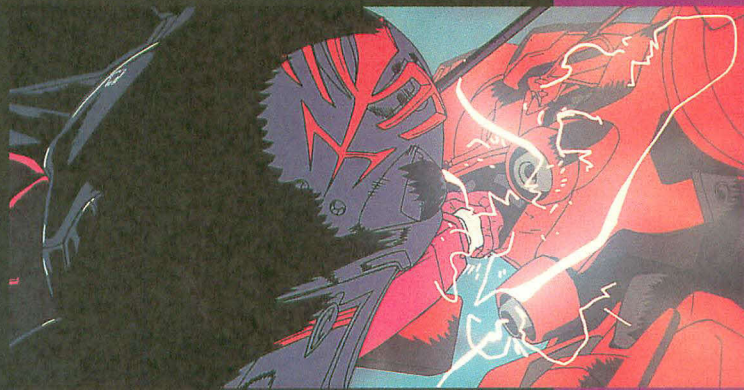
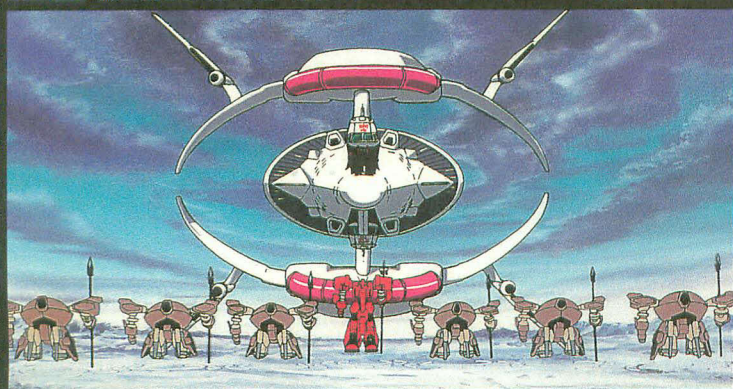
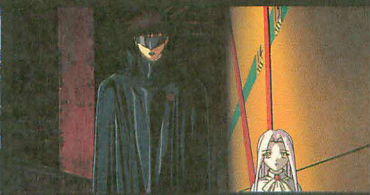
その間にも、「火星の後継者」はヒサゴプランのターミナルコロニーを陥落させていた。彼らはA級ジャンパーとしての能力を持つユリカを遺跡システムと融合させ、彼女をボソンジャンプシステムをコントロールするユニットとして使っていたのだ。彼女のアキトへの想いすらも利用して。

夏の空
ジュンに
遅い
春の風
RAINBOW ROAD
SUMMER FESTA
ウリバタケ セイヤ
名前
年齢
地球の日本(東京)
体重
68Kg
プラモデル等の模
不参加
女
男
第十三番ターミナルコロニー『サクヤ』攻防戦
AKITOは
ラブの合言葉
LOVE
AKITO
大好き
好き好き
AKITO
ボソンジャンプ

アナタノオモイデニ、サヨナラ。

ルリは、ついにブラックサレナのパイロットと出逢った。だが、彼はすでにかつてのテンカワ・アキトではなかった。「火星の後継者」によって愛するユリカを奪われ、自分自身も実験台にされ、視覚や味覚などの感覚を失ってしまった彼は、復讐に生きる男となっていた。

複雑な想いを胸に、ルリはかつての仲間たちとスペースシャトルへ乗り込んだ。目的地は最新鋭機ナデシコCが待つ、月面のネルガルドック。だが、ルリ達のシャトルを「火星の後継者」の奇襲部隊が襲う。シャトルは、民間船に偽装するために武装を外しており、反撃することはできない。ミナトの操縦で敵の攻撃をかわしつつ、敵中突破をしようとするが、さらに敵は機動兵器部隊を送り込んでくる。そこに月面にいるはずのナデシコCがボソンアウトして出現。グラビティブラストで敵を一掃した。ナデシコCには、ハーリーと共に、意外な人物達が乗り込んでいた。

その頃、「火星の後継者」はクーデターの最終段階に移っていた。地球連合本部ビルをはじめとする、地球上の重要な施設にボソンジャンプで直接、決死隊を送り込み、占拠しようとしていたのだ。

ナデシコCは「火星の後継者」の本拠地となっている火星極冠遺跡へと跳ぶ。そして、アキトも謎の少女ラピス・ラズリとともに、火星へ向かっていた。

南央美（ホシノ・ルリ役）
今回はもーう、演じる前から、ドキドキでした。
考えすぎで、体中、うにになっちゃう位、緊張しました。
ＴＶ版からのルリをずっと応援して下さっている方も、今回はじめて行ってみるか！と来て下さった方も、全ての方々に、楽しんでいただければ、全身全霊かけたかいがあったな（笑）と思います。

上田祐司（テンカワ・アキト役）
今度も一味違うらしいよ。

桑島法子（ミスマル・ユリカ役）
ユリカとの出逢いから２年…。
そう考えると、とても感慨深い夏デス。
様々な出逢いをくれたこの作品への感謝の気持ちを込めて、悔いのないように演じました。（なんだか卒業文集に載せるコメントを書いている気分…）
せつなさも笑顔にかえて…
　輝く明日のために――。
thanks.

三木眞一郎（高杉三郎太役）
自分は、ＴＶでは２回ほどしか出番がなかったのですが、今回、スクリーンで成長した自分を、ぜひ、見ていただきたいと思っております。by サブロウタ。

日髙のり子（マキビ・ハリ）
久しぶりに佐藤監督にお目にかかりました。
ナデシコは初参加でしたが、監督らしい未来っぽさと、昔っぽさが溶け合う世界が懐かしく、すんなりと入ることができました。
ルリちゃんと対照的なキャラクターとして、明るさ素直さを全面に出す形で演じてみましたが、いかがでしたでしょうか？
電話のシーンでテストの時だけでも"はりもぐハーリー"の声で、かましてやろうと思っていたのですが、根が小心者なため企画倒れで終わってしまったことが、悔やまれます。
初参加の私に、細かい設定の部分を解説してくれた央美ちゃん、本当にありがとう。
"しまじろう"とツーショットの写真は、ひそかな自慢です（笑）。

伊藤健太郎（アオイ・ジュン役）
ジュン君は長髪になってよけいに女っぽくなってますね。軍人としての地位は上がったみたいですけど、相変わらず女の子に振りまわされるかわいそうな奴です。いつになったら本当の春がくるのでしょうか？　ともあれ久々にジュン君に会えて、メンバーみんなに会えて、楽しいアフレコでした。

横山智佐（スバル・リョーコ役）
劇場に足をお運びくださって、どうもありがとうございました。
ぜひ、ご感想おきかせくださいね。
ナチュラルライチの格闘ゲームが発売されることを期待しつつ…
またお会いしましょう。

菊池志穂（アマノ・ヒカル役）
すごい人数でした。
ヒカルはプロのマンガ家になってましたが、ノリはあの頃のままです。
そうそう、"カゲパイル"って何だったんだろう？

長沢美樹（マキ・イズミ役）
マキ・イズミ……。どんなおばあさんになるの？
さあ、みんなで考えよう！　答えを待ってるぜ。

高野直子（メグミ・レイナード役）
久しぶりにナデシコのメンバーの方にお会いできて、とても懐かしく、楽しかったです（その後のお酒も美味しかった!!）。
メグちゃんの活躍の場が少なかったのは残念でしたが、後藤（圭二）さんのお話によると、ソバカスもなくなってきれいになっていると言うことなので、出来上がりが楽しみです♥
やっぱり……もう一度通信士としてナデシコに乗りたかったですね……
でも、アイドルのメグちゃんとしても頑張ります!!
もちろん、高野直子も頑張りま～す!!

小野健一（プロスペクター役）
「歴史は、また、繰り返す。ま、ちょっとした、同窓会みたいなもんですかな…」

小杉十郎太（ゴート・ホーリー役）
おもしろい作品だったので現場はとても楽しかったです。

飛田展男（ウリバタケ・セイヤ役）
お久しぶりのナデシコ、お久しぶりのウリバタケ・セイヤ。
劇場で大暴れの機動戦艦ナデシコの活躍をみんなで見よう！
う～む、なつかしいフレーズだなあ。

真殿光昭（ムネタケ・ヨシサダ役）
今回初めて死んだムネタケ・サダアキの父が登場しました。やはりサダアキ同様、性格が一風変ってて、ユニー

クな人物ですね。大変面白味のある役でした。

岡本麻弥（ハルカ・ミナト役）

ほんとうに久し振りに“ナデシコ”のクルー達に逢えて楽しかったです♥　それにしても大人数…満員電車の中の様…💧
2日にわけてのアフレコだったので、逢えない方も居ましたが（残念）、マイクの前に立って皆でセリフを喋ると、ふっと“ナデシコ・ワールド”に戻れるものだなーと、ちょっぴり嬉しくなりました♥
また、いつか、どこかで、お逢いしましょうネッ♥

大谷育江（白鳥ユキナ役）

今回のナデシコはすごいぞー　いっぱいでてるぞー。
はいっここで問題です。
さてっ　一体何人でてきたでしょーぉか。
ちっちっちっちっちっ　ぶ――!!
こたえは、あっ出番だごめん　じゃあまたねー♥
っとっとっさいごに一言。楽しんでってねぇ。
んちゅ♥…投げキッスのおと。びゅ――っ

一城みゆ希（ホウメイ役）

久しぶりに、ナデシコのメンバー達と、御一緒できて、すごく楽しい時を過ごさせて頂きました。
劇場版のナデシコが、大ヒットする事を、祈ってます！
そしたら、又、みんなと一緒に、お美味いお酒を呑みましょう！
あなたのホウメイは、ビールが大好きです。ヨロシクネ！

置鮎龍太郎（アカツキ・ナガレ役）

収録の4日程前に、1話から、アカツキ登場あたりまで、見返してなつかしんでました。
劇場版、シリアスだァ〜。チョコチョコ、ナデシコらしいお笑いは入っているけど、今回はスゴイなァ。
映画館のスクリーンで、自分も見てみたい。

永島由子（エリナ・キンジョウ・ウォン役）

エリナ役の永島です。ストーリー内容をはじめて知った時は、大きなしょーげきがありました。アフレコは……正直めっちゃ緊張しましたョォ！

三石琴乃（ガイド役）

劇場アニメ『機動戦艦ナデシコ』コースへようこそ！
本日皆様を御案内させて頂きます、ガイドは、私、マユミお姉さんで〜す♥
オメーラ、言うこと聞けよ。

林原めぐみ（ヒサゴン役）

え？　なんで？　どうして？　マジー？　うそー！
これだけ？　ほんとに？
あら…いいの？　まあ…びっくり。
皆さんお疲れ様でした。

仲間由紀恵（ラピス・ラズリ役）

結局、いろんな疑問が残ったままで、謎の少女『ラピス・ラズリ』とお別れしてしまいました。アフレコもなんだか、あっと言う間に終わってしまったような気がするのは私だけなのでしょうか？

安井邦彦（草壁春樹役）

草壁春樹というのはテレビシリーズのほとんど終わりの方に出てきた役ですが、今回また声を吹き込むチャンスがあって、嬉しかったです。何かタイホされちゃったみたいだけど、また出てきて暴れてほしいですね。

山寺宏一（北辰役）

「不気味でにくたらしい八虫類野郎。待ってました、こんな役を…。私自身、出来上がり、楽しみにしております。ヒッヒッヒッ…」

CHARACTER

作画監修／後藤圭二　原画／石井明治

NADESICO Characters for movie

Characters for movie

あおい-じゅん【アオイ・ジュン】

ユリカの幼なじみ。ＴＶシリーズでは、好きなユリカのことが心配なあまり、宇宙軍を捨ててナデシコにかけつけた。しかし性格の弱さが災いしてか、アキトのライバルにはなれず、最後の最後まで「ユリカのいいお友達」で終わってしまった。

戦争終結後もユリカへの想いを残し続けていたのだが、父親にアキトとの交際を反対されたユリカの相談にのってあげたり、あまつさえ彼女の家出を手伝い、アキトの家まで送りとどけてしまうなどの「いいひと」ぶりを発揮した。

その後、彼は戦艦アマリリスの艦長となり、劇場版冒頭ではブラックサレナに急襲されたコロニー「シラヒメ」の救援に向かうシーンで登場する。そこでボソンアウトするブラックサレナを目撃したため、事故調査委員会の査問を受けることになり、事実を証言するのだが、誤認の一言で切って捨てられてしまい、苦虫をかみつぶす。「火星の後継者」の蜂起以降は、極秘裏に独立ナデシコ部隊の編成をバックアップする任務を受けたのだが、疑惑をかぎつけたユキナに押し切られて、ついつい独立ナデシコ部隊のことをバラしてしまう。また、月へ向かうシャトルでは、ユキナにつきあわされてコスプレをさせられて、女性クルーのなぐさみものになるなど、ユリカから解放されても結局、彼は女性にもてあそばれる運命にあるようだ。

年齢は、25歳（戸籍上年齢。旧ナデシコクルーは、ボソンジャンプによる時間移動を経験しているため、肉体年齢は戸籍より約8ヶ月若い）。

あかつき-ながれ【アカツキ・ナガレ】

現在もネルガル会長。ＴＶシリーズにおいてはエステバリスのパイロットとしてナデシコに搭乗しながら、裏では火星の利権を独占すべく様々な謀略をしかけていた。『ゲキガンガー』的な「正義」や「思い込み」に対して冷めた価値観を持つ彼は、ナデシコ乗船中は、ことあるごとにアキトと対立。自分の野望のために生きようとしたが挫折してしまった。

戦後もネルガルの会長を続けるが、新地球連合創設と、それに伴う統合軍の設立によって様々な利権を失い、現在、会社は落ち目になっている。劇場版ではシャトルで待機する独立ナデシコ部隊に楽屋から通信を送るシーンが初登場で、あいかわらずの軽妙さと毒舌ぶりを見せる。

あきやま-げんぱちろう【秋山源八郎】

新地球連合宇宙軍の少将。かつては木連将校としてナデシコに敵対した。三郎太はその時の部下。生真面目な軍人で、かつて直属の上司であった草壁と敵対することになる。

あずま【アズマ】

劇場版新登場人物。ヒサゴプランのターミナルコロニー「アマテラス」の警備を任されている統合軍准将。粗野で短気、声デカい、マユ毛太い、暑苦しいスキンヘッドのおっさんで、ヒサゴプランに絶対の自信を持っている。ルリや三郎太に青スジ立ててかみつくが、あっさりといなされる。統合軍結成以前の、勢力が強かった頃の宇宙軍に恨みがあるらしく、宇宙軍を目の敵にしている。

ある意味、職務に忠実な軍人であり、ブラックサレナの襲撃の時は、被害覚悟で敵をコロニーに止まらせて狙い撃ちしろと命令する。

あまの-ひかる【アマノ・ヒカル】

旧ナデシコクルーのひとり。ＴＶシリーズではエステバリスのパイロットとしてナデシコに乗船していた。

アニメファンで同人誌経歴をもっていた彼女は、戦争が終わると同時に軍人をやめ、マンガ家デビューを果たした。そもそも軍に入ったの理由のひとつが、マンガのネタ探しであったらしい。少年誌で熱血漫画の連載を持っていたが、ルリを助けるために独立ナデシコ部隊に参加する。

年齢は、23歳（戸籍上年齢）。

あららぎ【アララギ】

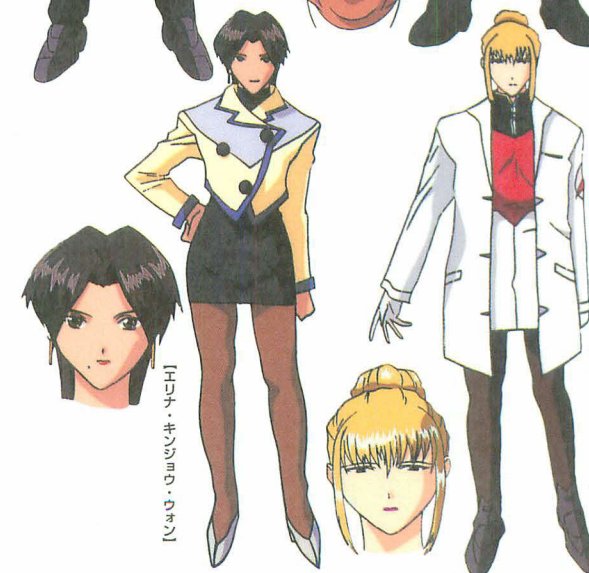
劇場版新登場人物……のようで、実はそうではない。ＴＶシリーズ第19話「明日の『艦長』は君だ！」にチラリと出てきた木連の士官。現在は宇宙軍所属で、戦艦ライラックの艦長。階級は大佐。月へ向かう独立ナデシコ部隊のシャトルを護衛する艦隊の指揮官。ルリを崇拝しており、彼女の乗ったシャトルに追いすがる積尸気部隊を迎撃した。

いねす-ふれさんじゅ【イネス・フレサンジュ】

Ａ級ジャンパー。アキトが火星ユートピアコロニーにいた頃、アキトを慕う少女であったが、不可抗力のボソンジャンプによって20年前の火星に飛ばされて記憶を失ってしまう。少女時代のニックネームはアイちゃんだった。

以降、ネルガルに保護されながら成長し、ナデシコに搭載されている相転移エンジンの開発者としてＴＶシリーズに登場、知っていることはなんでも教えないと気がすまない「説明おばさん」として活躍した。

アキト、ユリカとおなじくＡ級ジャンパーである彼女は「火星の後継者」の誘拐リストにあがっていたが、アカツキが先手を打ち、飛行機事故で死んだと報じて、敵の目を欺いた。以降、ネルガル内でボソンジャンプの研究に参加していた。

年齢は、33歳（戸籍上年齢）。

うりばたけ-せいや【ウリバタケ・セイヤ】
旧ナデシコクルーのひとり。青春を不完全燃焼していた中年オヤジだったが、TVシリーズでは技術者としての異能をナデシコでいかんなく発揮してくれた。戦争終結後は艦を降り、元の修理工として妻と子を抱えながらの生活に戻る。彼を迎えにきたルリは、彼の妻オリエのお腹が大きくなっているのを見て、彼のスカウトをやめてしまうのだが……。
年齢は、34歳（戸籍上年齢）。

えりな-きんじょう-うぉん【エリナ・キンジョウ・ウォン】
旧ナデシコクルーのひとり。ネルガルの会長秘書で、TVシリーズではアカツキに付き従って、副操舵士としてナデシコに乗船していた。上昇志向の強い彼女は、正反対の生き方をしているユリカのやることなすことが我慢できず、ことあるごとにイジメようとしたのだが、まったくの空回りに終り、最後にはナデシコクルーたちの自分勝手ぶりにも理解を示すようになった。
終戦後もネルガルで職務にはげみ、現在は宇宙開発部の部長を務めている。

おおいし【オオイシ】
統合軍・戦艦いざよい艦長で、階級は中佐。木連出身の軍人で、草壁の主張に同調して極冠遺跡にかけつけ、草壁と握手する。

かわぐち【カワグチ】
劇場版新登場人物。木連出身の軍人で「火星の後継者」に属している。決死隊として地球連合総会議場に攻め込んだ部隊の指揮官。

くさかべ-はるき【草壁春樹】
「火星の後継者」首班。大戦中の階級は中将で、木連の実質的なナンバー1だったが、2198年に「熱血クーデター」が起き、その混乱の中で行方不明となっていた。
彼は在野に忍び「火星の後継者」を組織して、歴史の表舞台に再登場した。木連時代になしえなかった野望、地球と木連の支配を果たすため、彼は火星極冠遺跡を占拠すると、ボソンジャンプを使った乾坤一擲の最終作戦を発動させようとする。

ごーと-ほーりー【ゴート・ホーリー】

旧ナデシコクルーのひとり。TVシリーズではネルガルの社員としてナデシコに乗船した。無骨でマジメな実務家として縁の下の力持ち的役割を果たす。ナデシコではミナトと一時的に恋愛関係にあった。
戦争終了後は、ネルガル会長室警備部第3課（ネルガルシークレットサービス）に所属。旧ナデシコクルーの監視と護衛、ライバル社への諜報活動や秘密工作などをしている。

さわだ【サワダ】
劇場版新登場人物。ヤマサキの部下で、ボディガード然としたグラサン男。

しらとり-ゆきな【白鳥ユキナ】
木連出身の少女。お転婆でしたたかな女子高生。
極度のブラザーコンプレックスで、TVシリーズでは、兄・白鳥九十九と、彼が恋をした地球人・ミナトの仲を裂くために、単身ナデシコに乗りこんだり、少女とは思えない行動力を発揮した。兄の死後は、いつのまにかナデシコに順応し、ミナトと行動を共にするようになる。戦後はミナトに引き取られる形でオオイソシティの高校に通い、外交官を夢見たりもしたが、今は陸上に一生懸命で、夏のインターハイに出場するなど大活躍のようだ。劇場版ではジュニアメンバーに抜擢されたことをミナトに報告すべく家路を急ぐシーンで初登場する。ミナトの外出を不審に感じるやいなや「あなたのユキナになりますから」と泣き落としでジュンの口を割らせて、強引に独立ナデシコ部隊に参加してしまうなど、そのバイタリティは、あいかわらずだ。

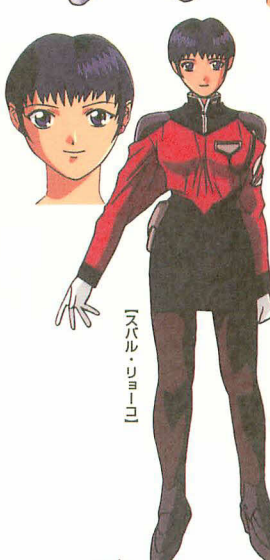
しんじょう-ありとも【シンジョウ・アリトモ】
劇場版新登場人物で、草壁の部下。統合軍中佐でコロニー「アマテラス」司令部にてブラックサレナ襲撃の防衛指揮をとる。ブラックサレナの侵入後、プラン乙の発動を宣言し「火星の後継者」を名乗り、蜂起。「アマテラス」を占拠し、これを爆破した。
「火星の後継者」の実質的なNO.2。

すばる-りょーこ【スバル・リョーコ】

旧ナデシコクルーのひとり。TVシリーズではエステバリスのパイロットとしてナデシコに赴任した。他人に誇れるものを自分の中に見つけられなかった彼女は、髪を緑に染めたり、つっぱった態度を取って他人に接してきたが、アキトらとの交流によって、心のトゲを抜いていった。
戦後は宇宙軍から統合軍に転属し、パイロット教官として軍に残った。現在はエステバリス隊「ライオンズシックル（獅子の大鎌）」のリーダー。劇場版冒頭のコロニー「アマテラス」での戦闘ではエステバリス隊を指揮して、ブラックサレナと戦うシーンで登場。サレナを追って13番ゲートから侵入、サレナにワイヤーを撃ちこんで、ルリとサレナの間に回線をつなげる。その時サレナのパイロットが「リョーコちゃん」という呼び方をしたことから、パイロットがアキトであることを直感した。その後はなりゆきで独立ナデシコ部隊に参加する。
ちなみに現在の紺色が、彼女の本当の髪の色である。ナデシコを降りた後に一度、髪を伸ばしたが、アキトの死を知り、以前より髪を短くしてしまった。
年齢は、23歳（戸籍上年齢）。

たかすぎ-さぶろうた【高杉三郎太】
戦時中は木連将校としてナデシコと対峙した。その時はデンジンのパイロットで、ガチガチにお堅くマジメな軍人さんであった。
新地球連合設立後は、連合宇宙軍戦艦ナデシコCの副長となり、ルリをサポートしている。ブリッジでおミズのお姉さんや女子高生からの留守電映像を見てニヤニヤし、ハーリーに皮肉を言われたりもする（でもこたえない）。ナンパでお気楽と、木連時代とは性格がまるで変わったように見えるが、根はマジメ。ハーリーのいい兄貴分でもある。現在の階級は大尉。乗機はスーパーエステバリスで、リョーコ機を回収した縁から、リョーコにちょっかいをかけはじめる。25歳。

たかはし【タカハシ】
劇場版新登場人物。コロニー「アマテラス」でヤマサキと一緒に歩いていた白衣の男で、極冠遺跡ではヤマサキと会話、裸のユリカに服を着せたことについての話をする。

たに【タニ】
劇場版新登場人物。ジャンプ実験ドームの主任で、ハーリーのジャンプに立ち会った。

つきおみ-げんいちろう【月臣元一朗】

アカツキの部下。大戦中は木連将校として最前線で戦った。ユキナの兄・白鳥九十九の親友であったが、草壁に命じられて彼を暗殺した。

その一件で彼の中の何かが壊れたのだろうか。「熱血クーデター」においては重要な役割を果たすものの、失踪。

行く当てもなくさまよっていたところをネルガルに拾われた彼は、新地球連合設立後、ゴートと共にネルガルシークレットサービスの一員として働いていた。北辰一味との戦いでは、木連式柔を披露する。

てんかわ-あきと【テンカワ・アキト】

ＴＶシリーズの主人公。

火星ユートピアコロニーの生き残りで、コックを志望していたのだが、図らずもナデシコに乗艦することになった。エステバリスのパイロットとしての才能を発揮してしまったことがきっかけで、戦争に巻きこまれていったのだった。彼は『ゲキガンガー』的な「正義」や「思い込み」を、心の支えにしようとしていた。だが、同じ『ゲキガンガー』を信じる木連の「正義」が独善であることを目の当たりにしてしまい、アイデンティティが大きく揺らぐのだった。そして、戦いの最後に彼が見つけたものは――。彼にとって、ナデシコの旅は、自分を見つめ直す旅であったのかもしれない。

ＴＶシリーズ終了後、サセボに抑留されていた時期は、以前、世話になっていた雪谷食堂で料理の修行に励んでおり、休戦条約の締結後は、ラーメン屋台を引き始めた。その後、ユリカの父とモメたりもしたが、2199年6月にユリカと結婚。

だが、その新婚旅行中のシャトルが爆破事故を起こし、彼は帰らぬ人となる……。その事故は、「火星の後継者」がＡ級ジャンパー誘拐のために仕組んだものだった。

彼とユリカが「火星の後継者」の研究所でボソンジャンプに関する実験のモルモットとなっていたところ、ネルガルシークレットサービスのゴートや月臣によって助け出されるが、その時、ユリカの救出は失敗。彼自身は、実験のために、視覚や味覚などの感覚を失ってしまっていた。

ユリカの奪還と復讐を誓った彼は、そのまま旧ナデシコクルーの前に姿を現すことはなく、ネルガルに匿われ、「火星の後継者」と戦う日にそなえていた。この時期に、彼は月臣によって木連式柔等の格闘術等を授けられている。

劇場版冒頭では、彼は黒い機動兵器・ブラックサレナに乗り、ラピス操るユーチャリスと共にヒサゴプランのターミナルコロニーを強襲。つづいてラピスとともにコロニー「アマテラス」を襲撃、コロニーの司令官ですら知らぬ秘密の13番ゲートから内部に侵入し、遺跡システムとシステムに組みこまれたユリカを発見する。そこで北辰の夜天光と対峙し、いったん生死不明となるが、地球に戻ってきたルリの前に姿を見せる。

年齢は、23歳（戸籍上年齢）。

はるか-みなと【ハルカ・ミナト】

旧ナデシコクルーのひとり。ＴＶシリーズでは某大会社の秘書をやめて、操舵士としてナデシコに乗船した。包容力のある女性で、ルリに対して初めて優しく接したのも彼女であり、敵である白鳥を初めて理解しようとしたのも彼女であった。白鳥とは恋に落ち、そのせいで白鳥の妹・ユキナに命を狙われたりもしたのだが、それが縁で身よりのないユキナを引き取ることになり、戦後は共にオオイソシティへ移り住み高校教師となった。担当教科は数学。

独立ナデシコ部隊には参加しないつもりでいたが、無理をしているルリをみて、心配になった彼女は参加を決意する。

年齢は、27歳（戸籍上年齢）。

ぷろすぺくたー【プロスペクター】

旧ナデシコクルーのひとり。ＴＶシリーズでは、ネルガルのお目付役＆経理としてナデシコに赴任。職務に忠実な人物に見えるが、シリーズ後半では、アカツキの謀略を暴き、ネルガルに反旗を翻した。そもそも、「人格に問題はあっても、能力は最高」という基準で、ナデシコクルーを人選したのは彼であり、旧ナデシコの独特のムードを作り出したのは彼といっていいかもしれない。勿論、プロスペクターは本名ではないが、社内でもこの名前で通している。本名は不明。実は『ナデシコ』で一番謎が多い人物は彼かもしれない。

終戦後はネルガル重工会長室秘書課に配属。今回の劇場版では、旧ナデシコメンバーの召集に尽力する。

ほうめい【ホウメイ】

旧ナデシコクルーのひとり。厨房を担当し、旧ナデシコでは数少ない「オトナ」であり、クルーの胃袋と心のケアをしてくれていた偉い人。終戦後は「日々平穏」なる料理店を経営。世界各地から集めた調味料は健在である。

ハーリーのことに悩むルリに「わかっていても割り切れないものだってあるよ」と、ハーリーが旧ナデシコクルーにヤキモチを妬いていることを優しく諭す。ちなみにルリが食べたのはラーメンで、三郎太はパエリア、ハーリーが火星丼だった。

ほうめいがーるず【ホウメイガールズ】

ホウメイの元で、ナデシコの調理を一手に引き受けていた旧ナデシコクルーの五人組（左から、ミカコ、ハルミ、サユリ、ジュンコ、エリ）。元々、歌ったり踊ったりするのが好きな女の子達だったが、戦後はメグミのつてで芸能界デビューを果たし、本当にアイドルになってしまった。

劇場版ではプロスペクターとホウメイがシャトルを見送った後で、登場。

ほくしん【北辰】

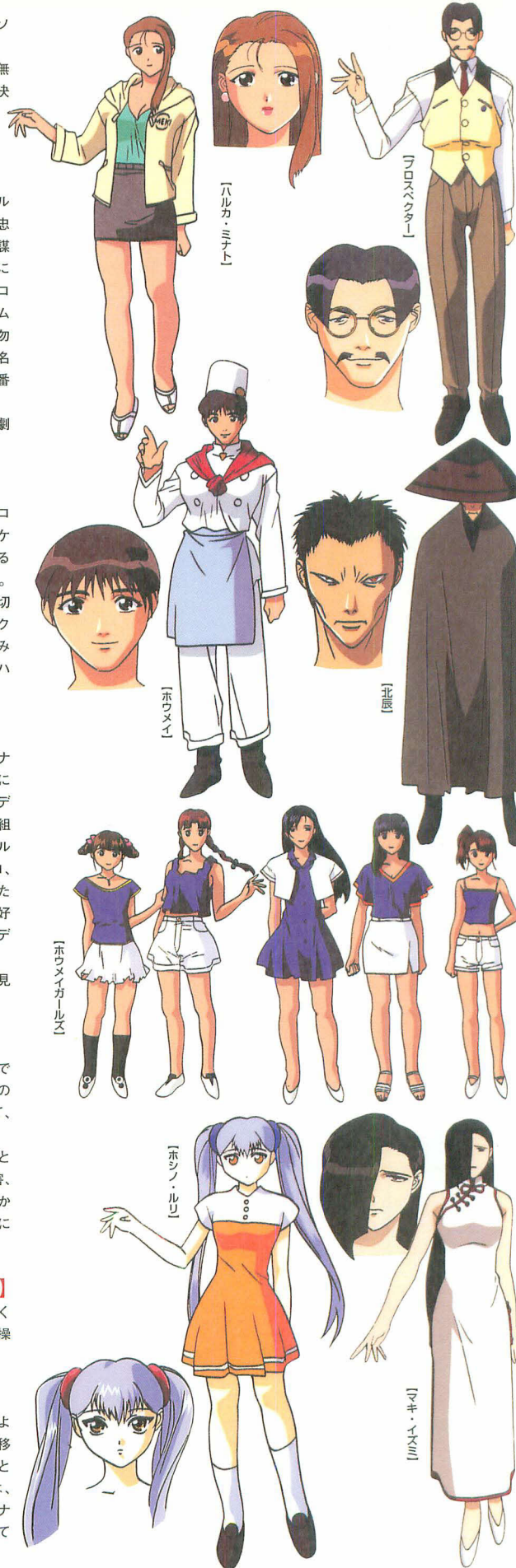
劇場用新登場人物。草壁直属の暗殺集団のリーダーである。暗殺術に優れ、ロボット操縦もエース級。草壁の命を受け、Ａ級ジャンパー誘拐任務を遂行する。かつて、アキトやユリカを誘拐したのも、彼の一味。

初登場は冒頭シーン。機密保持のため、六人の部下とともにコロニー「シラヒメ」秘密ラボの科学者らを殺害、ボソンジャンプで脱出する。その後、ほとんど爆発しかけているコロニー「アマテラス」内にも夜天光とともに出現、見得をきってアキトと対峙した。

ほくしんろくにんしゅう【北辰六人衆】

劇場用新登場人物。北辰の部下たちで、それぞれがくせ者ぞろいの殺し屋。やはり暗殺術に優れ、ロボット操縦もかなりの腕前。六連に乗り込む。

ほしの-るり【ホシノ・ルリ】

本編の主人公。禁じられた技術である遺伝子操作によって人工的に生み出された少女であり、身柄を転々と移されながら、新世代戦艦ナデシコの専任オペレーターとして乗艦することになった。ＴＶシリーズにおいては、家族も友達もない環境で育ってきた彼女が、しだいにナデシコを「家庭」、クルーを「家族」と思うようになって

ゆく過程が描かれた。
遺伝子的な両親はピースランドの国王夫妻であることが判明していたのだが、親権が消滅していたことがわかり、戦争終了後にミスマル家に引き取られることになった。ユリカの家出に巻き込まれて、彼女はアキトのアパートへ転がりこみ、奇妙な家族ゴッコがはじまったが、その幸せも長くは続かなかった。アキトとユリカが帰らぬ人になってしまったのだ。
ナデシコを降りた後は、宇宙軍を辞めていた彼女だが、ナデシコＢの艦長として軍に復帰。現在の階級は少佐である。「史上最年少の天才美少女艦長」「電子の妖精」などと呼ばれ、軍部だけでなく世界的な有名人になっている。またジャンパーとしての遺伝子操作が行われており、Ｂ級ジャンパーの資格を持つ。劇場版冒頭では、ムネタケ父の命令を受けてコロニー「アマテラス」の臨検査察へ向かう。ブラックサレナの襲撃と共に現れたキーワード「OTIKA」になにかを感じた彼女は、ブラックサレナのパイロットがアキトではないかと思うようになる。
独立ナデシコ部隊の編成をまかされた彼女は、かつての仲間をクルーとして集めようと思い立ち、漫画のアシスタントをするはめになったりしながら、みんなと再会する。
ことあるごとにアキトのことを思い出すが、複雑な想いがあるようだ。
年齢は、16歳（戸籍上年齢）。

まき-いずみ【マキ・イズミ】

旧ナデシコクルーのひとり。ＴＶシリーズではエステバリスのパイロットとしてナデシコに現れ、寒いギャグをこよなく愛する不可解な人物として、異色の存在感を放っていた。ちなみに両親は漫才師。
戦後は軍を離れると、自分を見つめるために一年ほど世界各地を放浪していた。放浪中は、様々な武術や格闘技を学びながら、ギャグの腕も磨いていたようだ。旅の途中でバーのオーナーを暴漢から救ったのが縁で、帰国後、花目子（ケメコ）の雇われママとなる。店内にナデシコ時代の沢山の写真が貼ってあるところを見ると、ナデシコでの日々は彼女の中でも大切な思い出になっているようだ。
年齢は、23歳（戸籍上年齢）。

まきび-はり【マキビ・ハリ】

劇場版新登場人物。愛称はハーリー。ナデシコＢの副長補佐で、階級は少尉。ルリに淡い気持ちを抱いている。
泣き虫でよくすねるが、大人になりたいと背伸びもしている多感な１１歳。生まれはルリと似たようなもので、操作された遺伝子を持っている。自分なりにルリに役立っているという自負を得たい彼は、独立ナデシコ部隊の命を受けて、旧メンバーを召集しようとするルリに反発を覚えて、ケンカ別れをしてしまう。その後、町中をフラフラ歩いているところ、ミナトの胸と正面衝突、彼女に慰められてしまう。
ルリは彼のことを弟のように思っているようだ。

みすまる-こういちろう【ミスマル・コウイチロウ】

ユリカの父。ＴＶシリーズでは、超のつく親バカぶりを発揮、ユリカをかわいがろうとするあまり空振りばかりしていた。
ユリカとアキトとの交際には激しく反対していたが、その純な想いに打たれ、最後には祝福した。けれども目の中にいれても痛くないほどの愛娘は、ハネムーンで帰らぬ人になってしまうのだった……。
ＴＶシリーズでは連合宇宙軍の提督で、劇場版では総司令になっている。ルリの報告を受け、ナデシコＢメンバーに、独立ナデシコ部隊として遺跡システム奪還の密命を与えた。

みすまる-ゆりか【ミスマル・ユリカ】

ナデシコの初代艦長。ＴＶシリーズでは、艦長の重責に押しつぶされたりすることなど全くなく、犯罪的なほどに無邪気な性格で、周囲を振り回しながらマイペースで艦長の大任を果たし終わった。
ナデシコに乗っている間も、最初から最後まで「アキトはわたしのことが好き！」と信じて疑わず、戦争終結後も軍に残りながら、アキトの屋台を手伝って関係を深めた。反対していた父も説得し、見事、アキトとゴールインするが、新婚旅行のシャトルが事故によって爆破してしまい、帰らぬ人となる……だが、それは「火星の後継者」がある目的のために彼女を手に入れようと起こした事故であった。
「火星の後継者」たちは、Ａ級ジャンパーである彼女を仮死状態にし、ボソンジャンプを管理する遺跡システムと彼女を結合させることで、ボソンジャンプを自由にコントロールしようとしているのである。
年齢は、25歳（戸籍上年齢）。

むねたけ-よしさだ【ムネタケ・ヨシサダ】

ＴＶシリーズに登場したムネタケ提督の父親。連合宇宙軍に所属している。
階級は参謀長。ナデシコＢにコロニー事故調査を命じたのは彼。総会議場コンサートでベースを弾く。

めぐみ-れいなーど【メグミ・レイナード】

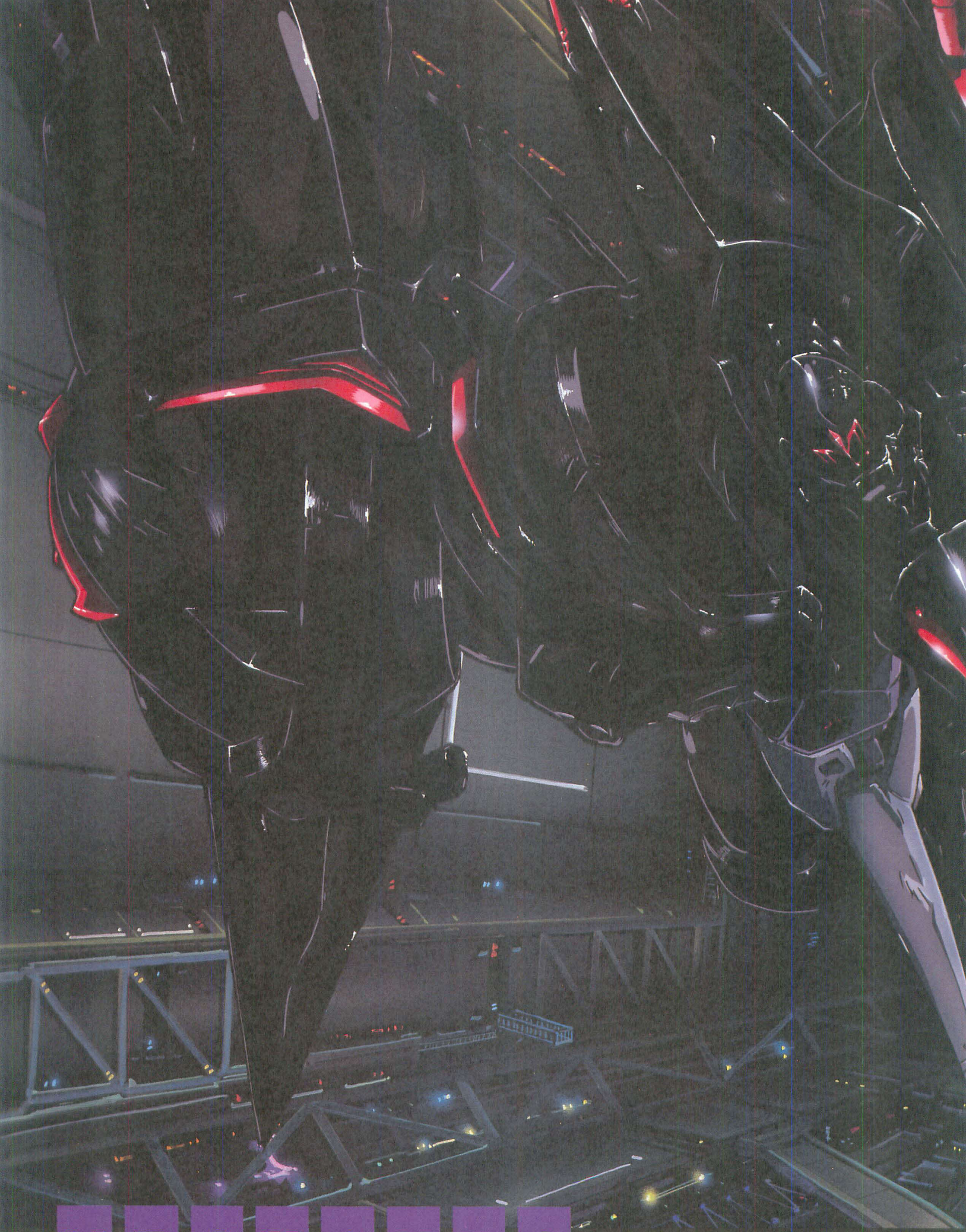
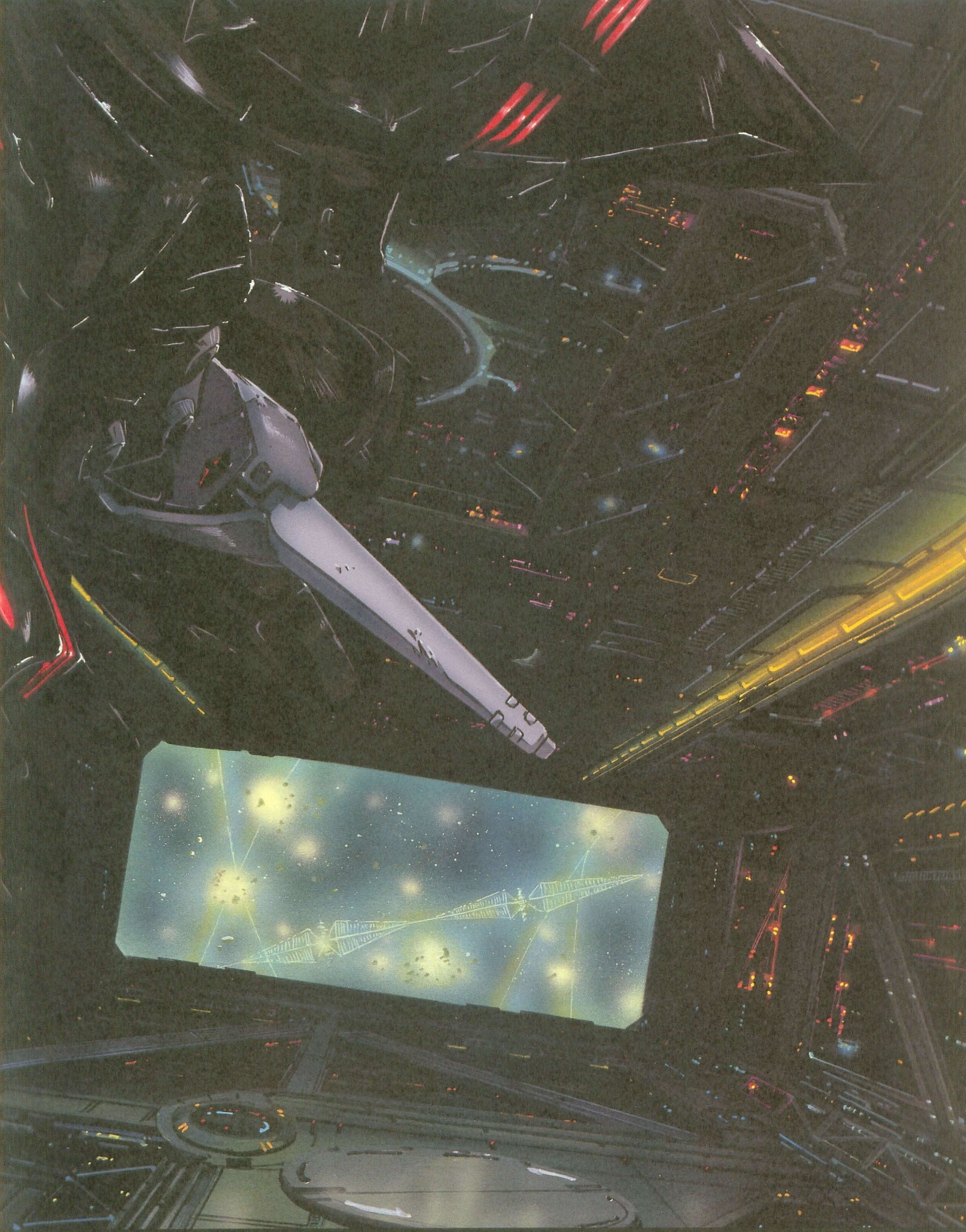
旧ナデシコクルーのひとり。ＴＶシリーズでは、声優としての能力をかわれて通信士としてナデシコに乗艦した。アキトに何かを感じた彼女は、彼に恋するようになるのだが、アキトの変化についてゆけず、恋愛感情も自然消滅した。
終戦後は声優業に完全復帰し「メグ姉」としてアニメ声優やラジオDJ、そして歌手に大活躍している。もう、アキトとのことは、いい思い出となっているようだ。
劇場版ではホウメイガールズと一緒に、シャトルを見送るシーンで初登場。
ちょっと女っぽくなってきた22歳（戸籍上年齢）。

やまさき-よしお【ヤマサキ・ヨシオ】

劇場版新登場人物。コロニー「アマテラス」に赴任しているコロニー開発公団の次官。ブラックサレナの襲撃を見て「アマテラス」の遺跡制御室に撤収命令を出し、極冠遺跡では服を着せたユリカを見てタカハシと会話を交わす。うるるん作戦解説時は和服で登場するなど、ワンポイントキャラにしては芸多し。

らぴす-らずり【ラピス・ラズリ】

劇場版新登場人物。ルリと似たような境遇で、研究所にいたところを「火星の後継者」によって強奪された。その後、空白の期間を経て、アキトと行動を共にするようになる。ラピスラズリの和名は「瑠璃」。彼女はもうひとりのルリなのだ。

【ミスマル・コウイチロウ】
【マキビ・ハリ】
【ムネタケ・ヨシサダ】
【ヤマサキ・ヨシオ】
【メグミ・レイナード】
【ラピス・ラズリ】

MECHANIC

原画／前田明寿　美術／プロダクション　アイ

メカニック辞典

Mechanics for movie

【あ】

あまてらす【アマテラス】
ヒサゴプランのメインターミナルコロニー。

あまりりす【アマリリス】
地球連合宇宙軍第三艦隊所属のリアトリス級宇宙戦艦。アオイ・ジュンが艦長をしている。劇中冒頭でシラヒメの救援に向かうが間に合わず。ブラックサレナを目撃することになる。

あるすとろめりあ【アルストロメリア】
ネルガル重工の開発した新型機動兵器。その開発にあたってはブラックサレナの技術が使われている。基本的にはエステバリスの発展形だが、なによりの特長として、6mサイズのロボットでありながら内蔵式ボソンジャンプシステムを搭載していることがあげられる。ただしジャンプの距離は100mから2〜3kmと、先の戦争で登場した、数十mサイズの機動兵器・マジンタイプと変わらない。短距離ジャンプによる敵への接近〜近接格闘戦を想定しているため、前腕部に巨大クローを内蔵。劇中では月臣が見事な奇襲を見せている。アルストロメリアとは夢百合草のことで、花言葉は「持続」。

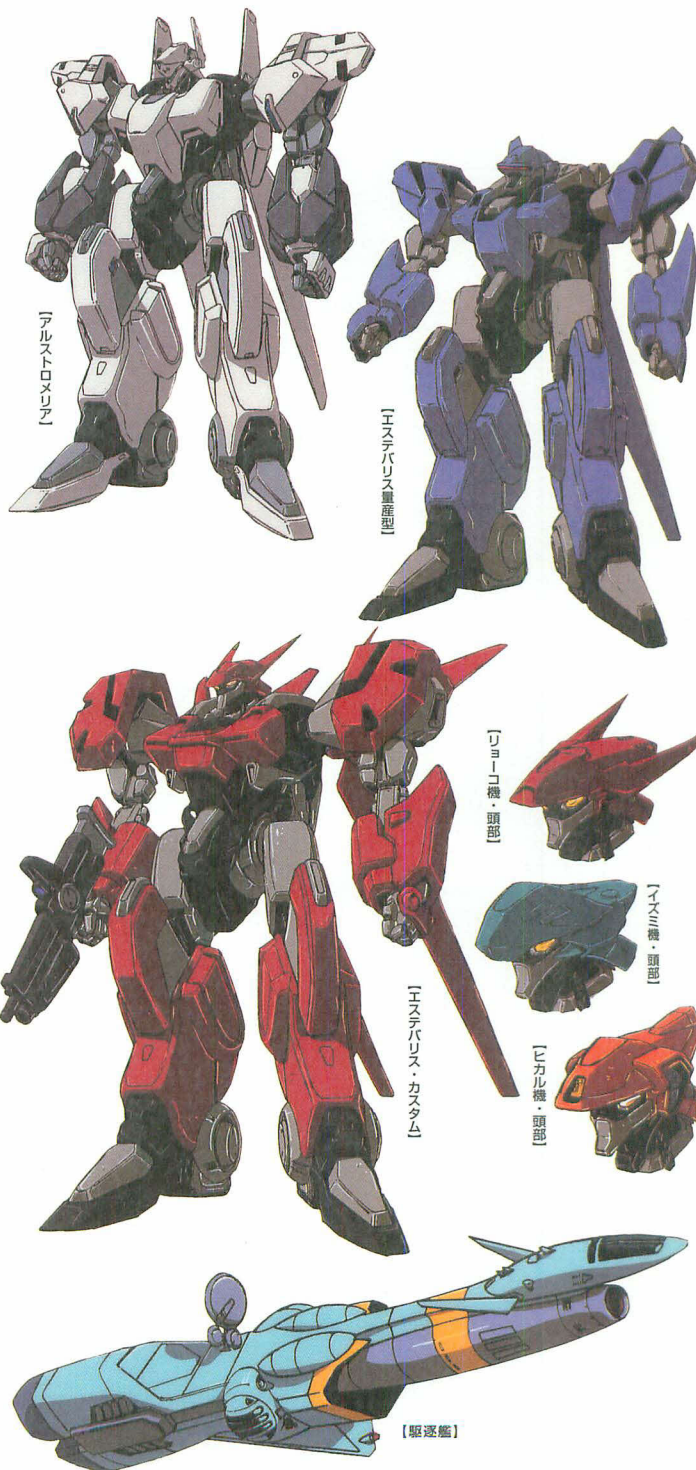
いざよい【いざよい】
「火星の後継者」に賛同したオオイシ中佐の乗る統合軍の戦艦。極冠遺跡でボソンアウトしてきたナデシコに遭遇するが、ルリにハッキングされ、たちまち無力化されてしまった。

いなみぼし【いなみぼし】
統合軍駆逐艦。サクヤ攻防戦に参戦したが「火星の後継者」の跳躍第二小隊により、パンジーII、とみてぼし等と共に撃沈させられた。

えすてばりす【エステバリス】
ネルガル重工が開発した全長約6mほど（換装するオプションによって変化する）の近接戦闘用人型戦闘兵器シリーズ（機動兵器）の総称。通称「エステ」。アサルトピット（胸部と頭部を兼ねたコクピット）を、各種のフレームに換装してあらゆる戦闘状況下で使用する。宇宙軍だけでなく、ネルガルと仲の悪い統合軍においても陸戦警戒用などで採用されている。現在の量産型はTVシリーズ25話に登場した3年前のものが引き続き使用されている。

えすてばりす・かすたむ【エステバリス・カスタム】
リョーコ、ヒカル、イズミ用にカスタムメイドされたエステバリス。機動力、スピード共にステルンクーゲルに遅れをとったエステバリスだが、これは「ユニットを2つつければ速度は倍だろ」というリョーコの一言によって作られたスペシャルバージョン。背中の2つの重力波ユニットは確かに予想通りの高出力を生んだが、乗りこなすにはかなりのテクニックが必要であり、まさに3人娘のための専用機といえる。標準武装は量産機と同じだが、高出力のエネルギーを利用しての大型レールカノンの使用が可能。3機の頭部デザインはTVシリーズ時と基本的に同じで、リョーコ機の二本のツノは指揮官用の強化センサーである。また、左手の甲にはワイヤー射出ギミックがあり、アマテラスの内部で無線回線を開かないブラックサレナと強引に通信するために使用された。

えすてばりす・ほうせんふれーむ【エステバリス砲戦フレーム】
シラヒメ攻防戦でシラヒメの砲塔代わりに使用されていたエステバリス。砲戦フレームの発展形でコロニー防衛用の移動砲台として特化されている。もはや先の戦争で使用された砲戦フレームとは似ても似つかないものになっていることから、砲台フレームとも呼ばれている。センサーがより強化されて、射撃精度が格段に上がった……はずなのだが、ブラックサレナにことごとくかわされてしまい実力を発揮することはできなかった。標準武装は120ミリカノン×1、2連装対空砲×2、スーパーガトリング砲×1、ミサイルポッド×2など。

えすてばりす・りょうさんがた【エステバリス量産型】
リョーコ率いるライオンズシックル部隊が搭乗するエステバリスで、0G戦フレームに換装している。主力機動兵器の座はステルンクーゲルに奪われたエステバリスだが、先の戦争に参加したベテランパイロットは相変わらずエステバリスを愛用しつづけているようだ。スピード、出力、搭載兵器などはステルンクーゲルに劣るものの、IFSシステムによる「柔軟な機動性」はそれを補ってあまりある性能を保証している。全長6.24m、標準武装はラピッドライフル×1。なお劇中の初登場シ

ーンでかぶっていたステルスシートは、コロニー装甲板の模様を迷彩した、一見ただの作業用シートのようだがさにあらず、強力マグネットでコロニー外壁にくっついていたライオンズシックル部隊をブラックサレナは感知できなかったのだ。ウリバタケの製造タグつきなのは彼の特許商品のためか。

【か】

がーべら【ガーベラ】

統合軍の駆逐艦。サクヤ攻防戦において「火星の後継者」跳躍第三小隊の手にかかり撃沈した。

きるたんさす【キルタンサス】

アマテラスに駐留中の統合軍リアトリス級戦艦。ユーチャリスを迎撃した。

くしなだ【クシナダ】

ヒサゴプランのターミナルコロニー。いったんは「火星の後継者」の手に落ちたが、統合軍の第五艦隊が奪回した。

くちくかん【駆逐艦】

宇宙軍も統合軍も駆逐艦は同タイプを採用している。宇宙軍の駆逐艦は船体が紺色と濃い赤で、統合軍のものは船体が明るい青と黄色で塗られている。全長142m。パワー・ウエイトレシオにすぐれた俊足艦で、ペイロードは少ない。その形状から「万年筆」という愛称（?）もつけられている。基本武装は、正面に中型グラビティブラスト×1、側面の三連装対空砲×2、ミサイルランチャー×6。

くろっかす-つう【クロッカスII】

統合軍駆逐艦。サクヤ攻防戦に参戦したがヤマサキの作戦にかかって撃沈した。

【さ】

ししき【積戸気】

「火星の後継者」側の機動兵器。夜天光の量産タイプで、ボソンジャンプシステムを外部ユニット化することで機体の小型化を果たしたが、ボソンジャンプは一度きりの片道装備になってしまった。いわゆる神風兵器で、敵中にボソンアウトして奇襲効果によって敵を攻撃する。機体を回収してもらえるのは戦闘終了後であり、敵を殲滅しないかぎり帰還することはできないという尋常ではない作戦思想のもとに開発された機体である。背中にボソンジャンプ用のバッテリーパックを装備でき、両肩にターレットノズルも搭載されている。肩と胴体の間にも各1基の可変ノズルあり。可変ノズルであるスラスターの反対側には各2基ずつ4基のハードポイントがあり、ここに対艦ミサイルを4発装備できる。標準武装はハンドガン×1。

しゃとる【シャトル】

ルリたち独立ナデシコ部隊が月に向かうために乗りこんだシャトル。空中発射母機に乗って上昇するタイプで、JAPAN ALL SPACE LINE（JASL）社のロゴがあり民間機のように擬装されているが、実は軍用機であり、出力系とフィールドジェネレーターは積戸気部隊の攻撃にも充分耐えうるほど強力だった。しかし律儀に擬装しすぎて武装類を一切はずしたことが裏目に出てしまい、あわや撃墜寸前のところまで追いつめられた。間一髪のところをナデシコCのグラビティブラストによって救われる。シートは左右各2列の60席。コクピットに4席。

すてるんくーげる【ステルンクーゲル】

木連とクリムゾングループの技術提携によって生まれ、統合軍が正式採用した機動兵器。「火星の後継者」側も持っている。両脚部の大型重力波ユニットはエステバリスをしのぐ高出力と高機動性を誇る。また操縦システムもエステバリスとは異なり、IFSを使用せずに、より学習機能の発達したコンピュータが基本操作を行う「Easy Operation System」を導入している。ナノマシンを使用しないという点が大いに受け、地球でのパイロットの新規採用に大量の希望者が殺到した。人体への安全性が保証されているIFSだが、身体の中にナノマシンを注入することに抵抗感を持つ者がいまだに多いのだ。全高7m、標準武装はハンドレールガン×1。機体からパワーケーブルを引っ張って電源を確保し、マガジンパック内の実体弾を撃ち出しており、別名「物干し竿」とも呼ばれている。

すーぱーえすてばりす【スーパーエステバリス】

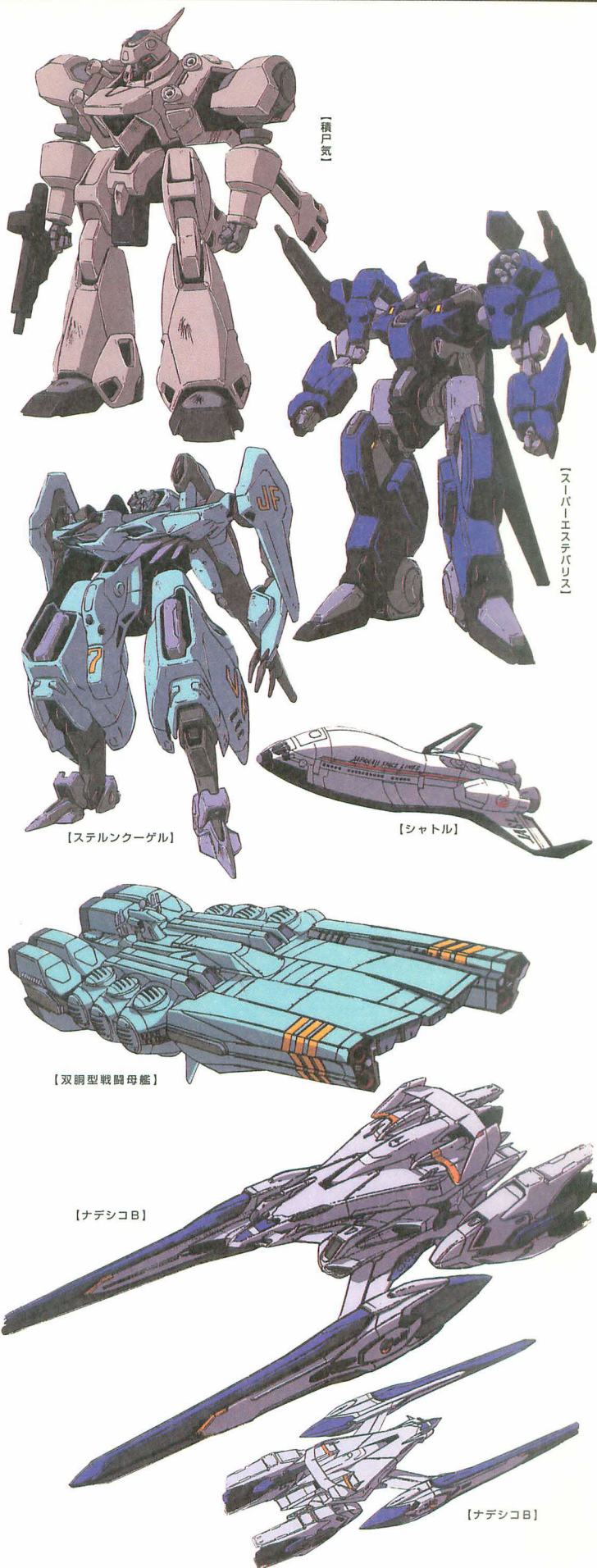
高杉三郎太搭乗機。エステバリスを武装強化しつつ出力系統にもカスタムチューニングをほどこした特別機。TVシリーズに登場したアカツキ専用機をさらにパワーアップしたものといえる。エステの後継機種。標準武装は可動する連射式キャノン砲×2、ミサイルポッド×2、大型レールカノン×1。エステ系機動兵器はいずれも背中に可変動ウイングを装備しており、ヨットの帆が風を受けるように母艦から供給されるエネルギー波を受け止めている。エステバリス・カスタムは小4枚大2枚。量産エステとスーパーエステは小2枚大1枚。

すぼし【すぼし】

統合軍駆逐艦。サクヤ攻防戦ではゆきまちづきの指揮下の艦艇として登場するが撃沈された。

そうどうがたせんとうぼかん【双胴型戦闘母艦】

巨大戦艦。4門のグラビティブラストもさることながら最大16ものステルンクーゲル＆スーパーエステ用カタパルトを有する様は、まさに戦闘母艦の名にふさわしい。底部が下方向に開き、寝ていた状態のステルンクーゲルが吊り下げられた状態となって登場。搭載機の肩のジョイントが爆発ボルトでフリーになり、その爆発の勢いで射出するようになっている。なお、相転位エンジンを4基搭載しているのは地球木連合わせてもこのタイプのみである。全長399m、標準武装は正面に大型グラビティブラスト×2、側面に三連装対艦砲×6、対艦砲の上下に3連装対空砲×12。

【積戸気】
【スーパーエステバリス】
【ステルンクーゲル】
【シャトル】
【双胴型戦闘母艦】
【ナデシコB】
【ナデシコB】

【た】

たちまちづき【たちまちづき】
ゆめみづき級木連式戦艦。アマテラスのチューリップからジャンプアウトしてきた。

とみてぼし【とみてぼし】
統合軍駆逐艦。サクヤ攻防戦において「火星の後継者」軍と戦ったが、積尸気によるボソンジャンプ特攻攻撃によって沈んだ。

【な】

なでしこ【ナデシコ】
ネルガル重工が開発した初の相転移エンジン搭載艦。初代ナデシコ（ナデシコＡ）。中枢コンピュータにオモイカネ（ＳＶＣ２０２７）を採用し、グラビティブラストをはじめとしてネルガルが隠匿した火星古代文明技術がふんだんに採用されている。艦長はミスマルユリカ。強化装備であるＹユニットと連結、３基の相転移エンジンを用いることで初めて放つことができる相転移砲は、現時点においても最強兵器であり、先の戦争においてはよくも悪くも名を残す大活躍をした。全長298ｍ、総重量37530ｔ、収容人員214名。ＴＶシリーズの終了後に宇宙軍によって接収されたが、三年後の劇中、アマテラス13番ゲートの第五隔壁内ドックに「遺跡」とともに保管されているところを発見される。

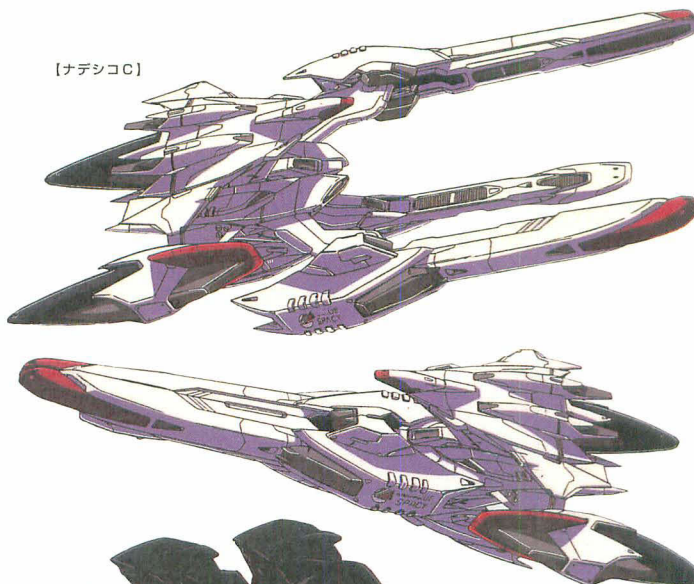
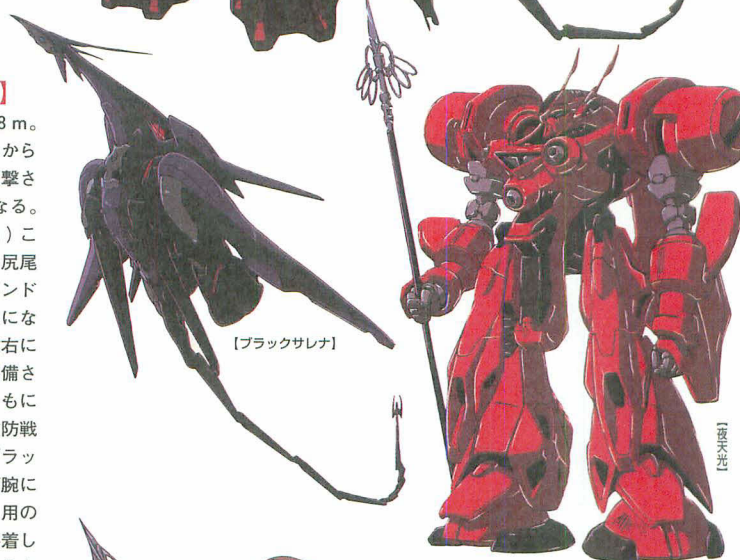
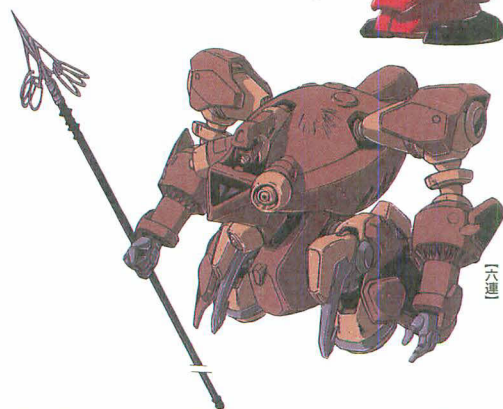
なでしこ-びぃ【ナデシコB】
連合宇宙軍第４艦隊所属の試験戦艦。ネルガル重工が建造したナデシコ級第２世代型宇宙戦艦。艦長はホシノ・ルリ。シャクヤクなどのナデシコ級戦艦とは世代的に異なっており、ルリとオモイカネだけですべての管制が可能になっている。運行目的はＩＦＳをさらに押し進めた「ワンマンオペレーションシステムプラン（一人一戦艦計画）」の実験データの収集。オペレーターが多数乗船しており、マニュアル操艦を行ってもいるが、本来の任務はルリとオモイカネのモニタリングである。相転位エンジンによる高出力を駆使したディストーションフィールドは、旧世代艦たるナデシコＡよりも更に強力になっている。しかし、ナデシコＢはあくまでもデータ収集目的の戦艦であるため、武装は少なく主武装はグラビティブラスト×１のみ。搭載機も高杉専用のスーパーエステバリス×１のみである。全長300ｍ、左右に分かれた船体後部に相転位エンジン×２、核パルスエンジン×４が搭載されている。ブリッジは艦上部、いわゆる「頭」部分の左側寄りにあり、レイアウトは、艦長のルリにシステムのすべてが集中しているようなイメージのデザインになっている。なお、艦長席とハーリーの席はＩＦＳシートになっており、戦闘（アグレッシブ）モードや高機動モードにおいて、着席したままで立ち姿勢に移行できるようになっている。また、シートを支えているスライドアームの伸縮によって、ブリッジ奥から前方へ移動が可能になっており、ルリたちの体格に合わせて高さを調節できるようにもなっている。副長であるタカスギのシートには可動ギミックはなく、前後スライドとリクライニングのみの仕様。

なでしこ-しぃ【ナデシコC】
詳しいスペックは非公開。ネルガルの月ドックで極秘裏に建造されていた第２世代のナデシコであり、完成の域に入ったルリとオモイカネによる操艦システムは「ワンマンオペレーションシステムプラン（一人一戦艦計画）」を目的としたナデシコ級戦艦設計思想の完成形でもある。単独でボソンジャンプを行えるシステムを持ち（ただしＡ級ジャンパーのナビゲーションが必要な点は変わらない）、主武装はグラビティブラスト×１。だが、ゆくゆくはＹユニットのような形で相転移エンジンの出力を強化し、相転移砲が撃てるようにもなる仕様にもなっている。とはいえ、この艦の最大の武器は、強化したセンサーと通信機能を利用しての敵システムへの侵入と掌握であり、スーパーコンピューター・オモイカネと会話をするようにアクセスができるルリにのみ可能な兵器として、ナデシコＣを最強戦艦たらしめている。劇中では、ルリがハーリーに艦の操作をまかせるシーンがあるが、技術的にはハーリーもワンマンオペレーションが可能。だが現時点ではオモイカネとの相性やデータの蓄積が、操作における大きな要素を占めるため、難易度の高いオペレーションにおいては、ルリのほうが格段にうまく扱えるのである。

【は】

ばった【バッタ】
ユーチャリスに搭載している木連無人兵器。アマテラス攻防戦で使用された。

ぱんじー-つう【パンジーⅡ】
統合軍駆逐艦。サクヤ攻防戦で撃沈。

ぶらっくされな【ブラックサレナ】
テンカワ・アキトの乗る機動兵器。全高約８ｍ。詳しいスペックは不明。爆発するシラヒメからボソンアウトしてきたところをジュンに目撃されたことから、幽霊ロボットとして噂になる。高機動ユニットを装着する（全高約18ｍ）ことで単体でボソンジャンプが可能になる。尻尾のようなテールバインダーにはマジックハンドが内蔵されており、ツメはアンカークローになっている。両肩にのったウイングは上下左右に自由可動し、中にはブースターノズルが装備されている。また機体各部、左右の肩や太ももにもノズルが内蔵されており、アマテラス攻防戦ではアクロバット的な機動力を見せた。ブラックサレナとは「黒百合」のこと。武装は両腕に装備されたハンドカノン×２。実はアキト用のカスタムエステバリスに、オプションを装着したものであるが、その形状はどちらかというとエステバリスの発展形であるアルストロメリアに近いようだ。ユーチャリスがナデシコＣのプロトタイプであるように、アルストロメリアのプロトタイプなのである。ブラックサレナに組みこまれる必要上、ローラーダッシュ用ホイールやワイヤードパンチなど、省略されてしまった機能もあるが、パワー性能は大幅に向上している。

【ナデシコC】
【ナデシコC】
【ブラックサレナ】
【ブラックサレナ】
【夜天光】
【六連】

【ま】

むづら【六連】

「火星の後継者」に属する北辰の部下たちが搭乗する機動兵器。積戸気とおなじくジャンプシステムを外部ユニット化しており、ほかにも脚部を省略することなどによって機動性を極限まで追求した機体であるといえる。足のかわりにライディングギアを装備し、胸部にはコクピットを防御するための３基のフィールド発生器がある。３基同時に機能するのではなく、弾道によって１基ずつ瞬間的に開くようになっている。夜天光と同じく「傀儡舞」をするための回転ターレットノズルを持っている。名前の由来は「昴」と呼ばれる牡牛座にある散開星団・プレアデス星団より。基本武装は錫杖と多連装ミサイルランチャー×２。

もくれんがたくちくかん【木連型駆逐艦】

突撃艦とも呼ばれている。エンジンに大砲をつけて敵陣に突っ込ませる、という単純明快な発想で生まれた俊足艦。リニアカノン+エンジンポッド+ブリッジパート+実体弾マガジンという、いたってシンプルな構造を持っているのだが、これは地球連合側の駆逐艦と同じコンセプトである。こちらは「ハエ叩き」の愛称（？）を持つ。全長188m、標準武装は正面に中型リニアキャノン×１。

【や】

やてんこう【夜天光】

「火星の後継者」の北辰専用機。機体に単独ボソンジャンプシステムを内蔵しているが、距離は中距離までに限定され、回数にも限りがある。腰部に２基、後頭部から背中へ向けて１基の可変バインダーノズルを装備し、両肩にも回転ターレットノズルを付けることではじめて可能となった変則飛行は「傀儡舞」と呼ばれ、高い機動力を見せてくれた。円形をした足の裏はスラスター。胸部には六連とおなじフィールドシステムを装備している。名前の「夜天光」とは夜の自然光、微かな光のことである。基本武装は機体と同じ長さの錫杖と、腕にミサイルランチャー×２。

ゆきまちづき【ゆきまちづき】

統合軍第三艦隊旗艦。ゆめみづき級木連式戦艦。サクヤ攻防戦において積戸気の攻撃で沈没する。

ゆーちゃりす【ユーチャリス】

ネルガル重工が極秘建造したもうひとつのナデシコB。あるいはプロトタイプナデシコC。ラピス・ラズリのワンマンオペレーションによって操船されている。建造に際しては木連の技術もふんだんに盛りこまれ、木連の無人小型機動兵器バッタを多数搭載している。アキトのブラックサレナの母艦であり、同時にナデシコCのためのワンマン・オペレーション・データ収集艦としての側面も持っている。船体上部にコクピット（ブリッジ）があり、その後方にバッタ射出口４基が設置されている。また、ナデシコC同様、敵システムへの侵入、掌握を可能とするシステムや、単独ボソンジャンプシステムを装備している。基本武装は４連装グラビティブラスト。ユーチャリスはヒガンバナ科の常緑草で、花言葉は「清らかな心」。

ゆめみづききゅうもくれんしきせんかん【ゆめみづき級木連式戦艦】

先の戦争中、故・白鳥九十九が乗艦していた「ゆめみづき」と同タイプの戦艦。戦時中のタイプは小型のチューリップを内蔵し、機動兵器の中距離ボソンジャンプによる戦地投入を可能としていたが、現在はオミットされドライ・ハンガーを増設している。木連式戦艦は基本的に戦艦による攻撃よりも、優人（有人）部隊の人型戦闘機（マジン、テツジン等の大型ロボット）と無人兵器である虫型戦闘機（バッタ、ジョロ等）の戦地投入を主目的として建造されたため、地球艦に比べ武装が極端に少なかったが、統合軍参加以後は、追加武装をほどこしているものが多い。全長283m。先頭部のブリッジパートは分離可能。ブリッジとメインハンガーを結ぶ長い首のような通路がある。艦体上部にメインハンガー、下部にサブハンガーがあり、機動兵器を格納している。左右後部には２機のメインエンジンがあり、船体各部に各種センサーが増設されている。標準武装は正面にリニアキャノン×１。

よいまちづき【よいまちづき】

統合軍所属ゆめみづき級木連式戦艦。アマテラスに駐留中の戦艦で、ユーチャリスを迎撃した。

よんれんづつつきもくれんしきせんかん【四連筒付木連式戦艦】

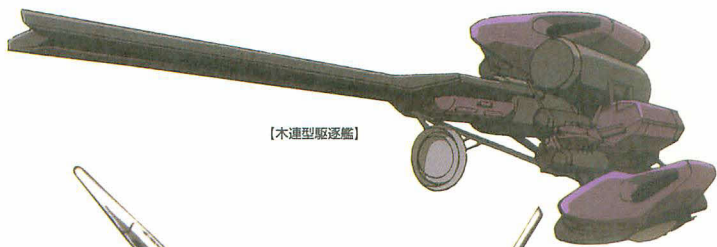
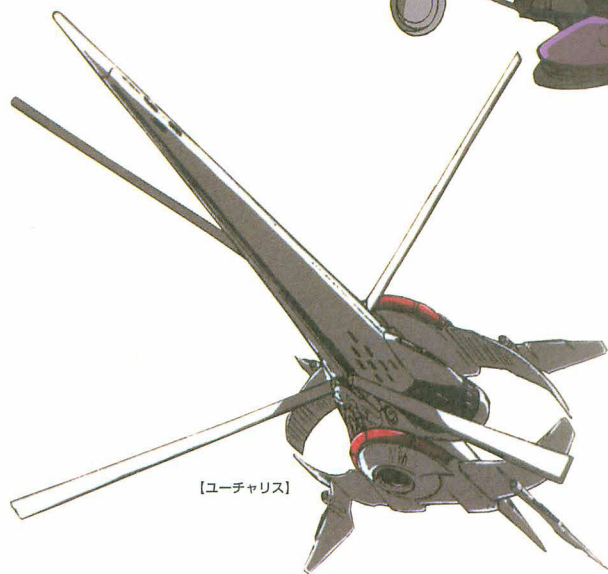
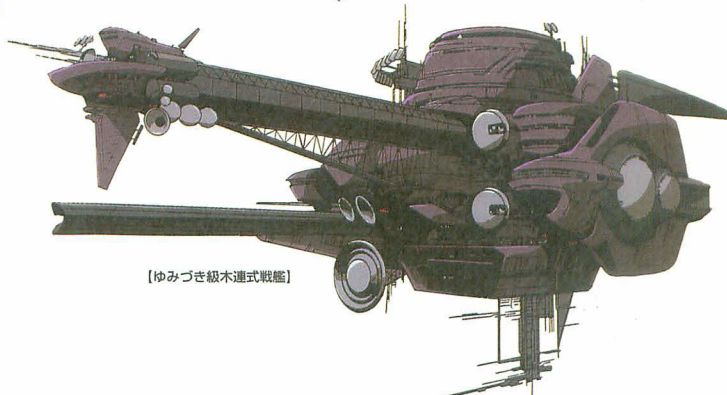
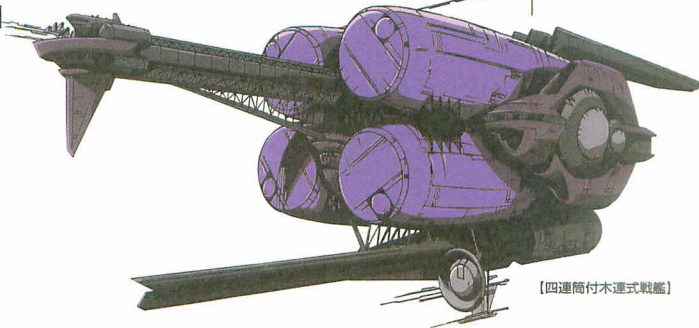
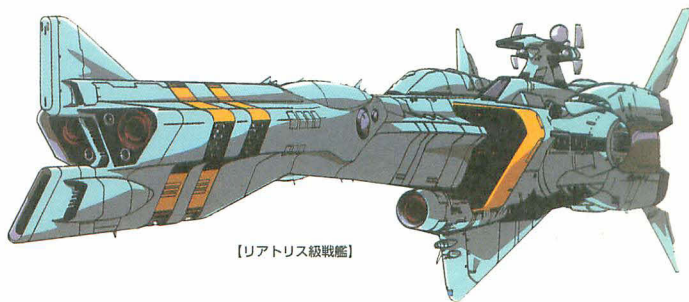
巨大な筒状のメインハンガーを４基持ち、戦艦というよりも空母的な色あいが濃い。規格品パーツのくみあわせで出来ている。機動兵器コンテナであるメインハンガーは横置きに４基搭載。エンジン（エンジンブロック共用パーツ）は２基搭載している。上後部にエナジーパネル４基があり、ブリッジパートへの通路はやや短め。ブリッジのキャパシティは艦長、副長、オペレーター６名で合計８名。スピード、機動性はゆめみづき級より落ちるものの、搭載する機動兵器の数は文字通り４倍。ゆめみづき級より少々小振りで全長295m、標準武装は下部正面にリニアキャノン×１。

【ら】

らいらっく【ライラック】

独立ナデシコ部隊を月まで護衛した護衛艦隊の旗艦。リアトリス級戦艦。艦長はアララギ大佐。

りあとりすきゅうせんかん【リアトリス級戦艦】

リアトリス級とはかつての宇宙軍第三艦隊の旗艦リアトリスがその一番艦であったことから命名された戦艦のクラスである。本来は宇宙軍の正式採用艦なのだが、その性能の高さゆえに統合軍においても主力艦として活躍している。木連との戦争以降、相転位エンジンを積んだタイプが多数導入されており、このタイプも、ナデシコよりも出力はやや劣るものの、２門のグラビティブラストとディストーションフィールドを持つ。全長は298m。標準武装は中央正面にグラビティブラスト×２、艦の側面にある三連装対艦砲×２、対艦砲の上下にある三連装対空砲×４。宇宙軍と統合軍の両方に配備されているが、宇宙軍のリアトリス級戦艦は船体が紺色と濃い赤で、統合軍のものは船体が明るい青と黄色で塗られている。

【木連型駆逐艦】

【ユーチャリス】

【ゆみづき級木連式戦艦】

【四連筒付木連式戦艦】

【リアトリス級戦艦】

Dictionary for movie

【あ】

あい‐えふ‐えす【IFS】
イメージ・フィードバック・システムの略称。この時代の最新インターフェイスで、人間の思考をダイレクトにコンピュータに入力する装置。操縦者の思考を完全に伝達してくれるため、従来の「操作するための技術」を習得するプロセスを省略できるようになった。ＩＦＳの使用には以下の手順が必要である。(1)ＩＦＳナノマシンを体内に注入する。(2)ナノマシンは全身に広がり、神経の動きをフォローして人間の反射神経を補強したり、補助脳を形成する。(3)ＩＦＳ搭載マシンに乗る。なお、ナノマシンが身体に定着するまでには定期的な薬の服用などが必要であるが、人体への悪影響はほぼないとされている。

あまてらす【アマテラス】
ヒサゴプランのメインターミナルコロニー。ヒサゴプランの中枢である。解体されかけていたナデシコと火星の遺跡が秘密裏に保管されており、行方不明中のユリカを使ったボソンジャンプの人体実験が行われていた。ルリ率いるナデシコＢの査察を受けている最中に、ブラックサレナとユーチャリスの襲撃を受け、時を同じくして内側では火星の後継者達によるクーデターが発生、占拠されたあげくに爆破されるという末路をたどった。

いせき【遺跡】
太陽系の各地に残された古代火星文明の残滓のことを指すが、劇中ではもっぱら、火星極冠にある遺跡か、その中のボソンジャンプを管理している演算システムのことを指す。演算システムは劇中でも古代火星文明の遺産として重要なアイテムになっている。ＴＶシリーズの最終回で、ナデシコクルーによって宇宙に追放されたが、そのあと地球連合によって回収された。しかし現時点ではＡ級ジャンパーにしかアクセスできないシステムであるため、「火星の後継者」と裏でつながっていたヒサゴプランの研究者グループ達は、Ａ級ジャンパーであるユリカを遺跡システムと融合させた。なお、この計画は「火星の後継者」達との内通グループのあいだで極秘裏に進められていた。

いわと【イワト】
火星極冠遺跡にあるヒサゴプランのセントラルポイント。蜂起した「火星の後継者」に参加する部隊が次々にかけつけてきた場所。

うぃんどう【ウィンドウ】
コンピュータのモニターを空中に展開させたもので、戦艦内やコロニー内なら、プロテクトがかかった場所でなければ、どこにでも出現させることができる。通信機的な側面もあり、コミュニケーター（腕時計型の通信機）を使って、任意の相手の周囲にウィンドウを出現させて、会話することも可能。通信の場合、発信者の意志や感情の高ぶりなどに反応して、かたちや大きさが変化する。宇宙軍オフィスで、コウイチロウ達が会議するシーンでは、夏らしく、風鈴が映ったウィンドウが室内に浮いていた。

うぃんどうぼーる【ウィンドウボール】
より高度な情報処理を行うために、ウィンドウが文字通りボール状に展開されたもの。コンピュータとリンクできるルリやハーリーのような人間のみが使用可能。ウィンドウボールはフィールドではないので、作中でも三郎太がボールの中に顔をつっこんでいたが別段、人体に影響はしない。

「うるるん」【「うるるん」】
この時代の少女まんが雑誌。遺跡と融合しているユリカに、より明確な指示を押し付けるためには、彼女が好むイメージで伝えたほうがよいのではないかと、研究者達が研究に研究を重ねた上に達した結論が、少女まんがの「ラブラブな雰囲気のなかで、好きな人が自分にお願いごとをする」というシチュエーションを利用することだったのだ。作戦会議では、草壁をはじめとする「火星の後継者」のお歴々が、大真面目にこの雑誌を読みふけった。

うちゅうぐん【宇宙軍】
正式には地球連合宇宙軍。先の大戦では地球連合の主力として活躍したが、新地球連合結成にともない、地球と木連の合同軍である統合軍が設立されており、宇宙軍は、廃止、あるいは統合軍に吸収されることになるだろうと言われている。移行期間の現在は、以前より規模を縮小して存在している。ナデシコＢとクルーは宇宙軍の第四艦隊に所属している。

おもいかね【オモイカネ】
ナデシコの中枢コンピュータで、ナデシコＢに移植され、ナデシコＣにも移植された。人間のような自我を持っており、ストレスをためたりすることもある。ルリとはＩＦＳで精神的にリンクしていることもあり、友情のような結びつきを持っている。

【か】

かせいきょっかんいせき【火星極冠遺跡】
火星極冠にある古代火星文明の遺跡。ボソンジャンプの演算システムが元々あった場所。アマテラスを放棄した火星の後継者達が最後の拠点として選んだ場所にもなった。

かせいどん【火星丼】
ホウメイのお店「日々平穏」のメニューのひとつ。ハヤシ丼にタコさんウィンナーをトッピングしたもの。ＴＶシリーズにも登場したが、劇場版では、ウィンナーがフランクフルトにグレードアップしている。劇中ではハーリーが注文した。

かせいのこうけいしゃ【火星の後継者】
かつての木連指導者であった草壁が率いる組織。戦力的に劣る彼らは、ボソンジャンプを独占管理し、少数の兵士達で新地球連合政府の重要施設に奇襲をかけ、これを占拠、クーデターを達成しようと考えた。そのためにはまず、自在にボソンジャンプが可能なＡ級ジャンパーすべてを殺すか、管理下に置く必要があった。

きどうへいき【機動兵器】
エステバリス、ステルンクーゲル、ブラックサレナなどの人型兵器の総称。平均的なサイズは全高６メートル前後。装備するオプションによって増減する。

ぐらびてぃぶらすと【グラビティブラスト】
古代火星文明のテクノロジーのひとつ。相転移エンジンから得られるエネルギーを重力波に変換して集束、発射する兵器。先の戦争においては地球側はナデシコ級戦艦にしか装備されていなかったが、以降に建造された戦艦には標準装備されている。

くしなだ【クシナダ】
「火星の後継者」の蜂起後、彼らの管理下に置かれたヒサゴプランのターミナルコロニー。統合軍の第五艦隊によって落とされた。

くりむぞんぐるーぷ【クリムゾングループ】
ヒサゴプラン建設の中心ともなっている、反ネルガル企業。豪州有数の企業体であり、ネルガルが繁栄をほしいままにしていた大戦中から、極秘に草壁と接触を持っていたらしい。ちなみにＴＶの第10話『「女らしく」がアブナイ』でアキト達が出会った少女アクアは、このクリムゾングループのオーナー夫妻の一人娘である。

げき‐がんがー【ゲキ・ガンガー】
21世紀後半に制作された熱血ロボットアニメで全39話が制作された。正式タイトルは『ゲキ・ガンガー3』（27話以降は『熱血ロボ　ゲキ・ガンガー３』）地球連合を脱出する時に持ち出すことのできた数少ない映像ソフトのひとつで、現在の木連では国民的アニメとなっている。地球側でも再放送が続けられ、一部のアニメファンにカルト的な支持を受けている。ＴＶシリーズでは、アキトの熱心な活動によってナデシコクルーにも布教された。今回の劇場版でも、ルリの回想シーン、ヒカルとリョーコが対戦するアーケードゲーム「ナチュラルライチ　ラブラブ熱血大作戦」等に登場。秋山による草壁の回想シーンではキグルミが登場、ユキナのバッグにつけられたマスコットも『ゲキ・ガンガー』だった。

けめこ【花目子】
イズミが経営するバー。昭和30年代ふうの雰囲気。店内の壁のコルクボードにはナデシコ時代も含めた写真がいっぱい貼られている。また、妙なお面が飾られているが、これはイズミが世界を旅していた時に、集めたものである。

こうがくしょうへき【光学障壁】
光学バリア。宇宙線や強力な光からクルーを守るために展開する、いわば戦艦のサングラスのようなもの。

こくさいこうそくつうしんしゃ【国際高速通信社】
火星の後継者の最終作戦において、直接攻撃の標的となった拠点のひとつ。

こりどらす【コリドラス】
連合宇宙軍オフィスの水槽で飼育されている魚。ムネタケがエサをやっている。

ころにーかんりほう【コロニー管理法】
ヒサゴプランを含む、コロニーに関する法律。現在は統合軍によって警備されているヒサゴプランは、法的には宇宙軍の防衛対象でもあり、ルリはこの法律の緊急査察条項をタテにアマテラスの査察を認めさせた。

【さ】

さきのせんそう【先の戦争】
2195年から98年にかけて地球と木連の間で行われた戦争。かつて地球から追放された人々の末裔である木連は、復讐戦ということで国論をまとめたが、真の目的は、古代火星文明の遺産の独占にあった。現代文明より優れた古代火星テクノロジーを持つ木連側は、戦争初期においては圧倒的なイニシアティブを取り、またたくまに火星を制圧、地球を直接攻撃するに至ったが、地球側も反撃を開始、ナデシコの活躍によってボソンジャンプコントロールシステムである遺跡の演算ユニットが両陣営の手の届かないところに飛ばされてしまい、戦争は膠着状態に陥った。

さくや【サクヤ】
ヒサゴプランのターミナルコロニーのひとつ。これをめぐって火星の後継者と統合軍の間で攻防戦がくりひろげられた。

さより【サヨリ】
ヒサゴプランのターミナルコロニーのひとつ。ちなみにタキリ、タギツ、サヨリは、日本神話に登場する海を守る女神・宗像三女神から名づけられている。

しらひめ【シラヒメ】
ヒサゴプランのターミナルコロニーのひとつ。冒頭シーンに登場。遺跡があることから北辰達の襲撃を受け、ユリカがいることからブラックサレナの襲撃を受けてしまい、破壊された。

じゃんぱー【ジャンパー】
生体ボソンジャンプが可能な人間のこと。その能力によってクラスが認定される。アキト、ユリカ、イネスらはA級ジャンパー、ルリやハーリーはB級ジャンパーである。ちなみにB級以下のジャンパーは、ヒサゴプラン（チューリップ）を通じてのジャンプしか出来ないが、A級ジャンパーは自由自在にボソンジャンプができる。現時点では、アキト、ユリカ、イネスなどの特定の時期に火星で誕生した「生まれついてのボソンジャンプ耐性をもった」人間をのぞき、遺伝子操作を行わなければジャンパーになることはできない。

しんちきゅうれんごう【新地球連合】
木星連合も参加するかたちで再編成された連合政府。2199年3月に設立された。

そうてんいえんじん【相転位エンジン】
相転移現象を利用したエンジン。相転移現象とは、高いエネルギーの真空が、低いエネルギーの真空と入れ替わることでエネルギーが解放される現象のこと。その解放されたエネルギーを利用するエンジンが相転移エンジンであり、火星古代文明のテクノロジーのひとつ。ナデシコにも搭載されている。

【た】

たきり【タキリ】
ヒサゴプランのターミナルコロニーのひとつ。ナデシコBは、タキリのチューリップからサヨリ、タギツ経由でアマテラスへ到着した。

たぎつ【タギツ】
ヒサゴプランのターミナルコロニーのひとつ。アマテラスへ向かうナデシコの経由ポイントとなった。

ちきゅうれんごうほんぶびる【地球連合本部ビル】
火星のジャンプ直接攻撃の標的のひとつになった建物。

ちきゅうれんごうそうかいぎじょう【地球連合総会議場】
火星のジャンプ直接攻撃の標的のひとつになった建物。「火星の後継者」達は、各地域政府の代表を人質に取ることでクーデターを成功させようと考えた。

ちゅーりっぷ【チューリップ】
ボソンジャンプのためのゲート。Cellular Hangover from Unkown Labyrinthine Intelligence of Prehistorical age（先史時代の謎めいた未知の知性が残した細胞質の遺物）の頭文字をとってＣＨＵＬＩＰと言う。中は一種のワームホールになっており、ジャンプ能力を持たない兵器でも、チューリップからチューリップに出るかたちでボソンジャンプが可能になっている。ただしディストーションフィールドなどのバリアで保護しなければ生体は生き延びることはできない。ヒサゴプランにおいても、肝心のボソンジャンプシステムはチューリップに依存している。

ちゅーりっぷくりすたる【チューリップクリスタル】
生体ボソンジャンプを支援するアイテム。チューリップと同じ組成でできていることからそう呼ばれている。

でぃすとーしょんふぃーるど【ディストーションフィールド】
対グラビティブラスト用のバリア。空間を歪ませることで敵の攻撃をそらしてしまう。実体弾にはあまり効果がない。

とうきょうりんかいこくさいくうこう【東京臨海国際空港】
再び集ったナデシコクルーが、月面ドックにあるナデシコCに合流するために旅立った場所。

とうごうぐん【統合軍】
正式には地球連合統合平和維持軍。新地球連合を作るにあたり、軍もなし崩し的に再編成されることになり、地球連合の陸海空軍を中心に、木連も参加するかたちで成立した。

どくりつなでしこぶたい【独立ナデシコ部隊】
ナデシコCのクルー。艦長はルリ。火星の後継者達によって占拠された火星極冠遺跡奪還の任務のために編成された。極秘任務のため正規の軍人を動かすことができず、軍を離れていた初代ナデシコクルー達が集められた。

どせいとかげ【土星蜥蜴】
新地球連合の総会において、木連代表がアメリカ代表を揶揄して言った言葉。先の戦争において、地球連合政府は木連が自分達と同じ人間であることを知っていたにもかかわらず、その正体を隠し、「木星蜥蜴」なるエイリアンとして、市民を騙しつづけた。今回のヒサゴプラン襲撃事件も、幽霊ロボットが出たなどと言ってはいるが、実はまたなにか隠し事をしているのではないか？　今度は「土星蜥蜴が出た」などといって騙すつもりではないか？　という皮肉。

【な】

「なぜなになでしこ」【「なぜなにナデシコ」】
先の戦争時、ナデシコ艦内で放映されていたＴＶ番組。ＮＨＫ教育ＴＶのノリで科学的な説明をする内容で、「説明おばさん」ことイネスが仕切っていた。今回の劇場版では「なぜなにナデシコ　劇場版」が、ＴＶ番組ではなく、小学校の授業か、お楽しみ会のような形式で行われた。先生はイネス。ハーリーとウリバタケが黒子を務めた。

なちゅらるらいち【ナチュラルライチ】
アーケードゲーム「ナチュラルライチ　ラブラブ熱血大作戦」に登場するキャラクター。元々は魔法少女アニメ『魔法のプリンセス　ナチュラルライチ』の主人公で、メグミも声優として出演していた。劇中では、ヒカルがライチ、リョーコがゲキガンガーで対戦をしていた。

なのましん【ナノマシン】
その名の通りナノサイズのマシンの総称。ナノとは10のマイナス9乗メートルで、当然のことながら人の目には見えない。シリコンとプラスチックで作られ、自己複製能力も持っている。この時代ではありとあらゆる種類のナノマシンが社会全般に深く浸透している。

ねっけつくーでたー【熱血クーデター】
ＴＶシリーズ終了後、木連の反草壁派の青年将校が起こしたクーデター。月臣の「熱血とは盲信にあらず」の檄文から始まったクーデターであるため、こう呼ばれる。このとき草壁はみずから出撃し、行方不明になったままクーデター側の勝利に終わった。別名「木星連合（木連）の政変」。クーデターは成功し、若い層が政治の実権を握った。クーデターのリーダーは秋山源八郎。その後、草壁、月臣は行方不明になっていたが……。

ねるがるじゅうこう【ネルガル重工】
アジア圏最大の企業グループ。古代バビロニア語で火星を意味する社名の通り、火星開発にも大きく関与していたが、利権の拡大は同時に反ネルガルグループの結束を招くことになり、新地球連合の発足とそれによる統合軍の成立、さらに反ネルガルグループ主導によるヒサゴプランの建設によって凋落の一途をたどっている。現在も会長はアカツキ。

【は】

ひさごぷらん【ヒサゴプラン】
未来の移動手段として期待されているボソンジャンプの平和利用のために設立された。太陽系内ボソンジャンプのネットワークで、現時点では地球から火星までのルートが完成している。ヒサゴとは瓜、ひょうたんのこと。ネーミングの由来は、人が瓢によって天にのぼって星々をめぐったという「一夜瓢の伝説」から。古来よりひょうたんは宇宙を表し、そのツルの螺旋は銀河を連ねる星々の流れを意味していた。ホウメイガールズは、ヒサゴプランのキャンペーンガールとなっており、ポスター等にも登場している。

ひさごんくん【ヒサゴンくん】
ヒサゴプランのイメージキャラクター。ＣＧ、キグルミ、ポスター、キャラクター商品等で大活躍。全地球的な人気キャラクターとなっている。

ひびへいおん【日々平穏】
ナデシコを降りてから、ホウメイが開いた小さな中華料理店。中華料理だけでなく、洋食や和食も出す。旧ナデシコのクルーも、よく訪れているらしい。

ふぁいてぃんぐかんじす【FIGHTING KANJIS】
格闘ゲーム。壱、弐などの漢字を格闘させるアーケードゲーム。ＴＶシリーズでは、右、左の漢字が戦うゲームが登場した。

ぼーすりゅうし【ボース粒子】
ボソンジャンプが行われた時、その周辺空域で検出される粒子。ボソンとも言う。整数の量子数をもつ粒子の総称で、含まれる粒子の数が偶数である集団の運動を記述するための量子学統計法のひとつボース統計に従うためにこう呼ばれている。

ぼそんあうと【ボソンアウト】
ボソンジャンプを終えて通常空間へ復帰すること。またはその地点を指す。

ぼそんじゃんぷ【ボソンジャンプ】
簡単に言えば瞬間移動なのだが、以下のような段階を経て実行される。（1）物質はボソンジャンプフィールドの中で、時間を逆行する性質をもつボース粒子に変換される。（2）ボース粒子は過去にさかのぼり、古代火星文明時代の遺跡へたどりつく。（3）遺跡にやってきた物質は、ボソン粒子に再変換される。（4）物質は未来へ向い、通常空間に再出現することになる……これらの過程が、一瞬で行われるため、瞬間移動のように利用されている。現時点では専用のＤＮＡ操作を行った人間（ジャンパー）しかボソンジャンプはできないが、戦艦などの高出力ディストーションフィールドで保護することにより、一般人でもボソンジャンプは可能になっている。ただしナビゲーターであるジャンパーがいなければ行き先のコントロールはできない。

すのう-ほわいと【SNOW WHITE】
「遺跡」が保管されていた第五隔壁を開けるためのパスワード。意味は白雪姫。魔女の毒りんごによって白雪姫は永遠の眠りについたのだ。王子のキスによって目覚めるまで。

【ま】

もくれん【木連】
正式には木星圏ガニメデ・カリスト・エウロパ及び他衛星小惑星国家間反地球共同連合体。かつて地球連合に追放された人々の末裔達が木星まで逃れてつくった国家で、ＴＶシリーズは地球連合と木連との戦争という状況下で物語がくりひろげられた。

【や】

やまぶきしょうたい【ヤマブキ小隊】
シラヒメ所属のステルンクーゲル隊。ブラックサレナを迎撃した。

【ら】

れんごううちゅうぐんちかじゃんぷじっけんどーむ【連合宇宙軍地下ジャンプ実験ドーム】
ハーリーとイネスが月にジャンプするときに使った施設で、生体ボソンジャンプについての研究が行われていた。

LONG INTERVIEW MINAMI OMI

―― 劇場版『ナデシコ』のアフレコが終わってから、2週間くらい経ちましたね。

南 そんなに経ちましたかぁ。なんか、そんな気がしないんですよ。

―― 劇場版ではルリちゃんがメインになるという話は、いつぐらいに知らされたんでしょうか？

南 かなり前から聞いてはいたんですよ。「映画をやるよ」って言われたのと同時くらい。元々、ルリは作品のナビゲーターみたいな部分があったので、すんなりと受けとめることができました。

―― 映画版では、アキトや、ユリカがいないっていうのは、どういうかたちで知ったんですか。

南 軽くは教えてもらっていたんですけど、ちゃんと知ったのは、絵コンテをもらってからです。プロデューサーの大月（俊倫）さんが、某録音スタジオまで、わざわざ自転車に乗って、絵コンテを持ってきて下さったんです。

―― プロデューサーが、わざわざ自転車で絵コンテを。

南 ええ。それを見て、こういう風になるんだなって、初めてわかったんです。凄いことになるんだよって聞いていたんですけど、あんなことになるとは！

―― 読んだ印象は？

南 びっくりしました。もともと『ナデシコ』は、シリアスな部分もあったけど、ラブコメみたいな部分があったりして、楽しく見られる作品だったじゃないですか、その後が、これ？ あの2人が、これ？ ……っていうような。

―― ルリの変化に関しては？

南 ルリに関しては、成長した絵を見せいてただいた時に、優しくなったというか、いい意味で成長したなって思いました。11歳から13歳という年齢の時に、ナデシコクルーという、ある意味特別な大人達の中に入って、生活して。それで、また3年後なんですよね。

―― 実際、映画版のルリちゃんを、演じる上でのプランはどのように。

南 まず、ルリがどう成長したか見てみようと思ったんですよ。ルリは家族ができたおかげで、優しくなれるようになったんじゃないかと思ったんです。今までは優しさを持っていても出せない部分があったけど、今は、人に対しての優しさを表に出せるようになったという感じなのかな？ うん。

―― 家族というのはアキト達？

南 うん、アキト達。ナデシコのクルーを含めて。あたし、勝手に（キャラクターの気持ちを）作っちゃうんです。絶対こうのはずだって（笑）。

―― キャラクターの気持ちを、まず考える？

南 そうなんです。だから、声からっていうよりも、気持ちを優先させて、どう成長したかとか、どういう気持ちでいるのかというところから入りました。

―― 具体的にアフレコの時に、苦労したことはありますか。

南 ルリの気持ちが、1時間半のお話の中で流れているんですけど。やはり、40人以上の役者さんが参加している収録だったので、何シーンかずつ抜いて録るかたちになって、話が交錯していて。

―― ああ、後のシーンを録って、前のシーンを録って、また、後のシーンにいくみたいな録音だったんですね。

南 そうなんです。ホントに、自分で気持ちが入りすぎちゃって（笑）。ひとつのシーンを録る時に、その前後のシーンと気持ちがつながるように、その時のルリの気持ちに自分を戻していかなくちゃいけない。それをやっているうちに、段々、わからなくなっていって（笑）、頭が白くなっていくんです。そういう風に、気持ちの流れを作っていくのが一番大変でした。

―― 最初に成長したルリちゃんと、気持ちを合わせるところは、ＯＫだったんですね。

南 ＯＫ！ たぶん、皆さんにも、変わったなあと思っていただけるのではないかと。

―― もうちょっと、細かいことを聞いていいですか？

南 はい。

―― 今回、アキトは、ああいう風になったんですけど。

南 そうですね、ああいう風に。具体的には言えないんですけど（笑）。

―― いや、パンフレットだから、言っちゃってもいいと思いますけど。みんな、映画を観てから読むんでしょうから。

南 ああ、でも観る前に読む人がいるかもしれない。

―― じゃあ、具体的な話はしないってことで。どうでしたか、アキトさんについてどう感じました？

南 そうですね、ＴＶの時のルリって、いろんな人に「バカばっか」って、言っていたじゃないですか。その「バカばっか」って言っている中で、何て言うか、『ゲキガンガー』に対する熱い思いを持っているアキトって、ルリにとって、一番わかりやすいお兄ちゃんだったと思うんです。身近な異性としての憧れ、恋愛対象としてじゃない、憧れを持っていたんでしょうね。その人が、あんな風になっちゃって、というショックがルリにはあったと思うんですよ。

でも、映画を最後まで、見ていただければわかるんですけども、まだまだ続くわよ！……っていう（笑）。

―― この後も続くかも、と。

南 思えますよね。続くとは聞いていないんですけど、続いたらいいなっていう終わり方でしたね。

―― 南さん、ご自身の気持ちとしてはどうでしたか？

南 私としては、とりあえず追っかけなきゃって（笑）。

―― ああ、大事な人だから。

南 大事な人だから（笑）。なんか、メーテルのようだなって思ったんですけどね（笑）。

―― 男と女が逆ですけれどね。

南 ええ。逆メーテルのようになってしまいました。監督ともお話したんですけれども、彼氏にしたいとか、そういう意味ではなくて、ホントに思い出の人という感じなんですよね。一応、追っかけとかないと。うーん、言った以上は（笑）。

―― なるほど。ハーリー君はどうですか？

南 ハーリー君、かわいいですぅ。

―― ですぅ（笑）。

南 ですぅ（笑）。ハーリー君、自分がルリでなければ、演りたい役ですぅ。

―― あっ、なるほど。

南 ウフフフ。そうなんですよ。ハーリー君を、どなたが演るのか、ワクワクしていました。絵コンテが凄いんですよ。コンテ上でのハーリー君って、ホントにハリネズミ君みたいなんですよ。トゲトゲなんです（注1）。フィルムでは、もっと繊細な感じになっていましたけど。

―― そうですね。

南 ルリから見れば、自分と同じ境遇なんだけど、育ち方が違っていて、素直に感情を出せるのが、羨ましくもあり、かわいくもあり、という感じだと思うんですけども。あれはいいです！（←力説）。日高さんラブって感じで、ウフフフ。

―― ハーリー君のキャラクターもいいけど、日高さんもグーだったんですね。

南 ええ。だって、演じる人が違えば、キャラクターって変わってきちゃうじゃないですか。うん。日高さんの声の入ったハーリー君はもう、絶品です！ 私がそんなこと言っちゃいけないかもしれないけれども。もう、ハーリー君、好き♥っていう（笑）。

―― もう、ラブラブ。

南 うん。ルリが、より一層、ハーリー君を大事にしてしまうぞっていう。

―― 手ぐらい握るぞ。

南 一緒に寝ちゃうぞ（笑）。あ、変な意味ではないですよ。

―― （笑）。あそこは見せ場ですから。

南 見せ場ですね。

―― ドキドキシーンですから。

南 そうなんですか（笑）、ドキドキシーンなんですか。サブロウタさんと一緒だともっとドキドキしちゃう。

―― マズイでしょう、それは（笑）。

南 そうですよね。前にアニメ雑誌で、ルリの両脇にサブロ

PROFILE

南央美（みなみ　おみ）　7月13日生まれ。ぷろだくしょんバオバブ所属。東京都出身。B型。デビューは『小さな森の妖精　あいあむ！スマーフ』。少年役での代表作は『しましま・とらのしまじろう』の主人公・しまじろう。少女役ではもちろん『機動戦艦ナデシコ』のホシノ・ルリ。近年では『はれときどきぶた』の則安、『マスターモスキートン'99』のアキタコマチ、『セクシーコマンドー外伝　すごいよ!! マサルさん』のめそ が印象的。

ウタさんとハーリー君がいる絵があって「２人の恋の鞘当ては？」みたいなことが書いてあったんです。でも、サブちゃんじゃ、ヤバイんじゃないのか？　みたいに思いました（笑）。
── サブちゃんは今回の映画では、ルリちゃんを、ずいぶん大事にしていますよね。
南　そうですね。サブちゃんの方がどういう経過で、ルリを大事にするようになったかが、すごく、すごく気になっているんです。勝手にこうじゃないかとは考えているんですが。
── 優しくされたことがあるとか。
南　うん。サブちゃんは、ホントに大事にしてくれるんです。まるで、ホントの三木眞一郎くんのよう（笑）。
── そうなんすか。
南　三木さま、ありがとうございます（笑）。いつもお世話になっています。
── それはプライベートな話なんですね。
南　いろんな所に遊びに連れていってくれたり、悪いことを教えてくれたり（笑）っていう。
── 兄貴なんですね。
南　「おっきい兄ちゃん」って呼んでるんです。
── じゃあ、今回の劇場版の人間関係は、バッチリでしたね。
南　バッチリでした。ホントに（『ナデシコ』に）おっきい兄ちゃんが来ちゃったよ、っていう状態だったんです。
── 髪の色も似ているし。
南　ウフフフ。あれは、ものすごく似てる。……何であんな色になっちゃったんでしょうね。ねえ（注２）。
── なぜなんでしょうね。
南　一番の謎ですね。何故サブちゃんはあそこまで、よくしてくれるのか、そして人柄が変わったのか。ルリに対してラブラブ状態になったのか、ですね。

── アフレコまでのお話を、もう少しお聞きしたいんですが。
南　ルリに関しては、コンテいただいてから、１週間以上、どうしよう、どうしようって悩んで、その流れの中で酸欠状態になってしまいました（笑）。酸欠って言ったら変なんですけど。ルリのこういうところを演じたい、ここのところをこうしたいって、一杯考えすぎてしまって、最後、脱水症状みたいにぐったりなっていました。
── それはアフレコのどのぐらい前になるんですか？
南　コンテをいただいたのが……どのくらい前になるんだろう。アフレコの２週間とか、３週間くらい前なんですけども、そこから、アフレコの日が迫るほどに……。
── 直前まで。
南　もう、直前までです。アフレコの時も、最初に声を出すのが一番怖かったんです……。（監督に）「央美ちゃん、それ違う」って言われたら、どうしようって（笑）。
── 一番最初に録ったのは、どこのシーンなんですか。
南　一番最初に録ったのは、映画の最初じゃないんですよ。途中の、アズマさんが怒鳴ってるシーンで「なんとかのホシノ・ルリです」って言ってるところ。そうですね、その第一声が、今、考えても、「フゥー」（←ため息）って感じで（笑）。全精力を使い果たしてしまいました。
── そこから後は自信がついた……？
南　自信というか、皆さんがそろってきてからは「あっ、みんながいる！」っていう心強さがありました。その一番最初に録ったシーンって、以前の『ナデシコ』とは、違うじゃないですか。ルリちゃんも成長しているし、サブロウタやハーリーと一緒なのも初めてだし。アズマさんも新登場だし。
　だから、リョーコさんが出てきた時は、「あぁぁ、リョーコさ～ん！」って思いました。みなさんに再会して、また一緒に活躍出来たのが、嬉しかったです。ホントに久しぶりに家族と会うみたいな、きっとルリと同じ気持ちなんでしょうね。
── なるほど。他にアフレコで印象的だったことは。

南　ゴートさんをあまり見られなかったのが、残念でした。（ＴＶシリーズの時には）一緒に「オヤジお代わり！」って言ったりしていたのが……。うーん、私は、ゴートさんが好きなので（笑）。あっ、キャラクターのゴートさんも好きですが、（小杉）十郎太さんも好きです。
── （笑）。そういえば、ルリがゴートと絡むシーンはありませんでしたね。
南　そうなんですよお。アフレコ現場では、録音の途中で十郎太さんに「お疲れさん」って言われて、「ああっー」って思っているうちに帰られてしまいました。
── （笑）。
南　『ゲキガンガー』では、父と娘なんですけども、「これさあ、（台本で）３頁くらい娘と話したいよね」って、十郎太さんとお話したことがあるんですけど、実現成らず。
── ああ、言われてみれば、意外と喋ってないですね。
南　父と娘なのに（笑）。仲が悪いのかなあ。
── そんなことないと思いますが（苦笑）。他には？
南「あのスタジオに爆弾でも落としたら、声優業界は大変になるんじゃないの」って言っていたんですけれど。本当に、それくらいメンバーが揃っていましたよね。一緒に演らせてもらって、勉強になりました。
── ベテランの方が多かったですよね。
南　はい、すごく楽しかったです。それに、なかなかお仕事でご一緒する機会のない方達だったんで、私的にはすごく嬉しかった。ウフフフッ、「よし！」って思いながら演っていました。

── 今回の劇場『ナデシコ』関連で、他に印象的だったことはありますか？
南　そうですね……。イベントにも行かせてもらいまして、沢山の人が来てくれて……、それから、イベントで地方に行った時の焼き肉がおいしかったです（笑）。東映さん、ありがとう。
　前売り券で、フィギュア付のがあったじゃないですか（注３）。ウチの両親が、あれが欲しくて、劇場に並んじゃったんですよ。私は止めたんですけど、「いや、並ぶ！」って言って（笑）。
── 若い人達にまじって。
南　ええ。Ｔカードの時も「並んでやる」って言って、父が行ったら、もう売り切れていたらしいんです（笑）。そういうことがありました。
　でも、すごく皆さん楽しみにしてくださっているみたいで、嬉しいです。
── 今度ね、ルリちゃんのウチワができるんですよ。
南　ウチワってどんなの？
── ウチワの形をしたプレスシートなんです。イベント等で配る予定なんですが。丸いボール紙に指を入れる穴が空いている。で、佐藤監督の描いた浴衣を着たルリちゃんが……（注４）。
南　ああー、佐藤監督の描いたルリ！　ほしい～！
── 欲しい？　じゃあ、送っておいてもらいますね。
南　ありがとうございます。佐藤監督のコンテも……。
── いいですよね。コンテの絵。
南　ねえ。佐藤監督の描いたコンテがムチャクチャにいいんです。何故、このまま出版しないんだろう（笑）。
── そうですね。
南　もう、ホントに、コンテを見ただけで、内容が全部分かりますからね。
── 漫画みたいですよね。
南　うん。
── 絵コンテで、映像のリズムまでわかる。
南　そう、凄いんですよ。あっ、ここでこういう気持ちなんだってわかるんですよね。リズムも、きっとこうなんだろうなってわかる。コンテを読んでいたお陰で、アフレコの時に、画面の流れは、ほとんど頭に入っていました。

── そういえば、劇場版では、お馴染みの「バカばっ

か」のセリフは無かったですね。

南　もう１本続編があったりすると、言うんじゃないかなって思うんですけど。

──　コメディ編とかになると、言うかも。

南　言うと思いますよ。今回は「バカ」って言える相手がいなかったというのも、あるんじゃないかと。

──　ああ、なるほど。

南　横で代わりにハーリー君が「艦長のバカぁー」って言ってますけどね。そうですね、今回は「バカばっか」って言わなかったのが……それだけ大人になったねぇ、ということなんでしょうね。でも、まだ少女なんですけどね。

──　精神年齢は高そうですよね。

南　精神年齢は高いし、心は強いし……でも弱いんですよ、心の底は。

──　そうなんですね。

南　そうなんですよ。

ユリカが最後の最後で変わってなくて、嬉しかったな。ユリカが変わっちゃうと、ヤダなって思ったんですよ。

──　ユリカが、落ち着いて騒がなくなったりすると、イヤですか。

南　ええ。「アキト、アキトぉー」って言ってるユリカが好きだったんで。でも、アキトは、あんなだし。

──　劇場版の後、どうなんでしょうね、あの人は。ちょっと心配ですよね。

南　心配ですね。えーと、仲間（由紀恵）さんがおやりになった、ラピスちゃん……。

──　ああ、彼女も心配ですね。

南　心配もそうなんですけど、「君達、どういう仲？」って思っているんです（笑）。

──　アキトとの関係ですね。なるほど、ルリちゃん的には、気になるところですね。

南　そうですね。

──　恋愛感情がないとはいえ。

南　お兄ちゃんを、とられたような気分です。「私はアキトの目、アキトの耳」って言われてしまうと、「なにー！」っていうのがありますよね（笑）。

──　と、熱くなる南さんでした。

南　謎のまま消えてしまったじゃないですか。「私はアキトの耳」って言っただけで終わってしまったような気がする。でも、何故、耳なの、目なの？　っていう。じゃあ、あなたが味見をすると、アキトに味が伝わるの？　みたいな（笑）。

──　なるほど、その手を使えば、アキトはラーメン屋に復帰できるんだ。

南　アキトが作って、ラピスがジュルジュルルルって食べて（笑）。

──　それはグッドですね。でも、それをする時には常に機械をつなげていないとダメなのでは？

南　あっ、そうか（笑）。でも、ホントに不思議なまま終わってしまったので、やっぱり、もう１本いきたいなっと。謎は謎のまま残してはいけないぞっと。その意味でも、続きがあるといいなぁーと思います。

──　さしあたって予定は無いらしいので、後はファンの人の応援に。

南　かかってますよね。

──　「宇宙戦艦もの」だけに人気があれば続くかも。

南　『さらば　ナデシコ』とかね、死んだ人も生き返るとか（笑）。たくさん続いたらどうなってしまうんでしょうね。

──　どうでしょうね。でも、ルリちゃんの成長の描かれ方としては、今回の劇場版で一段落みたいな？

南　そうですね。でも、成長はしているんですけど、基本的なところは、ナビゲーター時代から変わっていないのかもしれないって思っています。

描かれていない３年間、あれが凄く気になります。例えば、次にアニメで続編があったとしたら、また何年か経ってしまうのかなあ。

──　そしたら、また、ちょっと感じがかわって。

南　ルリは、遺伝子操作をされているので、途中で成長が止まっちゃったりするのでは（笑）。それはいやかも。

──　大人になっても、ずっと「電子の妖精」とか呼ばれてしまう（注５）。

南　ああ、あのセリフは、立木（文彦）さんに言われて、ちょっとテレちゃいました。

みんなに、あまり成長がないねって言われて。「いや、そんなことは無い！」って言ったんですけどね。

──　背は、少し伸びているんですよね。

南　女らしい柔らかさというか。女らしい表情になったと思うんですけど。「アキト、逃して惜しかったね」と、いうか。

──　だけど、ここで成長が止まるかも。

南　ですよね。だって、11歳の時点で成長しないでくれって言っていた、ファンの方もたくさん……。

──　ファンの想いが成長を止めてしまうかも。

南　成長止めてしまう。そうですね。

──　実際、あのくらいの歳で背が伸びるの止まる人、いますよね。

南　うん。私も、16歳ごろから伸びてないですから。

──　女の人はそんなものじゃないんですか。

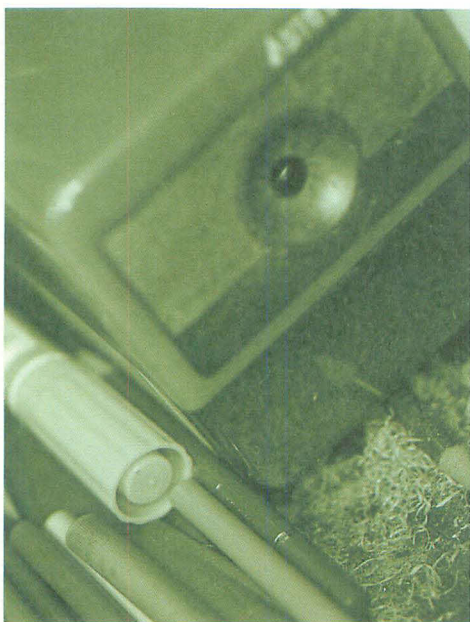
南　お友達で、大学に行ってから、ガァッーと伸びた人がいるんですよ。バスケットの選手みたいに伸びた人が。

──　それでは、最後にファンの人に一言。

南　ルリをこれまでもずっと見守ってくださった方々、プラス初めての方々も、これからもよろしくお願いします。

（1998年6月25日　東京・赤坂にて）

（注１）絵コンテが描かれた段階では、まだ、ハーリーのキャラクター設定は完成しておらず、髪がビンビンに尖った、ハリネズミのようなハーリーとして描かれている。
（注２）三郎太はＴＶシリーズに登場した時は、性格も違っていたが、髪型も髪の色も違っていた。木連の兵士らしい黒い髪だったのだ。
（注３）今回の劇場版『機動戦艦ナデシコ』では、いくつかの特典付の前売り券が販売された。ルリのフィギア付前売り券も、そのひとつ。また、映画公開に合わせて、『ナデシコ』の絵を使ったＴカード、ゆりかもめ一日乗車券等が発売された。
（注４）ルリのウチワ型ブレスシートは、イベント等で配られた。その絵柄は本パンフレットの巻末、STAFF LISTの頁に掲載した。
（注５）戦艦ライラックの艦長アララギは、ルリのことを「宇宙に咲きし、白き花、電子の妖精、ホシノ・ルリ」と言った。そのアララギを演じたのが立木文彦。

後藤圭二

LONG INTERVIEW GOTO KEIJI

―― まず、ＴＶシリーズのお話から伺いたいんですが、最初に『ナデシコ』のキャラクターデザインをするにあたって、ご自分の中で、こんな絵柄で行きたいというような、方向性はあったんでしょうか？

後藤　特に、こうだと決めた覚えはないですね。ただ、麻宮（騎亜）さんからキャラクター原案をいただくまでは、ギャグものというわけではないんですけど、どちらかといえば、キャラクターの等身も高くない、言ってみれば「マンガっぽい」方向性になるのかなとは佐藤監督とも話していたんですよ。ところが、上がってきた麻宮さんのラフ原案が、思ったよりも等身が高くて、ガチガチにリアルというわけではないんだけれども、そういう方向性があったんです。だから、それに合わせて、自分の絵で描いてみようか、という感じでしたね。

―― 仕上がったデザインは、わりとリアルなプロポーションを持ちつつ、どこかマンガっぽいところもあるというバランスでしたよね。

後藤　そのあたりは、描いているときはあまり意識しなかったんですよ。むしろ第１話の時なんかは、監督の絵コンテの絵がマンガっぽいうまい絵だったし、話のノリも軽い感じだったので、あの絵柄で合うのかなっていう不安があったんですね。フィルムになったものを見て、「ああ、大丈夫だ」ってホッとした覚えがあります。

―― ＴＶシリーズを今振り返ってみて、いかがですか？納得した点とか、あるいは反省した点とか。

後藤　納得した点はあまりないですね。結局、時間に追われてしまって、きっちり納得できるまでやれたとは言えないので、そういう意味では、悔いの残る作品です。それだけに劇場版は納得できるものにしたかったんです。

―― 劇場版ではＴＶシリーズよりも絵柄がずいぶん、リアルな感じになっていますよね。

後藤　別にそうなるのが当然と思ってやったわけではないんですが。監督とも、劇場化ということで、絵柄を変えてやっていこうと話したんですよ。自分自身、絵の方がＴＶシリーズのままでは、話に負けてしまうんじゃないかと思いましたしね。それに、自分が過去に劇場アニメ作品を見てきた経験とも照らして、「じゃあ、もうちょっと自分なりに変えてみようか」と考えて、ああいう形になったんです。

―― 変えると言うと、「リアルな方向で」と言っていいんでしょうか？

後藤　必ずしもリアルっていうわけじゃないんです。ＴＶシリーズに比べればもちろんリアルかもしれませんが、アニメのキャラクターとしては、さほどリアルという程までは行っていないと思うんです。例えば、梅津泰臣さん（注１）が描かれるような絵ぐらいまでいけば、リアルと呼べるんでしょうが、そこまで行くと、『ナデシコ』ではなくなってしまいますよね。自分なりに、劇場版として、ここらへんが（絵柄として）一番いいポジションかなと考えながら、キャラクターをまとめてみた結果が、今回のデザインですね。

―― 芝居の点ではいかがですか？

後藤　どちらかというと、キャラクターの絵柄よりは、芝居の点で、よりリアルな方向に向かってますよね。リアル化というか、いわゆる、マンガっぽい表現やアニメ的な表現をなるべくしないように心がけています。劇場版ということで、マンガ的な表現をやりすぎちゃうと、見ている人もしらけちゃうと思うので。

―― ＴＶシリーズのときも、ときどきリアルな芝居や妙に生々しい描写が出てきましたよね。もしかしたら、全般に渡ってこういう芝居がしたいのかな、と思ったりもしたんですが。

後藤　そのあたりは監督がどう考えているかですよね。『ナデシコ』って、リアルな方にもマンガ的な方にも、どちらにも振ることができる作品ではあるんです。監督もきっと、リアルな方向も、おもしろおかしい方向もどちらもやりたいんだろう、というのは、絵コンテを見ているとわかるんです。ただ、今回は、劇場版ということで、やっぱりある程度抑えた芝居でないと辛いと思ったんで。もちろん、ギャグっぽいところは思い切りギャグにしてますけど、全体

としてはなるべくギャグ的な表現は抑えてます。

―― 監督の絵コンテって、ずいぶんマンガっぽいですよね。特に今回はそのままでも読めてしまうぐらいに。ところが、ラッシュフィルムを見せていただくと、コンテからフィルムになる段階で、ある種の飛躍というか、「翻訳」作業が行われていたように思ったんですが？

後藤 そうです。そうやって自分なりに解釈してくのが、自分の仕事であり、原画の仕事だと思ってます。ただ、監督の絵コンテは今回すごくしっかりしているし、説明もきっちりされているんで、「苦しい。厳しい」っていう話を、アニメーターの方からちょくちょく聞きますね。僕自身は、今回のコンテは苦しいと思わないんですが。

特に、今のアニメーターさんは、コンテに縛られちゃって、そこから飛び出せずに縮こまっちゃうというか、自分なりの味わいが出せない人がいるんで、もったいないなと思います。もちろん、あまり好き勝手にやられても、それはそれで困るんですけどね（笑）。今回のようなしっかりした絵コンテなら、自分の持っているモノを、プラスαしていければ、より面白いものができるんですよ。

―― 今回は、作業する上で、随分、こだわった方法をとられているようですね。レイアウト段階でも随分チェックを入れられているようですし。

後藤 ああ。それは今回、最初に「総作監をやってくれないか」という話をいただいたときに、お願いしたことなんです。個人的には、総作監という仕事が好きじゃないんですよ。作画監督さんが直したものをさらに直すわけでしょう。原画を作監さんが直せば、その作監さんの絵になるわけですよね。それにさらに修正を入れるというのは、すごくしんどいし、気持ちの上でもやりたくないんです。ただ、どうしてもという話でしたし、かといって、物量的に作監作業を一人でこなすのは不可能でしたから。それで、総作監をやるならば、作監が原画を見る前に、まず全部こちらで見て、（直し等の）指示を出すというやり方をとらせていただくという条件をつけさせてもらったんです。そこまでやっての「総作監」というクレジットなら、自分でも納得ができるので。作監さんには申し訳ないんですけどね。

―― つまり、レイアウトをチェックする段階でも、原画をチェックする段階でも作画監督さんが見る前に、後藤さんが一度目を通すということですか。

後藤 そうです。つまり、僕が2回チェックしているわけです。レイアウトも原画も僕が先にチェックしてから作監さんに渡す形になっています（注2）。さすがにセリフの間までは見ませんけど、キャラクターの立ち位置をちょっと直したり、芝居などを重点的に見ています。

―― すると、今回の劇場版の作業というのは、後藤さんにとっては、かなり納得のいくものになっているわけですね。

後藤 そうです。あくまで作業のシステムとしては、ですけど（笑）。

―― 今回は、かなり腕のいい作監さんがついていらしているようですね。

後藤 それはもう、みなさん、頑張ってくれて、頭が上がらない状態です。かなり楽をさせてもらっています。

―― 劇場版のキャラクターデザインについて具体的に伺いたいんですが、やっぱりファンのみんなが気になるのは、ルリのことでしょう。今回、成長したルリちゃんというのは、ご自分の中ではどう捉えていらっしゃるんですか？

後藤 一番大きな変化は、ＴＶシリーズの時よりも、人間味が増したと言うか、やや（表情が）柔らかくなったというところかな。もちろん、外見もガラッと変わってはいるんですけど、映画を見て下さった方はわかると思うんですが、中身の方が大きく変わっているんじゃないかな。やっぱり、成長して、仲間と触れ合って、より人間味が増しましたよね。そのあたりを踏まえて、自分なりの解釈を加えて2点ぐらいラフを描いたんです。それがほぼそのまま決定稿になったので、ほとんど一発で出来たと言っていいと思います。

―― 監督からは特にこうしてくれという指示はなかったんですか？

後藤 特にこうというものはありませんでしたね。いつもそうなんですけど、監督は絵柄に関して、こうしてくれああしてくれとは、あまり言わないタイプなんですよ。だから、もちろん細かい点での微調整の指示はありますけど、大きな変更はなかったんです。指示が出るにしても、絶対こうして欲しいという形ではなくて、自由にやらせてもらいました。

―― なぜジュンくんは髪型が変わったんですか？

後藤 確かリョーコが先に、短い髪型のイメージが固まったんですよ。ＴＶシリーズの時から、ジュンとリョーコがちょっと似ているのが気になっていたんです。それで、リョーコの髪を短くしたのなら、ジュンは長くすれば似ないだろうと。

―― 他はあまり極端な変わりようというのはないですよね。

後藤 ユキナが成長したぐらいで、あとはみんな結構大人でしたし、おじさん連中は変わりようもないので。全体に、ＴＶシリーズの頃から、髪型で絵的な面でバランスをとっていたので、女性陣では髪型を変えて変化をつけてみたりした程度ですか。

―― 変わらない人もいますよね。

後藤 イズミは髪型を変えてしまうと、別の人になっちゃうんです（笑）。

―― 劇場版の新キャラクターについて聞きたいんですけど、ラピスに関しては、特にこういう絵柄でという指示はあったんですか？

後藤 監督の絵コンテがあったんですけど、別にそれを参考にはしてないんですよ。昔のルリっぽい感じという話だけは聞いていて、それで僕がまとめてみたんです。

―― ハーリーくんは、コンテから大きく絵柄が変わってますね。絵コンテでは、本当にハリネズミのようでしたが？

後藤 ハーリーくんについては、麻宮さんのラフデザインがあって、それがあの絵柄だったんです。だから、僕はそれをまとめたということで。ハーリーに関しては、ＴＶシリーズでキャラクターをデザインした時のスタンスに、一番近いんじゃないかな。

―― 三郎太に関してはいかがですか？

後藤 あまり悩まずにああいう形にしてみたんですけど、周囲のスタッフからは「アカツキみたいだ」って言われて、ひとりで「違う。似てない」って言い張ったんですけど（笑）。色がつけば、随分違って見えるでしょう。

―― 髪にメッシュを入れたのは、後藤さんのアイデアなんですか？

後藤 あれは監督です。監督から「ポイントが欲しいから入れましょう」と。おかげで、絵がしまりましたね。入れてよかったです。

―― 各キャラクターの衣装に関しては？

後藤 制服や軍服に関しては、麻宮さんが全部デザインされました。

―― 他にデザイン面で印象的だったことはありますか。

後藤 キャラクターが多かったことかな（笑）。とにかく、おやじキャラが多い上に、細かいところまで作らなくちゃいけなくて、苦労しましたね。特に、自分で一から作ったのは、おじさん達なので……おじさんばっかりなのは、つまらなくってね（笑）。

全体として、とにかく、しんどい。もう劇場作品はやりたくないなあ、と思いました（笑）。とにかく、今まで、原画という形でも劇場作品に関わったことがほとんどないので、こんなに大変なのか、と。

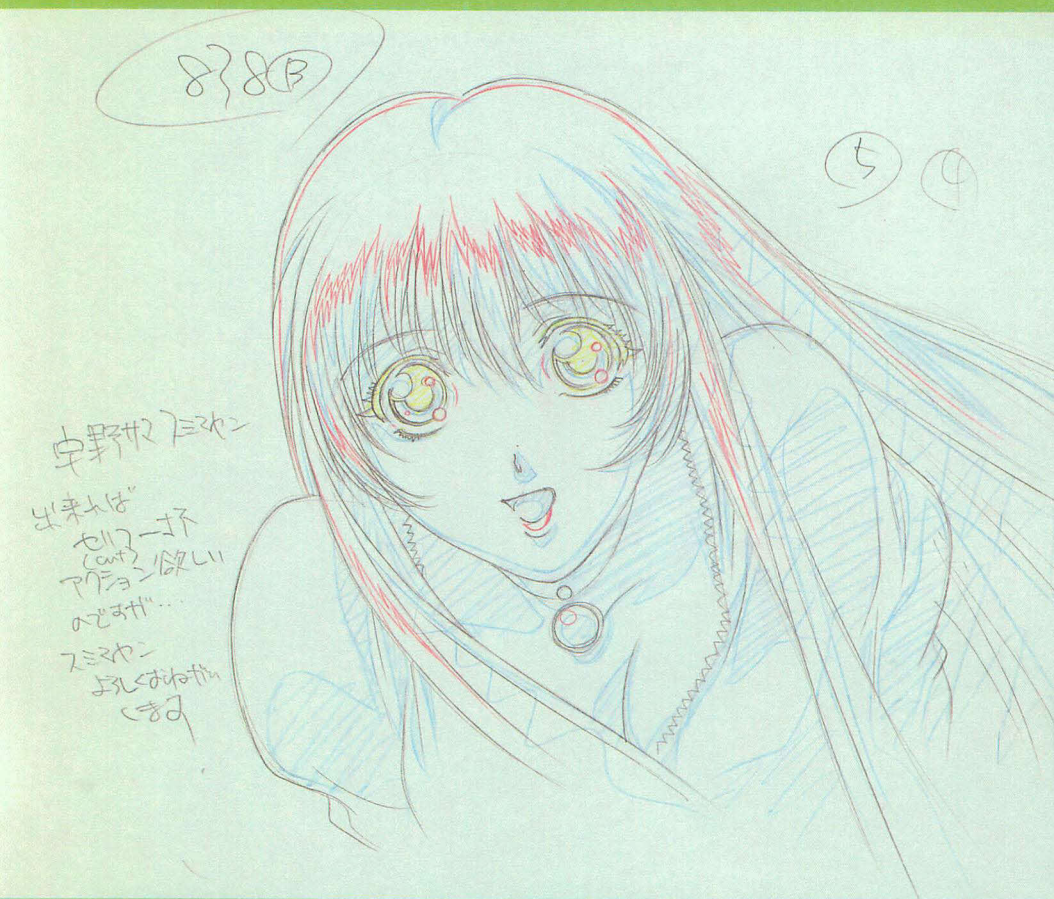
―― 特に、劇場もので、宇宙ＳＦものは大変ですよね。メカに関しても、個々の描写に関しても。

後藤 そうですね。いろいろ細かいところまで気をつけてないと、取り返しのつかないことになってしまいますからね。

自分自身に関しては、とにかく、劇場版の作業が出来るだけのテンションに持っていくのに苦労しました。ようやくこの1、2カ月で、ここまで来たか、という感じなんです。

―― 今はテンション、上がっているんですか？

後藤 上がってきています。

―― 一応、これで、アニメとしての『ナデシコ』の完成形が見えるというか、解答が出るわけですね。

後藤　（笑）そうですね。
――　今回の劇場版の、お話についてはどうですか？
後藤　内容は気に入ってます。逆に、ああいういい絵コンテをあげられてしまったので、作画陣は手が抜けない（笑）。これをきっちり作れば、ものすごい傑作になるのでは、って思っています。絵コンテがものすごく遅れたんですけど、文句が言えないのは、そのせいもあるんですよね。大月（俊倫）さんも言っていましたけど、あのコンテをもらって、仕上がったフィルムがつまらないものだったら、みんなの吊し上げをくっちゃいますよ。そういう意味では、僕自身出来上がりが楽しみです。

――　ちょっと前の話まで戻るんですが。さっきのリアルなプロポーションについてなんですけど、後藤さんは、以前、アトリエ戯雅にいらっしゃったそうですね。戯雅といえば、ビーボオーがルーツですよね（注３）。
後藤　ええ。僕は、学生の頃に『イデオン』や『ザブングル』、『ダンバイン』、『エルガイム』（注４）を毎週見ていた口だったんですよ。一時期は、湖川さんの絵の模写ばっかりしていました。『ガンダム』も好きだったんですけれど、安彦（良和）さんの絵は難しすぎて（笑）。だから、自分の中で、湖川さんの絵が元になっているのかもしれませんね（注５）。
――　なるほど。湖川さんの作画は、ひとつの技法として成立してますよね。
後藤　ええ。湖川さんの絵は、絵の論理としてわかりやすいから。
――　パースとか構図とか。
後藤　ええ。
――　湖川さんとは直にお仕事なさってないんですか？
後藤　直接はないですね。ある作品の打ち入りの時にご一緒させてもらって、ビールついでもらって恐縮した覚えがあります（笑）。
――　後藤さんの絵を拝見していると、男性の骨格は勿論、女性でも骨格がハッキリしているんで、ちゃんとデッサンを勉強してきた人なのかなって思っていたんですが。
後藤　いや、デッサンはやってないんです（笑）。
――　じゃあ、骨格を意識した絵を描くっていうのは。
後藤　ビーボオー系の絵を描いているうちに、自然とそうなっちゃったのかもしれませんね。
――　後藤さんの絵は、女性のプロポーションに関して、とりたてて美化しないところがありますよね。足が太い奴は太いんだーみたいな（笑）。そこが新鮮だなと思うんですが。
後藤　やりすぎるとやばいんでしょうけどね（笑）。そういう意味で、リアルに描きつつ、アニメーションの絵としてかわいいというか、きれいというか、そういう風に見せられればベストなんじゃないか、と考えているんですよ。

（1998年6月27日　東京・国分寺にて）

PROFILE

後藤圭二（ごとう　けいじ）　1968年11月4日生まれ。フリー。東京都出身。B型。高校卒業後、アトリエ戯雅に入社。その後、プロジェクトチーム・ムー（後のフェニックス）を経て、現在はフリー。特に近年の活躍はめざましく、『機動戦艦ナデシコ』をはじめ、『爆れつハンター』『はいぱーぽりす』『エルフを狩るモノたち』等の人気作のキャラクターデザインを手がけている。今回の劇場版では、キャラクターデザイン＆総作画監督として参加。

（注1）梅津泰臣は『メガゾーン23 PART II』『ロボットカーニバル』等で知られるアニメーター。リアルタッチの作画では業界でもトップクラス。
（注2）総作画監督をおく制作スタイルにおいては、作画監督がチェックした後に、さらに総作画監督が目を通すという形式が一般的。左頁上に掲載したのが、今回の劇場版で、レイアウト段階で彼が描いたラフ。
（注3）アトリエ戯雅は北爪宏之が主宰していた作画スタジオ。作画スタジオ・ビーヴオー出身のスタッフが中心になっていた。
（注4）『イデオン』、『ザブングル』、『ダンバイン』、『エルガイム』は、いずれもサンライズ制作のロボットアニメ。いずれの作品も湖川友謙がキャラクターデザイン、あるいはアニメーションディレクターを担当しており、彼が主宰するビーボオーが作画の主力となっていた。
（注5）湖川友謙はタツノコ出身のベテランアニメーター。その独自のパース理論を駆使したリアルタッチの作画は、多くの作品、アニメーターに影響を与えている。

ナデシコ世界の歴史

【21世紀】

科学技術の進歩と資源の枯渇、そして増えすぎた人口は、人類の目を地球外へと向けさせることとなった。人類は、地球からもっとも近い大地——月にコロニーを建設し、その勢力圏を宇宙へと拡大させていく。ナノマシーンの研究が本格化したのも、ちょうどこの頃である。

【22世紀（初頭〜中頃）】

人口を増やし、歴史を重ねた月自治区は、22世紀に入ると次第に独自の文化圏を形成しはじめる。それはやがて、月の独立運動へと発展し、地球との関係を緊張させた。勿論、当時の月自治区に地球と対抗できる実力はない。しかし、地球側も月が自治区という体裁を取っているため直接的な干渉は行なえない。そのため、地球側は月内部に密かに介入し、内部抗争を誘発させることで、独立運動の沈静化を狙った。結果的に、この地球側の工作は成功し、月は独立派と共和派に分裂。月の独立運動は具体的な結果を出すことなく頓挫した。

内部抗争に敗れた独立派は、テラフォーミングが始まったばかりの火星へと逃亡する。彼らは偶然にも、ここで「遺跡」を発見する。この「遺跡」は、古代火星文明が残したもので、人類の科学テクノロジーを遥かに陵駕するものであった。しかし、独立派の壊滅を狙う地球側は火星に対して核ミサイルを使用。独立派は火星をも追われ、人類未踏の宇宙へ逃亡を余儀なくされた。なお、地球側の月への内政干渉と以後の独立派追討行為は一般には知らされず、後の第一次火星会戦に端を発する一連の戦役という悲劇を生むこととなる。

一方、核攻撃より逃れた独立派は、木星へと逃亡。勿論、人的物的資源の不足した彼らが、テラフォーミングも行われていない木星圏で生存することは不可能であった。しかし、木星で「遺跡」を発見したことから状況は激変。「遺跡」から手に入れた技術を生かして過酷な環境を克服し、木星圏に「木星圏ガニメデ・カリスト・エウロパ・及び他衛星国家間反地球共同連合体（通称：木連）」を建設するに至る。

予想される外宇宙生命体との接触に備え、国際連合が「地球人類宣言」を採択する。これにより、月を含む地球圏の勢力は、超国家的な組織——地球連合として再編成された。

【2178年】

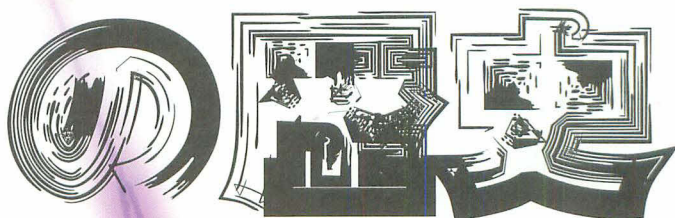
火星の砂漠に、20年後より、イネス・フレサンジュが出現。アジア圏最大のコングロマリット・ネルガル重工傘下の研究所にて保護される。

火星極冠で鉱山を開発中だったネルガルが「遺跡」を発見する（これは以前、月独立派が発見したものと同じである）。しかし、この発見は「遺跡」の技術独占を狙うネルガル上層部の決定により一般には明かされず、極秘裏に調査・研究が進められた。

【2186年】

火星でクーデターが発生する。このクーデターは連合宇宙軍撤退直後に行われ、軍事的な空白状態で展開された。しかし、クーデターは短期間に鎮圧され、犠牲者もテンカワ博士など数名に留まった。このように事態が大きな混乱もなく終息したのは、このクーデターが、極冠遺跡の存在を秘匿したいネルガルが、テンカワ博士らを暗殺するために起したものだったからである。

【2195年】

10月1日、火星に駐屯していた連合宇宙軍第一艦隊と木連（地球側では、以降、木星蜥蜴と呼称される）の先遣隊との間で、最初の大規模戦闘が行われる。チューリップ（木連名：次元跳躍門）を中核とする木連側無人兵器群の前に、連合宇宙軍は惨敗。チューリップ1基を破壊しただけで全面撤退を強いられ、戦線は月付近まで後退することとなった。この戦いは「第一次火星会戦」と呼ばれ、地球では地球外勢力との初の戦闘として報道された。なお、この戦闘中、ユートピアコロニーにいたテンカワ・アキト、イネス・フレサンジュ両名が、人類初のボソンジャンプに成功しており、別の意味でも記録するに値する日となった。

【2196年】

「遺跡」の技術を応用した初めての宇宙戦艦、ナデシコが就役する。このナデシコは、民間企業であるネルガル重工が建造、運営するという従来の戦艦とは異なった性格を有する艦であった。これは、戦況が思わしくない連合宇宙軍側と、スキャパレリプロジェクト（火星の極冠遺跡を奪還する計画）を実行したいネルガル側の思惑が合致したゆえである。また、同艦は主な乗組員を民間から集めていたが、能力重視の採用を行なったため素行に問題のある者が多く、そうした意味でも個性的な艦となった。

10月

ナデシコは就役するや軍とは別行動を取り、軍の防衛システムを突破して、単独で火星を目指した。

【2197年】2月

ナデシコが火星に到達し、後にボソン・ジャンプの理論解明に大きく貢献することとなるイネス・フレサンジュ博士を救出する。しかし、極冠遺跡奪還の目的は果せず、木連側無人兵器に包囲されたナデシコは、チューリップへの進入を余儀なくされる。偶然にもA級ジャンパー3名（テンカワ・アキト、ミスマル・ユリカ、イネス・フレサンジュ）を乗せていたナデシコは、人類初の有人ボソンジャンプに成功し、8か月後の月付近に跳躍を果たした。

10月

第四次月攻略戦。その戦場に、8か月前からナデシコがボソンジャンプしてくる。なお、戦闘自体は、ナデシコ2番艦コスモスの投入等により地球側の勝利に終わった。この後、ナデシコは軍の指揮系統に組み込まれ、地球各地を単艦で転戦することとなる。

12月

アトモ社の実験施設を、木連のジン＝タイプが急襲。この時の戦闘で、テンカワ・アキトが単独ボソン・ジャンプに成功、2週間前の月に出現する。

【2198年】1月

ナデシコ、木連の白鳥九十九少佐と接触する。これにより木連の正体がナデシコのクルーに漏洩してしまう。

2月

木連より和平の使者として、白鳥ユキナがナデシコに来訪する。しかし、軍上層部及びネルガル会長の判断により、和平の申し出は黙殺され、ナデシコは活動を凍結される。この決定に反発したナデシコの一部クルーが白鳥ユキナと共に逃亡、地球に潜伏する。

ホシノ・ルリが中心となり、潜伏中だったナデシコのクルーがナデシコを奪取。連合宇宙軍の防衛システムを突破し、再び木連の白鳥九十九少佐と接触する。ナデシコは、単独講和を結ぶべく、木連の実質的な指導者・草壁春樹中将と会見するが、会見は白鳥九十九少佐の暗殺によって決裂した。この白鳥少佐暗殺事件は、木連では地球側の騙し討ちと大々的に報道されたが、実際には国民の士気昂揚を狙った軍上層部の策略であった。

3月

ネルガルのアカツキ会長率いるナデシコ、カキツバタの２艦が、火星へとボソンジャンプし、極冠遺跡の奪還に成功する。木連側が優人部隊をはじめとした戦力で再奪取を図るも、ナデシコは「遺跡」の演算ユニットごとボソンジャンプし、両陣営の届かない所へと跳躍してしまった。以後、戦争の目的を失った木連、ネルガル重工の戦争継続意志は急速に減退し、後の休戦に繋がっていく。

5～6月

木連で「熱血クーデター」が発生する。クーデターは、白鳥九十九少佐謀殺事件の真相を知った若手穏健派が中心となり、徹底抗戦を唱える木連の実質的な指導者・草壁春樹中将に対抗する形で行われた。結果としてクーデターは成功し、草壁春樹中将は戦闘中に行方不明に。以後、秋山源八郎を中心とする若手穏健派が政権を運営していくこととなる。なお、秋山源八郎とともにクーデターの中心的人物であった月臣元一朗中佐も、この時のクーデターで行方不明になっている。

9月

熱血クーデターにより誕生した新政権と地球連合の間に、休戦条約が結ばれる。この休戦により、元ナデシコのクルーも抑留を解かれることになった。

【2199年】3月

反ネルガル派勢力の主導により、新地球連合が発足する。それに伴い、連合宇宙軍と併存するかたちで、地球連合統合平和維持軍が結成される。以後、ネルガルは勢力を減退させ、会長のアカツキ・ナガレは公の場から姿を消す。

6月

テンカワ・アキト、ミスマル・ユリカの二人が同棲生活（といっても、ホシノ・ルリも同居していたようだが）を経て結婚する。

テンカワ夫妻、シャトル事故で死亡。続いて、イネス・フレサンジュ博士も飛行機事故で死亡する。しかし、この二つの事故は、実際には「火星の後継者」によるＡ級ジャンパー誘拐事件であり、死亡報道はネルガルの工作であった。

12月

試験戦艦ナデシコＢが就役する。所属は、地球連合宇宙軍第四艦隊。艦長には、軍に戻った元ナデシコのオペレータ、ホシノ・ルリ少佐が選出された。なお、これは連合宇宙軍史上最年少艦長の記録更新でもあった。

【2200年】

副長に、元木連の高杉三郎太大尉、副長補佐にマキビ・ハリ小尉を迎え、ナデシコＢの活動が本格化。幾多の事件を解決し、功をあげた。

クリムゾングループが発起人となり、未来の移動手段としてのボソンジャンプを研究していた「ヒサゴプラン」が、ネットワークとして機能しはじめる。しかし、実際には同プランは元木連・草壁春樹中将を頂点とするグループ「火星の後継者」たちによるものであった。

【2201年】

「火星の後継者」が武力蜂起。彼らはターミナルコロニー・アマテラスに秘蔵されていた「遺跡」の演算ユニットを奪取すると同時に、火星極冠遺跡を占拠する。この行動には、統合軍からも多数の同調者を生み、更に「火星の後継者」側のボソンジャンプを使った一連の攻撃によって、統合軍は混乱状態に陥った。

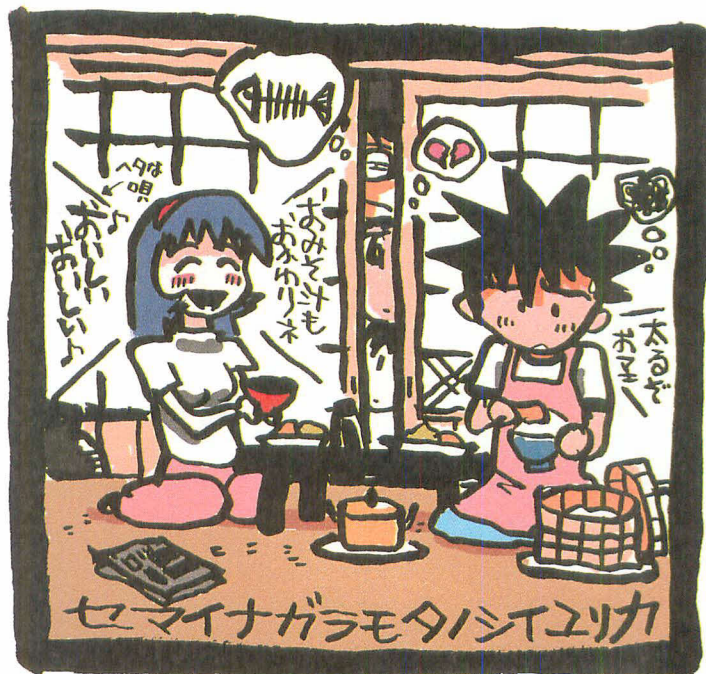
一方、連合宇宙軍は極秘にナデシコＣを就役させる。ナデシコＢから転属したホシノ・ルリ少佐を艦長とするナデシコＣは秘密裏に任務（首謀者、草壁春樹の逮捕）を遂行するため、元ナデシコのクルーを集めて行動を開始。

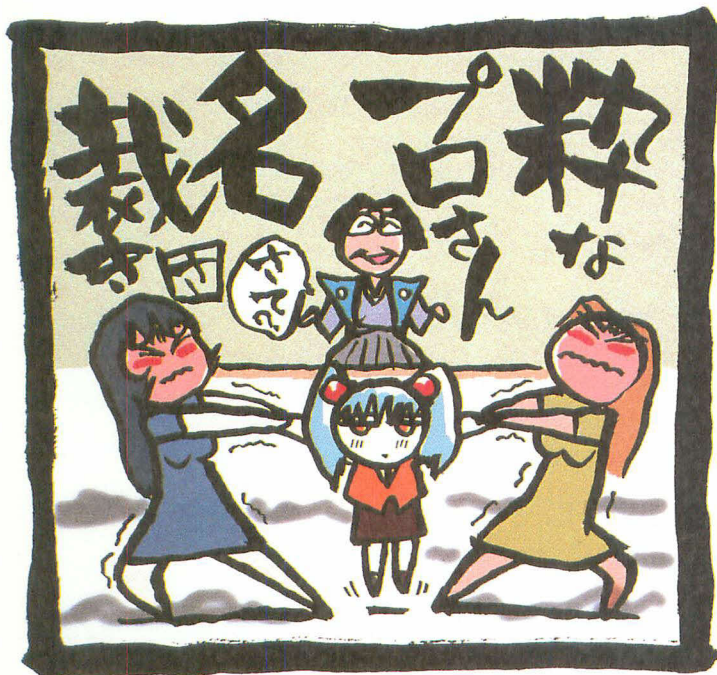
クウハクノサンネンカン

空白の三年間

ＴＶシリーズと劇場版の間の、アキト、ユリカ、ルリのドラマについて説明することにしよう。

ナデシコ、ネルガル、木星連合三つ巴の火星の遺跡争奪戦の中、ナデシコのクルーが遺跡を宇宙へ飛ばしてしまったのが2198年3月。

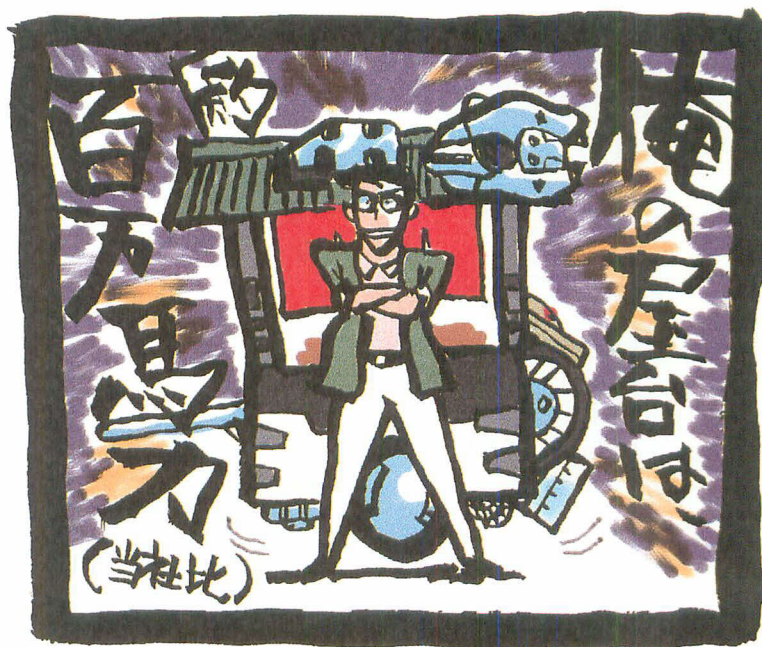
その3月から9月まで、ナデシコのクルーは、サセボに用意された施設で、軍の監視下で抑留生活を送っていた。火星の遺跡の一件では、彼らは戦犯扱いされてもしかたがないのだが、その事を表沙汰にするとボソンジャンプの秘密が世間に知られてしまう。地球連合はそれを避けたのである。アキトは、サセボでの抑留期間中は、以前世話になっていた雪谷食堂で再び、料理の修行していた。

サセボで彼らが暮らしていた施設は、古典落語に出てくるような長屋であった。この長屋生活時代に、ユリカとアキトの仲は急激に接近したようだ。火星の遺跡を宇宙へ飛ばした時、アキトはユリカに「好きだ」と言ってしまっている。一度、告白してしまった以上、押しの強いユリカを、アキトが拒めるはずがない。

長屋時代の終わり頃に、身寄りのないルリを誰が引き取るかで一騒動があった。皆が、自分がルリを引き取ると言い出したのだ。最後まで粘ったのが、ユリカとミナトだった。見かねたプロスペクターが間に入り、ユリカとミナトに左右からルリの手をひっぱらせた。

江戸時代の「大岡裁き」の再現である。手を引かれたルリが痛がったため、ミナトは先に手を離してしまった。

「最後まで手を離さなかったのは、それだけ艦長の愛情が深かったからですな。ならば、ルリちゃんの育ての親は、艦長とアキトさんに決定です」とプロス。「ええ〜〜！　それじゃあ、大岡裁きと逆じゃないの」とミナトが文句を言ったが、プロスはきいてくれない。最初から彼は、経済力のあるミスマル家に、ルリを預けるつもりだったのだ。

２１９８年９月。地球と木星は休戦条約を結んだ。それと前後して、ナデシコのクルーも長屋生活から開放された。その後の身の振り方

は、それぞれの自由だった。軍に残る者もいれば、別の仕事につく者もいた。アキトは、ラーメンの屋台をはじめた。一人前の料理人への第一歩である。ユリカは軍に残ったが、仕事を終えた後に、毎晩、アキトの屋台を手伝っていた。大晦日の除夜の鐘も、二人で屋台を引きながら聞いた。何とも微笑ましい話である。「ラーメン屋とお嬢様の恋」として、近所で評判になった。

アキトとユリカが親密になっていくにつれ、機嫌が悪くなっていったのが、愛娘家のコウイチロウであった。ユリカが、アキトの話をするたびにひきつる眉。

2199年1月。ユリカが「いつもアキトにお料理を任せるわけにはいかないわよね。ラブラブの新婚ライフにそなえて、私も料理をおぼえなくっちゃ♥」などと言ったのを耳にして、コウイチロウは怒った怒った。「あんなどこの馬の骨だかわからんやつとの結婚などは、許さん！」と宣言。当然、ユリカは反論。「馬の骨じゃないよ。ラーメン屋さんだもん」「ラーメンだろうと、ソーメンだろうと、ダメなものはダメだ！」断固反対の父であった。

困ったユリカは、そのことを幼なじみのジュンに相談。ジュンはその頃も、ユリカのことをあきらめきってはいなかったのだが、持ち前の人のよさのため相談役になり、こともあろうに彼女とアキトが結婚できるように協力すると約束してしまった。後で、彼が「バカバカ、ボクのバカ」と自分の優柔不断さを思いっきり悔いたのは言うまでもない。

その後も、ミスマル親子の仲は険悪さを増し、ついに、ユリカは家出を決意。「ルリちゃん、こんなひどい家には住んでいちゃダメよ」などとムチャクチャなことを言って、ルリも一緒に連れていってしまう。ジュンは、その家出の荷造りを手伝い、さらに荷物持ちまでやってしまう。「ああ、どうしてボクは、こんなことを……」と、トホホなジュンであった。

大きなトランクをいくつも抱えたユリカとルリが、アキトの家に転がり込んできた。しかし、アキトの家はサセボ時代と似たり寄ったりの四畳半一間だった。ユリカの荷物で、いきなり部屋が一杯になってしまった。

そんなこんなで、アキトとユリカとルリの三人の生活がはじまっ

た。ルリが一緒にいるとはいえ、恋する若い二人がひとつ屋根の下で暮らすのだ。トーゼン、ラブラブでドキドキなことになるかと思われたが……。アキトの借家は、ウリバタケの紹介で彼の叔父から借りたものだった。ウリバタケの家も近くにあり、日に何度もウリバタケはアキト達を覗きに来た。勿論、半分はアキト達の世話をやくためで、もう半分は興味本位であった。二人が一緒に暮らし始めたという話を聞き、他の旧ナデシコクルーも次々とアキトの家に遊びに来た。そんなわけで、あまり、ラブラブやドキドキをやっているヒマはなかった。

ちなみに、アキトが使っている屋台も、ウリバタケが作ってくれたものである。発明好きの彼が作ったものだけに、ボタンを押すと花火が出たり、いきなり変形したりと妙な仕掛けが施されており、

使っているアキト達が面食らうことも多かった。

それでも、楽しい日々ではあった。夜は三人で川の字になって寝た。ユリカの寝相が悪いので、ルリがつぶされないように配慮して、アキトが真ん中に寝た。やっぱり、食事はアキトが作った。ラーメンの屋台をひく時には、ルリもチャルメラを吹いて手伝った。

それは、アキトとにとっては久しぶりの、ルリにとっては生まれて初めての「家庭」だった。

2199年2月。アキトとユリカとルリの三人の生活は続いていた。

根が真面目なアキトは、真剣に考えた、いつまでもこんな同棲みたいな生活をしていてはいけない。やっぱり、きちんと結婚しなくちゃいけないんじゃないか。

とある天気のいい日の午後。仕事の合間に、アキトは自分から、ユリカにプロポーズをした。TVシリーズの頃から考えると、驚くほど積極的な行動である。といっても赤面しつつ「す、するぞ……け、結婚……」とボソボソと言ったらしいが。それを聞いたユリカが飛び上がって喜んだのはいうまでもない。

次は、ユリカの親父さんの説得だ。

「何度来ても同じだ。どこの馬の骨ともしれぬやつに、うちの娘はやれん」「ウチは馬の骨なんて使ってないっス。トンコツと鶏ガラッス」「そうよ、アキトのラーメンおいしいんだから」「それは欲目

というものだ」「欲目じゃないよホント目だよ」「ピ〜ヒャララ〜（←ルリのチャルメラ）」「ほら、ルリちゃんもおいしいって言ってるよ」「よし、ならばワシが食ってやろう。もし本当に旨ければ結婚でも何でもするがいい！」

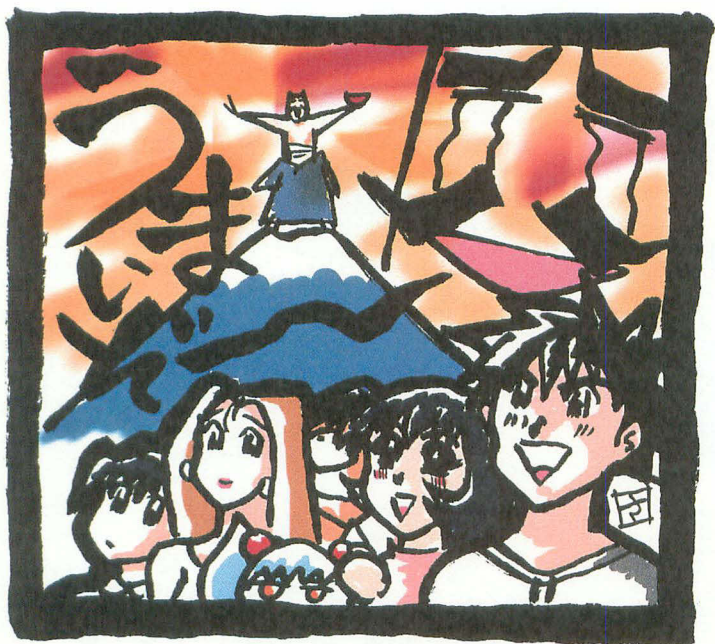
……といったような、やりとりがあり、「ラーメン勝負」をすることになった。まるでグルメマンガのよーな展開である。

いよいよ、ラーメン勝負当日。話を聞きつけた、イベント好きの旧ナデシコクルーも、見物にやってきた。アキトが作ったのは、東京風醤油ラーメン。余計な技は一切使わず、麺とスープそのものの味で勝負を挑もうというのだ。アキトの気迫に思わず一同、息をのむ。

アキトのラーメンを口に運ぶコウイチロウ。「うっ、この味は！」さらに、もう一口、さらにもう一口。コウイチロウは麺を口に運ぶ。スープを飲む。「どうなの、お父さま。アキトの料理は？」と心配

そうに訊くユリカ。「うまい、うまい、うまいぞ〜〜〜！」と叫ぶ、コウイチロウ。その叫びは、日本中に響き渡ったという（←ちょっと大げさ）。

かくして、アキトとユリカの結婚は認められた。その後、トントン拍子で話は進み、2199年6月。二人の結婚式が行われた。心から祝福する者、ちょっと悲しむ者、羨ましく思う者と、それぞれの心中は様々であった。結婚にたどり着くまでの過程を脇で見ていたルリは「オトナって、いろいろと大変だなあ」と思ったようだ。

だが、幸福の絶頂にいたアキトとユリカを、突然の不幸が襲った。新婚旅行で二人が乗ったシャトルが、事故のため、爆発してしまったのだ。それは本当は事故ではなく、「火星の後継者」がA級ジャンパーを誘拐するために仕組んだ事件であり、アキトもユリカも本当は死んではいなかったのだが、その真実はルリ達にも伝えられることは無かった。勿論、それはルリにとってもショッキングな出来事だった。

ルリは、その後、ハルカに引き取られるが、同年の暮れに、宇宙軍に戻った。そして、三郎太やハーリーと出逢い、新造戦艦ナデシコBの艦長として活躍を始めたのである。だが、新しい環境での生活が始まっても、アキトやユリカのことは、彼女の心の中で、忘れることができぬ大きなものであり続けていたようだ。

イラスト／佐藤竜雄

原画／後藤圭二

原画／後藤圭二

── 現在、劇場版の製作も終盤にさしかかっているところだそうですが、いかがですか、現場の方は？

佐藤 大変ですけど、みんな一丸となってやっているんで、いい雰囲気ですよ。誤解されやすい言い方かもしれませんが、もともとＴＶシリーズの『ナデシコ』のスタッフというのは、寄せ集めでしたから、こういうチームワークができるまでが大変でしたけどね。

── それは、スタッフが、それぞれ色々なところから集められたということですか？

佐藤 そう。「どうしてオレが呼ばれたんだろう」みたいな感じで集まっているところがありましたからね。かくいう僕がそうでしたから（笑）。でも、その分、状況がきつくなってくると、逆にチームワークは高まってきますからね。あとは（フィルムが）上がるだけです。

── 期待してください、と。

佐藤 ああ、そうですね。

── 今回の映画について聞く前に、まずはＴＶシリーズのころの話からを伺いたいと思います。今の時点で振り返ってみてＴＶシリーズというのは、監督にとってどういうものでしたか？

佐藤 うーん。勉強させてもらったなという感じです。

── というと、具体的には？

佐藤 僕もまだそんなに演出のキャリアはないんですけど、演出というと結局、脚本との関わりが大きなテーマになるんです。そういう意味で、『ナデシコ』というのは、初めて、「自分」というものを出してくる若手のライターさんと組んだ作品だったんですね。

── なるほど。

佐藤 僕は、もともと亜細亜堂（注１）という会社にいたわけですけど、そこで教わってきた演出というのは、他のスタッフの良さを出してあげて、それに自分の個性がちょっと出ればいいかな、という仕事だったんです。たとえるなら、アントニオ猪木のプロレスのようなね（笑）。だから、シナリオライターさん達がこれだけ頑張っているんだから、そのいいところが出ればということで、『ナデシコ』では、脚本には全然手を入れていないんですよ（注２）。それはそれで、ひとつの実験ではあったんです。

── それは、脚本通りやったらどうなるかということですか？

佐藤 それ以前に、「脚本通り」っていうのは、いったいどういうことなのかなっていうのを試してみたかった、ということですね。

── それは、脚本家に恵まれたシリーズだったからできた、ということでもあるわけですね？

佐藤 そうですね。それだと、演出家の力という「反作用」が物語上でないわけですから、脚本の方向がズレちゃったら、ずっとそのまま行っちゃうっていう、危険はあったんです。でも、まあ、それもいいかなって（笑）。

それから、ＴＶシリーズへの関わりの話をすると、僕自身、わりとなし崩し的だったんですよ。最初はどんなものかなって見物しにいったら、いつの間にか、自分が火事場の屋根でまといを振っていたという感じなんです。そもそもＴＶアニメの監督というのは、受け身で仕事を引き受けるケースが多いと思うんです。だから、そのつもりでいたら、それだけじゃなくて、自分で引っ張っていかなきゃいけない、というスタンスもあるんだなということが、よくわかった作品ですね……うーん、ヒドい話ですね（笑）。

── すると、必ずしも、「この作品は最初から最後まで、自分が引っ張ったゾ」とは言えないわけですね。

佐藤 さっきも言ったように、そもそも企画段階で呼ばれたときに、「なんで僕を呼んできたんだろう」と思いながら参加したんでね。最初は、ロボットものに、亜細亜堂的な日常的な演出が求められているのかな、と思っていたら、その路線が途中でひっくり返ってしまったんです。それで、自分で仕切らなきゃいけなくなって、まるでユリカのような状態に。

── ユリカですか（笑）。

佐藤 まあ、スカウトされて参加したんだけれど、状況が進んでいくうちに、自分でやらなきゃならなくなったというところが、ユリカかな、と。

それまで、僕がやっていた監督という仕事は、確固とした原作があって、製作サイドがあってという形で、ある種、その調整役のような感じだったんです。いわば、演出という役職がちょっとグレードアップしたようなものとしての監督であって、原作というレールがあって、そこにちょっと自分の味が出ていれば、ＯＫ、というぐらい。

── ところが、『ナデシコ』ではそうではなかったと？

佐藤 自分でレールを敷かないといけなかった……というのが、シリーズが始まってから、ある程度作業が進んでから、わかったんです。

── それは「敷かなければいけない」ということもあるんでしょうけど、「敷いていい」ということでもあったわけですよね？

佐藤 それはそうです。おそらく、『エヴァンゲリオン』が成功を納めたので、そういう（内容をスタッフに任せる）システムが有効なのでは、という判断があったんだと思うんですけどね。でも、連れてきた監督……つまり自分のことですけど……っていうのは、そういう世界を全然知らなかったわけですね。そのあたりの戸惑いと、でも、逃げられないと腹をくくった……それが遅かったんで、ゴタゴタしたところがありますね。

おそらくは、ＸＥＢＥＣさんも困ったと思うんですよ。「コイツは何者なんだろう」って感じだったんじゃないかなあ。プロデューサーの下地（志直）さんには、終わる頃になって、「（君のことが）ようやくわかった」って言われましたから（笑）。

── かといって、ＴＶシリーズの『ナデシコ』が失敗作だったというわけではないですよね？

佐藤 勿論です。そういったことも含めて、その場、その場の状況で、自分で思ったように、好きなように作ることができましたから。思い切りよく作った、男らしい作品だと思ってます。

── 思い切ってダーンと作って、気持ちよく終わった、と。

佐藤 ええ。最終回に関しては、色々言うファンの方もいらっしゃいますけど、あれはあの時点でのベストな終わり方だったと思っています。ストーリーエディターの會川（昇）さんもシナリオをダーンと書いて、後は僕に任せてくれたわけですしね。……ただ、まさか映画があるとは思わなかった。そこが大きな誤算だったんですね（笑）。

── あのまま終わっていたとしても、設定的な謎は少し残ったけれども、ドラマとしては完結して、アキトとユリカの関係もチュウして決着がついた。それはそれでよい終わり方だった、と。

佐藤 そうですね。ただ、時期が悪かったなあ。

── それは『新世紀エヴァンゲリオン』の直後だったということですか？ ある意味、謎が解かれないままに終わった最終回が話題を呼んだ。

佐藤 ええ。わりと最初から『ナデシコ』は『エヴァ』と比べられてましたよね。まあ、作っている方も意識していたと思うし、第一、「『エヴァ』と、同列に見ないで欲しい」なんてのはね、ヤボってもんでしょうからね。ただ、ＴＶシリーズにはＴＶシリーズで決着はつけていたから、劇場版という話がきたときに、それをもう一度掘り返そうという気は、全然なかったんですよ。

── いまだに、ファンの方からは「劇場版で遺跡の謎は解かれるの？」って訊かれますよ。

佐藤 それはきっぱり言いますけど、解きません……ああ、ヒドい言い方しちゃうなあ。ＴＶシリーズの最終回は、言ってみれば、風呂敷を畳む話でね。それが、ちょっとこぼれちゃったかなって。ただ、こぼれた部分がＳＦ設定の部分だったから、ＳＦアニメだと思ってみていた人には不評を買ったのかもしれませんね。ただ、限られた時間の中で、キャラクターをとるか設定をとるかと選択した中では、ベストな終わり方だったと思いますよ。ちょっと気張って言えば「プロに徹して作った」最終回ですかね。

── というところで、劇場版の話に移りたいと思うんですが、劇場版はＴＶシリーズと随分とノリが違いますね。

佐藤　それは声優さんにも言われました。結局、やりたいようにやっちゃうとこうなっちゃうのかなあ、オレは、と思いましたね。

――　こうなっちゃう、というと？

佐藤　結局、ＳＦアニメといいながら、時代劇だなあと思ってね。時代劇と言うか、邦画ですよね。洋画を見るより、邦画を見ている人間だな、オレはって。……まあ、それは見てる方が分析してくれればいいんですけど。

自分でコントロールすると、やっぱりもろに自分が出ちゃうなと思いましたね。ＴＶの監督というのは、なんだかんだ言って、他のスタッフがついてこられないと困るから、どこか他人に合わせてるんですよね。今回はその必要がなかったから、好きなようにやってますからね。これは他の人は真似できねえや、と思いましたね。かと言って、特殊な技法を使っているというわけではないんですけど。

――　テイストの問題ということですか。

佐藤　そう。「空気」の問題ですかね。以前『飛べ！イサミ』を監督していたときに、「要するにいい人達が出るアニメなんですね」って言われたことがあるんですよ。でも、それは、どこか他のスタッフに話を伝える上で、そう割り切った方が伝わりやすいから、そういう形でもいいかなと。ホントはちょっと違うんだけど…。で、今回の場合はどうなのか。やっぱり「みんないい人」だったのか、逆に他の方に訊いてみたいですね。

――　今回、映画を見たファンが一番気になるのが、映画の中でのユリカとアキトの扱いだと思うんですけど、ああいう扱いにしたのは、どういう意図なんですか？

佐藤　映画の企画がきたときに、アキトとユリカの話にしようかなと最初は思っていたんです。アキトが木連側、ユリカが地球連合側について、木星と地球の間で痴話喧嘩という話を考えていたんですけど、どうも嘘くさい（笑）。所詮はＴＶサイズの話にしかならないんです。Ａパートでその話をやって、Ｂパートになったら実は夢落ちでした、みたいな話にしかならないな、と。そこから始まって、今回の劇場版では２人のつながりというのは直接描いてはいないんだけど、ああいうひどい境遇にあっても、あの子達は本質的には変わらないんじゃないかなあという思いがあって。

――　あの子たちは変わらない……って、まるでアキト達が実在の人物みたいにおっしゃいますね（笑）。

佐藤　あっ、そうか。そうですね（笑）。アニメのキャラクターの人生について真面目に語っても仕方ないですね。まあ、あとは、こういう不幸な境遇にあった方が盛り上がるんじゃないかという、興業的なスケベ根性もありますよね。

――　そんな、身も蓋もない……（苦笑）。

佐藤　いや、何らかの破綻がないとお話は作れませんからね。

――　ルリの立場から見ると、すごくドライなものを見せつけられることになりますよね？

佐藤　アキトとユリカはラブラブだけど、実はアキトとルリもラブラブじゃないかって、思ってるファンの子もいるみたいですけど、やっぱりルリにとってはアキトって憧れの人以上のものじゃないんです。だから、そうした思いを確認して通過して行くってところを強調させるためには、ああいうテクニックが……なんて、テクニックで語っちゃうと、「ああ、下世話だなあ」ということになっちゃいますけどね。

――　じゃあ、ルリの話を訊きますけど、今回の話は、ルリにとっては、アキト達を通過して行く話だということですか？

佐藤　大事に思う人であっても、それは、心の中の引き出しにしまっておく存在だということはあるでしょう？　そうやって人はいろんな人と出会っていくわけですから。いつまでも過去のしがらみに引きずられては、過去の人間に対しても失礼ですからね。

もちろん、アキト達も退場するわけじゃないですよ。彼らには彼らの人生があるわけですから。ただ、アキトとユリカは、今のままでは、自分を見つめ直すこともできないでしょう。だから、今回は、２人には、わりと劇的に苦難の道を歩んでもらおう、と。

――　なるほど。

佐藤　まあ、今のような言い方だと、オレの掌の上でキャラクターが動いているみたいなんで、イヤなんですけどね。

――　逆に興味深いですね。興業的なことを考えていながら、一方でキャラクターの人生のことも考えてあげているわけですね。

佐藤　そういうふうにアニメのキャラクターが本当に実在するように語ったりするのってみっともないというか、よくないと思ってるんですけどね（苦笑）。

――　よくないと思ってるわりに、「成長のためには必要だ」と言ってしまう（笑）。監督は、学校の先生のような気分なんですね。「アキトとユリカ、あの子達は、もうちょっと苦労しないといかんなあ」みたいな。

佐藤　ＴＶシリーズではラブコメというのを強調しすぎて、あの子達は……あ、また言っちゃった（笑）……結局、あの２人は変わらなかったですからね。ちょっと歩み寄っただけで。だから、その延長線上でラブラブ話をやっても、予定調和的でつまらないですよね。新しいお客さんにも見てもらいたいという興業的なことも考えると、単なるラブラブ話ではしらけちゃうだろうと。そういう商売的なものがまずありますよね。それから大月俊倫プロデューサーからの要請。加えて、オレ自身の狙いというのがありました。

――　監督の狙いというと？

佐藤　意地悪な言い方をしちゃうと、ＴＶシリーズでは、アキトとユリカって人格がないんですよね。ライターなり演出家なりの思いを言わせるためのスピーカーでしかなかったんです。そういう意味で、２人には、血肉を与えたかったというところがあって、痛い目にあわせてますよね。まあ、それなら他のやり方もあったのではという意見もあるかもしれないけど。桑島（法子）さんには、「ラーメンを作れなくなっちゃうのはヒドいじゃないですか」って言われましたけどね。

――　それはみんなも思うでしょう。他に方法はなかったんですか？

佐藤　いや、むしろ、アキトはコックだということで、ああいう展開になったんですよ。それに、この後……なんて言い方しちゃうと嘘臭いですけど、これからもあの人はまたラーメン作ると思うんですよ。

――　ああ、ラピスが、脇でアキトに指示をするわけですか（笑）。

佐藤　そうそう（笑）。そうやれば、また仮にこの後の話があっても、コメディになりますよね。

――　今回はコメディ色は薄まってますよね。

佐藤　それは、最初に『スレイヤーズ』と同時上映というのをチラッと聞いていたんですよ。それで、ギャグ＆ギャグになったら、バランスが悪いよなあって思ったんです。まあ、そんなことをオレが心配しなくても本当はいいんでしょうが……。そういう意味では、僕は、映像作家というよりは、プログラムピクチャー（注３）の監督ですよね。それは、師匠の芝山（努）さん（注４）の影響かもしれません。まあ、アニメでプログラムピクチャー（的なもの）ってなかなかないですから、なんとか今風な形でそのようなものが作れないかなあと思ったんです。

まあ、そんな下世話な計算が働いているから、オレもヒドい人間だなあと思いますけどね。愛情と下世話な計算とがないまぜになったのが今回の作品ですよね。ただ、「ゴメン、ユリカ」とは思いましたけど。

――　まったくユリカさんには申し訳ないことをしましたよね。

佐藤　ええ、ＴＶの関連番組でも、彼女、泣きそうな顔をしてインタビューに応えてましたからね。本当に悪いなあと思ったなあ。

――　監督、それはユリカじゃなくて……。

佐藤　あ、あれは桑島さんか（笑）。

――　次に、キャラクターやお話ではなくて、映画そのものについて伺いたいんですけど、どんな感じの映画にしようと思ってらっしゃるんでしょうか？

佐藤　そうですねえ、「テンポ」と「引っかかり」という感じでしょうか。

――　どういう意味ですか？

佐藤　テンポよく流れていくけれども、そのわりには、頭にはわりと残っていって、それが伏線になっていくといいなあ、と思ってるんです。ほら、最近、テンポで見せていくアニメが多いじゃないですか。まあ、それをやり始めたのは、僕や大地（丙太郎）さん（注５）なんですけど、このごろは、テンポが速ければいいやというので、いたずらに速くして、その分、作品の密度が流動的になっていく作品がポツポツ出てきたような気がするんです。それは違うだろう、と。

――　なるほど。でも、コンテを拝見した限りでは、わりと正攻法ですよね。

佐藤　ですね。今回は、変なことはしてません。

――　というと、「素」の佐藤竜雄演出が見られると思っていいんですか？

佐藤　そうかもしれません。演出にも２つあって、自分のリズムなりカット割りでフィルムを作る場合と、周囲の状況に応じて作る場合があるんです。そういう意味で言うと、今回は前者ですね。

――　つまり、逃げたりしていない。

佐藤　ええ。だから、現場からは「ひどいっす、監督」って

佐藤 竜雄 INTERVIEW

PROFILE

佐藤竜雄（さとう　たつお）　1964年７月７日生まれ。フリー。神奈川県出身。Ａ型。早稲田大学在学中はアニメーション研究会に所属し、『名奉行遠山の金さん』等の傑作を発表。卒業後、亜細亜堂に入社し、アニメーターを経て、演出家となる。初演出作品はＯＶＡ『がきデカ』。初劇場監督作品が『リカちゃんとヤマネコ　星の旅』。『ちびまる子ちゃん』『忍たま乱太郎』等の演出を経て、『赤ずきんチャチャ』でファンの注目を浴び、以後『飛べ！イサミ』『機動戦艦ナデシコ』の監督を務め、その人気を不動のものとした。

言われましたけどね。「そんなにモノばかり食ってて、『ちびまる子ちゃん』じゃないんだから」って。

やりたい絵があって、それをどう組み込むかっていうときに、「これは流しちゃおう」みたいなことはしなかったんです。普通は、そのあたりは、さーっと流すのがいい演出家なんですよね。だから、下地さんには「監督はひどい人ですから」って言われちゃう。

―― 小芝居が多いんですね。

佐藤 いや、それでも、昔、自分が『ちびまる子ちゃん』でやっていたような執拗な細かい芝居は入れてませんけどね。でも、微妙な芝居は多いかな。そのあたり、ＴＶよりもずっと、作監の皆さんの力に頼ってます。特に今回は、キャラを描きたいっていう、後藤（圭二）さんの欲求がかなりね、反映されていると思いますよ。

―― キャラを描きたい、というと？

佐藤 このキャラはこういうキャラだからこういう表情するんだ、だからこういうアングルがいいんだって、そういうこだわりは出てますね。なにしろ、後藤さんのチェックを通る度に絵が変わっていきますからね（笑）。

―― 絵の面ではかなり期待してくれ、と。

佐藤 絵の面も含めて、そういう意味では、超大作ではないんだけど、劇場公開されるアニメーションでは、わりと理想的なポジションかなと思います。すごく持ち上げられることもなく、かといってＴＶの焼き直しというわけでもなく。取っ付きやすいところもあるし、ちょうどいい頃合じゃないかな……なんていうと、商売人みたいだけど。

―― 『ナデシコ』はメカものでもありますよね。その部分の話も伺いたいんですが。

佐藤 結局、メカものというのは、サンライズ（注6）さんだけのものなんだな、というのが、『ナデシコ』をやっての正直な感想ですね。やっぱり、アニメーターさん、デザイナーさん含めて、否定するにしろ肯定するにしろ、判断基準はみんな『ガンダム』になっちゃうんですね。そうなると、サンライズさんのように『ガンダム』以前から始めたメカものの蓄積があるかどうかということが問題になっちゃう。いくらＳＦものだと謳ったところで、そういう蓄積がなければどうしようもならないことに気がついて、あたふたしたのが僕にとってのＴＶシリーズの『ナデシコ』だったわけです。

―― それを踏まえて作ったのが劇場版？

佐藤 まあ、そこでできた貯金をはきだすのが劇場版というところですか。ＴＶではＳＦの貯金が満期にはならなかったわけです。今回も満期にはならなかったけど、わりと有効利用はできそうかなあ、と。

―― ポンと家を買うことはできないけれど、頭金ぐらいにはなるかな、と。

佐藤 そうそう。エステバリスにしてもリニューアルしてますし。ＴＶの遺産を発展させることで、メカやＳＦっぽさに関しては、わりと豊かに見えるんじゃないかな。そうだといいんですけどね。

―― ブラックサレナはいいですよね。

佐藤 ええ。あれは中原（れい）さんに、いやになるぐらいダメを出させていただきました。

―― 全体にシリアス調とはいえ、やはり、しっかりとギャグも入っていますね。

佐藤 ええ。ただ、最近、あまり、ギャグに執着心無いんですけどね。流れのままにやってます。

―― でも、アカツキが出てきたところで、金だらいが落ちてきたり。

佐藤 ああ、あれはドリフのギャグですね。そういう意味では、計算をしなくても、そうことをやってしまうあたり、自分の体質にギャグがあるんだなって思いましたね。

―― アカツキといえば、背中に「受」って書いてありますよね。あれは一体、どういう意味なんですか？

佐藤 アカツキっていう奴は、今回の劇場版ではそうは見えなかったかもしれないけれど、かなりひねくれた奴なんです。あのひねくれ具合は、ある意味、僕の投影ですね。で、ひねくれているから、心がない。心がないから、「受」なんです。

―― ああ、「愛」という字から、心という字をとると「受」という字になる。「受」というと、最近だと、違った意味もありますよね。案外、アキトの背中に「攻」って書いてあったりして。

佐藤　それはちょっといやだなあ。

―― アカツキは監督という話がありましたけど、そういう意味では、各キャラクターに少しずつ監督が入っているんでしょうか。

佐藤　ある一面はそうですけど、キャラクターは監督自身なんですかって言われちゃうと困りますね。でも、イズミは、あの変なところは僕の性格が入ってますね。ああいう風になりたいときがありますから。人間だれしもそう思うときがありますよね。

―― そうですか（苦笑）。イズミといえば、イズミのアフレコは結構苦労なさったようですね。監督がウクレレまで持ち出して聞かせた歌も、結局、実際の録音では変わっちゃったようですし（注7）。

佐藤　いや、あれはね、わざとなんですよ。長沢（美樹）さんのところへ行って、ウクレレを弾いて歌を聞かせたあとで、「こうだけど、違うからね」って伝えたんです。案の定、混乱したからね、長沢さん。

―― ええっ？　わざと混乱させたということですか？

佐藤　一応、歌は作っておいたんだけど、アフレコ当日思い通りに歌わせるなんて絶対不可能ですからね。だったら、かき回しちゃえ、と。

―― それなら何も指示しない方がいいんじゃないですか？

佐藤　いや、指示しないと、普通の歌になっちゃうんですよ。やっぱり、イズミの歌はお経のような唸るような感じにしてもらわないとね。かと言って、「お経のように」って指示しちゃうと、ホントのお経になっちゃうからね。

―― だから、わざわざ歌って聞かせて、「でも、これじゃないんだよーん」ってやった、と。

佐藤　そう、「キミならできるから」て言ったら、長沢さんは、困ったように「はあ、そうですか。できますか」ってね。

―― そりゃ、混乱しますよ。

佐藤　ええ、混乱を絵に描いたような歌になってます。適当に歌って下さいといっても、なかなか本当に適当には歌えないんですよ。そういう意味では、あれは成功しましたね。

―― なるほど。じゃあ、引き続き、アフレコの話を伺いたいんですが。

佐藤　事前に、央美ちゃんと上田（祐司）くんと、桑島さんには、絵コンテを読んでもらって、流れをつかんでもらったんです。

―― 桑島さんにもですか？

佐藤　ショックの予防線で。今回はこうなっているけれど、大事な役柄なんだから、って説明して、納得してもらいました。「ユリカもアキトみたいに、ナノマシンのマークが出ている、変な人になっちゃうんですか」って心配してましたけど、それはないからって言ったら、ホッとしてましたよ（笑）。

―― なるほど。山寺（宏一）さんはいかがでしたか？

佐藤　北辰は本当に思ったとおりでしたね。良かったですよ。

―― じゃあ、予想以上だったのは？

佐藤　男性陣は予想以上でしたね。

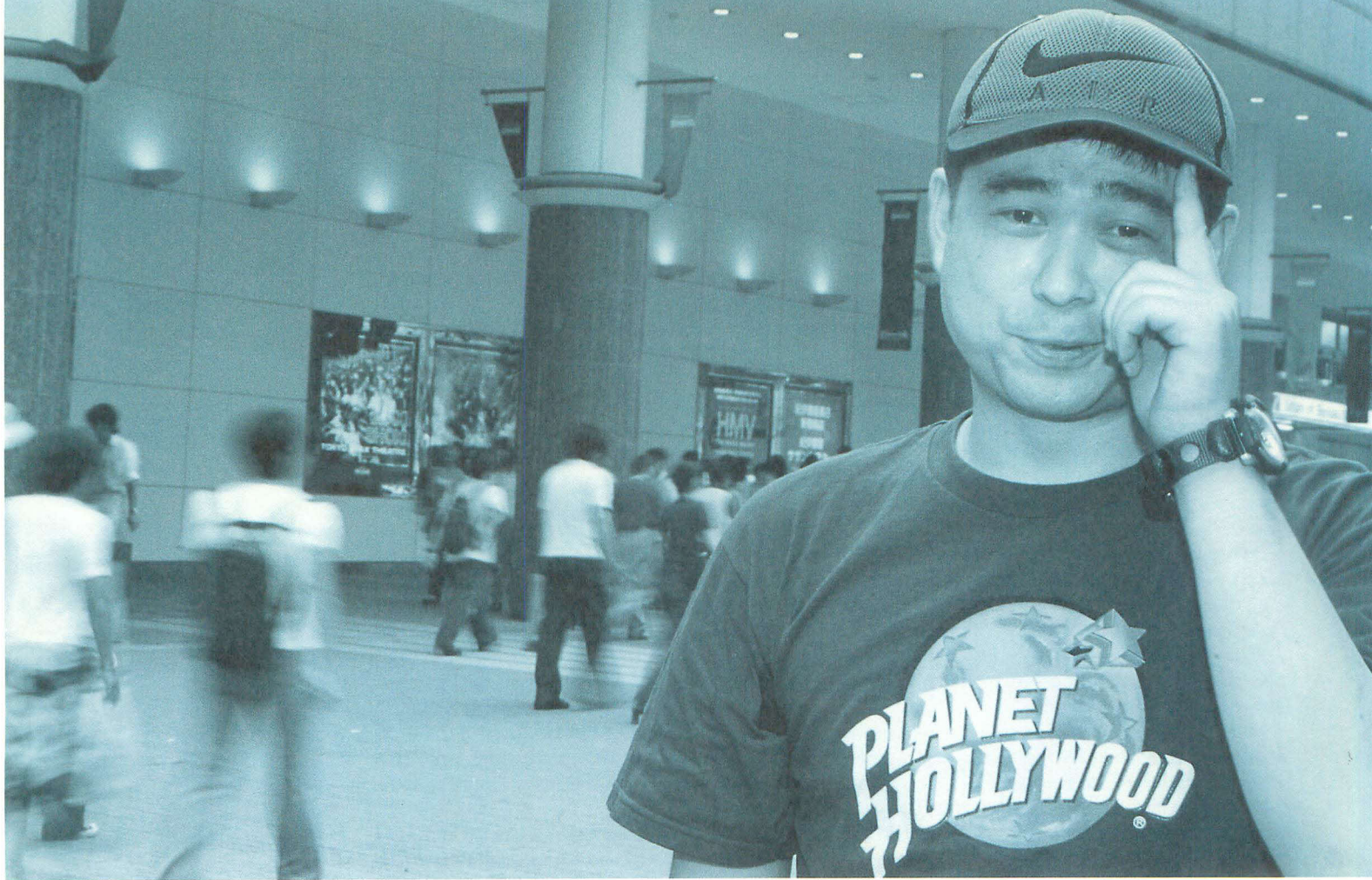
―― 立木（文彦）さんとかですか？

佐藤　そうそう。キャラクターの感じと立木さんの声のイメージが微妙にズレているところが、非常に良かったですね。それから、若本（規夫）さんも、良かった。最初はいかにも美形をやりそうな声優さんをお願いしようと思っていたんですが、若本さんにお願いして。さらに、それもちょっとべらんめえ調にしてもらって。

―― 林原（めぐみ）さんと三石（琴乃）さんも登場してますよね。

佐藤　あれも僕の希望だったんですが、実現するとは思いませんでしたね。いやー、ヒサゴンは、さすがだなあと思いました（笑）。

―― ハーリーくんはいかがでしたか？

佐藤　思ってた通りでしたね。日高（のり子）さんにまかせて良かったなあと思いながら聞いてましたよ。

—— みんなが気になるところだと思うんですけど、『ナデシコ』はこれで完結しちゃうんでしょうか？　監督としては、これで終わらせるつもりで作られたんですか。

佐藤　映画の常で、わりと続編を意識させながらも、話としては終わらせるということでまとめたつもりですけどね。ルリにしてもアキト達にしても、生きる指針はできたわけですから、あとは勝手にやってくれ……って、おいおい、キャラクターに語りかけてどうするんだって（笑）。

—— （笑）。キャラクター達のための映画という側面もあるわけなんですね。ＴＶで未消化だったと感じていた部分を映画で消化したというわけでしょうか？

佐藤　どうしても、ＴＶは26本という枠の中で、お話をこうしよう、という方向があって、それを調整するので精一杯というところがありますからね。キャラクターに関しては描ききれないところもあるんです。というのも、作り手が思う以上に、ＴＶの場合、キャラクターというのは、毎週放映されるから、成長しちゃうんですね。特に『ナデシコ』の場合は、育ちすぎちゃいましたよね。

—— つまり、キャラクターに厚みがつくということですね。

佐藤　ええ。お話を終わらせることを考えていくと、どうしてもそうした部分は、見逃しがちになっちゃいますしね。特に『ナデシコ』はそのズレが思った以上に大きくて、誤算でした。

—— それは特にどのキャラクターに関して？

佐藤　アキトとユリカがドラマの中で引っ込んじゃった分、ルリが突出しましたよね。

—— それを今回の劇場版で補おうと。

佐藤　ええ。ルリはわりとシビアな境遇という反面、お姫様というところもあって、メルヘンとシビアが同居したような感じで、結局この人はどうするんだろう、というところがあったと思うんですよね。それはちょっと救ってあげた方がいいかなって。まあ、「なぜ、ルリだけ？」と言われちゃうかもしれないけど。

—— なぜ、ルリだけ？（笑）

佐藤　まあ、それはＴＶシリーズでは、僕もルリには入れ込んでいたというか、自分を投影していたところがありますからね。傍観者という立場のルリにね。それで、傍観者が直接、事を起こすとどうなるだろうか、と思ったんです。だからと言って、僕とルリとをイコールでは結べませんけどね。「ルリは僕です」なんて言ったら、暴動起きそうですから（笑）。

—— ルリと監督との距離が、ＴＶシリーズのときは自分に近かったということですが、劇場版ではどうなんですか？

佐藤　劇場版はちょっとずれてますね。

—— ＴＶシリーズと劇場版ではルリの結論も少し違ったものになってますよね？　ＴＶシリーズでは「思い出を大事にしたいですよね、それが自分達なんだから」だったのが、劇場版では「でも、思い出は思い出として生きていくのだ」というように。

佐藤　そうですね。ＴＶシリーズでの「それでいいじゃないですか」という部分は、ちょっと描き切れずに心残りだったところですね。遺跡の謎云々よりも、それはひっかかっていた部分でした。「思い出、大事じゃないですか」なんて言っているのを見て、「そんなこと、若いお前に言われたくない」っていう気持ちも、実はあったわけですよ。

確かに過去がない子ですけどね、ルリは。でも、思い出を大事にするっていうのは、ある意味、それにすがってしまうことになるわけでしょう。そういう生き方は、その時は気持ちいいだろうけれど、「この先、大変だよ、あんた」っていう気持ちがありましたからね。

—— それで言うと、今回の映画で、過去のナデシコクルーと再会する場面がありますが、あれは再会することが大事なんじゃなくて、みんながそれぞれ違う人生を歩んでいることの方が大事なんですね？

佐藤　そうですね。ルリに、自分の今のスタンスと他人の生活との差を感じてもらおうと思ったんです。

—— つまり、昔の仲間が再結集するわけですけど、それよりも、今回の映画で大切なのは、もう二度と再結集しないことがわかるっていうことなんですね。

佐藤　そうかもしれませんね。小野健一さんのコメントにもありましたよね、「ちょっとした同窓会」って。ほんとに同窓会ですからね。あくまでも、かつての仲間だったルリを助けてあげようということで。

—— むしろ、離れ離れになっていたことを再確認する。

佐藤　その時は盛り上がっても、別れるときがくる。それはルリもわかっているでしょうからね。だから、ラストカットは後藤さんもかなり思い入れて作監修正してくださってるはずですよ。央美ちゃんも言ってたし、オレもそのつもりなんだけど、今までの自分を振り切って、前を見て生きていこうっていうあらわれですからね……なんか、えらそうだな（笑）。

—— いえいえ、大事なことですよ。

佐藤　そう、大事なモノって大事ですけどね……って、そりゃ当たり前か（笑）。大事に思った瞬間に、それは過去のモノになっちゃうわけで、それをしょっちゅう引き出しから取り出して磨いているだけじゃしょうがないですからね。そんなものは、しまっちゃっていいんです。しまっても、それは輝きを失うわけではないですからね。……ああ、もっとちゃんと人生とはとか、テーマみたいなことが言えればいいんだけどね。ま、でも、あんまりそういう人生訓語っちゃうと、ウソ臭いでしょう。

—— 充分、語ってますって（笑）。

佐藤　はっはっは（笑）。

（注1）亜細亜堂は、佐藤監督が所属していたアニメーション制作会社。『忍たま乱太郎』『ちびまる子ちゃん』『ドラえもん』等の作品の制作に参加している。生活感のある描写に定評があり、また、その作風には、Ａプロダクションの流れを汲んだ正統的漫画映画の伝統が脈々と生きている。

（注2）現在の日本のＴＶアニメの制作過程では、監督、あるいは演出家によって、脚本の内容が変更されることは珍しいことではない。

（注3）プログラムピクチャーとは、本来は２本立て興業の際に添え物として上映される作品を指す。この場合は、映画配給会社が定期的な興業の中で公開する劇場作品といった意味。

（注4）芝山努は、劇場『ドラえもん』シリーズ等で知られるベテランのアニメ監督。他の代表作に『がんばれ!! タブチくん!!』（監督）、『忍たま乱太郎』（総監督）『ちびまる子ちゃん』（監修）等がある。

（注5）大地丙太郎は、『こどものおもちゃ』『セクシーコマンド外伝　すごいよ!!　マサルさん』（監督）等で注目を集めている演出家。『赤ずきんチャチャ』では、佐藤監督、桜井弘明とともに、傑作を続出させ、アニメファンの間で話題となった。

（注6）サンライズは『機動戦士ガンダム』等の作品で知られるアニメーション制作会社。

（注7）今回の劇場版のアフレコに佐藤監督は、ウクレレを持参。アフレコ現場で、イズミ役の長沢美樹の前で、演技指導として、劇中でイズミがうたう歌の基本的なラインを披露したのである。

MAKING OF Nadesico the movie

■劇場版『機動戦艦ナデシコ　The prince of darkness』は、ＴＶアニメ『機動戦艦ナデシコ』の続編であり、その最終回の３年後の物語を描く作品である。内容は、ＴＶシリーズの企画段階から中心となってきた大月俊倫プロデューサーと、佐藤竜雄監督によって練られた。

脚本も、佐藤監督が執筆している。結果、ドラマ、人物描写、映像のテンポ、ディテールまで、彼の個性が色濃くでたものとなったといえよう。

■アニメーション制作はＴＶシリーズに引き続き、XEBECが担当。中核のスタッフもＴＶシリーズから引き続き参加しているメンバーが多い。

■今回の劇場版にも、数多くの新メカニックが登場している。そのデザインは、中原れい、鈴木雅久、武半慎吾、森木靖泰の４人によって行われた。中原れいはブラックサレナ、エステバリス等の機動兵器のデザインを、鈴木雅久はナデシコ以外の戦艦と、ナデシコを含む戦艦の艦内のデザインを、武半慎吾はスペースコロニー、遺跡と融合したユリカ等の美術的なデザインを担当。森木靖泰はナデシコＢ、Ｃをデザインした。

メカニックデザイン協力の役職でクレジットされている前田明寿、坂﨑忠は、設定のクリンナップ作業を担当。また、メカニックデザインではないが、上記以外の小道具デザインは、デザインワークスの役職でクレジットされている山岡信一が担当している。

■制作初期に、この頁に掲載したイメージボードが、メカニックデザインを担当した鈴木雅久と武半慎吾の手によって描かれた。これらのボードは世界観を明確にし、スタッフ間でイメージを統一するためのものであり、個々の画面にも活かされている。

■佐藤監督は、脚本、絵コンテ、演出のみならず、各パートで活躍。劇中に登場する「夏の空　ジュンにも遅い　春の風」の筆文字も、監督の手によるもの。「なぜなにナデシコ」のオープニング画面の作画も担当。宣伝ポスターの二種類のコピー「光を超えて、届けこの想い」、「キミノオモイデニ、サヨナラ。」も、監督によるものだった。

■本編中に出てくる食べ物の作画修正はほとんどを、作画監督の石井明治が担当。よりリアルに仕上げるために、ラーメン、西瓜、ウィスキー等は、資料として実物や写真が集められた。特に、クラッシックな瓶のフルーツ牛乳は実物がなかなか見つからず、スタッフは苦労したそうだ。

■ＴＶシリーズに登場したキャラクターに関しては、基本的にＴＶ版と同じ声優が演じている。唯一、キャストが変わったのが、ホウメイガールズのミズハラ・ジュンコ。今回は今井由香が演じている。

■ゲストキャストにも話題は多い。ヒサゴプラン見学コースのヒサゴンとガイドを演じたのは、皆様お馴染みの人気声優、林原めぐみと三石琴乃。登場シーンの少ない役だったが、ファンには嬉しいキャスティング。謎めいた美少女ラピス・ラズリは、アイドル・女優の仲間由紀恵が演じた。これもスペシャルゲスト的な参加だった。小川真司、飯塚昭三、若本規夫、幹本雄之といった普段は洋画で活躍している渋いベテラン男性陣が揃ったのも、今回の話題の一つ。

■今回はやたらとたくさんの漫画原稿が作中に登場する。ヒカルが描いていた少年漫画の原稿は、『少年マガジン』等で活躍しているマンガ家の島崎譲の手によるもの。ユリカのコントロールに使われた少女漫画「うるるん」の原稿は、エンディングに「マンガ原稿」の役職でクレジットされている他の８人の作家に依頼したものである。

■エンディングテロップに「友情協力」なる項目があり、その中に『少女革命ウテナ』等で知られるアニメ界の奇才・幾原邦彦の名前がある。彼が、他作品の打ち合わせで、大月プロデューサーを訪ねたところ、劇場『ナデシコ』の絵コンテのコピーをとっている最中だった。急いで大量のコピーをとらねばならないのに、他のスタッフが出払ってしまっていたのだ。見かねた幾原邦彦は、その作業を手伝うことになった。かりにも他作品の監督にコピーとりを手伝わせて申し訳ない、ということでエンディングに名前が出ることになったのである。

■上映時間は約80分。

STAFF LIST

製作
角川　歴彦
大月　俊倫

企画・制作
XEBEC

企画協力
GANSIS

プロデューサー
下地　志直

キャラクター原案
麻宮　騎亜
(「遊撃宇宙戦艦ナデシコ」月刊少年エース連載／角川コミックス・エース刊)

キャラクターデザイン
総作画監督
後藤　圭二

メカニックデザイン
中原　れい
武半　慎吾
鈴木　雅久
森木　靖泰

メカニック原案（ＴＶシリーズ）
明貴　美加

メカニックデザイン協力
前田　明寿
坂﨑　　忠

デザインワークス
山岡信一

カラーコーディネーター
青木　弘美
上谷　秀夫

美術監督
小山　俊久

撮影監督
鳥越　一志
金沢　章男

音響監督
田中　英行

編集
松村　正宏

音楽
服部　隆之

劇中曲作曲
手塚　理

主題歌　『Dearest』
作詞：有森　聡美
作曲・編曲：大森　俊之
歌：松澤　由美

音楽制作
スターチャイルドレコード

音楽制作協力
東京室内楽協会

CAST

ホシノ・ルリ：南　央美
テンカワ・アキト：上田　祐司
ミスマル・ユリカ：桑島　法子
マキビ・ハリ：日高　のり子
高杉三郎太：三木　眞一郎
アオイ・ジュン：伊藤　健太郎
メグミ・レイナード：高野　直子
ハルカ・ミナト：岡本　麻弥
ウリバタケ・セイヤ：飛田　展男
ゴート・ホーリー：小杉十郎太
プロスペクター：小野　健一
スバル・リョーコ：横山　智佐
アマノ・ヒカル：菊池　志穂
マキ・イズミ：長沢　美樹
アカツキ・ナガレ：置鮎　龍太郎
エリナ・キンジョウ・ウォン：永島　由子
イネス・フレサンジュ：松井　菜桜子
月臣　元一朗：森川　智之
白鳥　ユキナ：大谷　育江
ミスマル・コウイチロウ：大塚　明夫
秋山　源八郎：松本　保典
ホウメイ：一城　みゆ希
テラサキ・サユリ：矢島　晶子
タナカ・ハルミ：中川　　玲
サトウ・ミカコ：本井　えみ
ウエムラ・エリ：川上とも子
ミズハラ・ジュンコ：今井　由香
草壁　春樹：安井　邦彦
ムネタケ：真殿　光昭
アズマ：飯塚　昭三
シンジョウ：幹本　雄之
タニ：小川　真司
ヤマザキ：若本　規夫
アララギ：立木　文彦
サワダ：橋本　昌也
ヒサゴン：林原めぐみ
ガイド：三石　琴乃
北辰：山寺　宏一
ラピス・ラズリ：仲間由紀恵

STAFF

脚本
絵コンテ
佐藤　竜雄

演出
玉田　　博

作画監督
前田　明寿
山岡　信一
石井　明治
赤堀　重雄
堀内　　修

原画
越智　一裕
河野　悦隆
長谷川眞也
林　　明美
山下　敏成
和田　高明
伊東　伸高
中村　　豊
浜崎　健一
石本　英治
志田　正広
岡　　辰也
高見　明男
石原　　満
宇野　　真
坂﨑　　忠
松田　剛史
加藤　初重
前田　明寿
山岡　信一
阪口　英昭
河野　利幸
牛来　隆行
梅本　賢一
高橋　典子
岸田　隆宏
藤澤　俊幸
丹沢　　学
児山　昌弘
黄瀬　和哉
石井　明治
佐藤　雅弘
関口可奈味
谷津美弥子
小村方宏治
植田　　実
中井理恵子
永島　明子
新野　量太
菊池　聡延
石川　健明
浅野　恭司
門之園恵美

動画チェック
堀　たえ子
塚本あゆみ

中野　　剛
藤田　竜司
足立　慎吾
高橋　香織
大槻　敦史
石丸　　直

動画
張　　允根
伊藤　陽子
朝來　昭子
湯本　佳典
加藤　雅之
茂木信二郎
高品　有桂
久保田　誓
高橋由希子

プラム
中島　早苗
土橋　昭人
水川　弘理

Sutudio　D-volt
吉田　隆彦
米本　　享

スタジオ　ライオンズ
東　　和宏
河原久美子
本家裕実子
安徳　紘生
田辺　佳行
小林　慶次

U-Ni ANIMATION
柳　明　希
金　明　金
金　世　珍
金　仁　靜
朴　惠　暎
玄　惠　見

桂成プロダクション
崔　誠　文
崔　福　榮
申　恩　煕
朴　修　賢
文　鍾　勲
方　順　伊

K. PRODUCTION
盧　景　根
金　忍　哲
林　岧　熺
朴　濟　均
金　玟　廷
孔　常　煕

色指定
青木　弘美

検査
関本美津子
河端　静子
池田　和代
伴　　夏代
金丸ゆう子

検査・仕上
A.Ｉ.C
伊藤さき子
佐藤　直子
伊藤　照美
佐藤　丈志
大西　峰代
北村　浩二
日比智恵子
関口　智子
箕輪　綾美
阿部　紀子
大内　　綾
遠藤菜緒美
鈴木　依里
木村栄美子
鴻野　明子
江口　哲治
品地奈々絵
安達　恵子
松岡　珠江
土屋　　智
鈴木　祐香
大槻　浩司

仕上
スタジオぴえろ　福岡分室
松崎　幸恵
福田　京子
古川　香織
森岡由企子
流　進之介
下鉄穴ひとみ
鎚分　真美
小野　香織
桑原　明子

プラム
和田　秀美
横尾　淳子

U-Ni ANIMATION
金　太　子
洪　定　兒
趙　明　姫
林　興　進
朴　成　畢
趙　美　淑

桂成プロダクション
朴　美　英
張　錦　實
林　善　美
申　恩　珠
成　基　媛
宋　順　任

K. PRODUCTION
姜　煕　元
崔　敏　喜
李　奎　權
金　慶　美
李　景　玉
金　恩　鏡

マーサ
SUGIANA
PURYANA
NOARU
MULYON
ARIAWAN

スタジオ　トイズ
山崎　一美
山内　　恵
樋田由紀子
野地　弘納

XEBEC
関本美津子
河端　静子
青木　弘美
池田　和代
伴　　夏代

タツノコプロダクション
鈴木童話コーポレーション
麦星
スタジオ　キリー
宮崎アニメーションフィルム

美術監督助手
高山　八大
朝倉千登勢

背景
プロダクションアイ
海野よしみ
岡本　若葉
野々宮恒人
山田　勝宏
川合　文江
高山　八大
小川めぐみ
小川由紀子
石引さおり
菅野紀代子
高村　知子
岩橋茂都子
阿久津信子
吉岡めぐみ
岩井はなえ
三宅久仁子
菱沼　康範
渡辺　　紳
茂木　和寛
光元　　紋
中山裕紀子
大石　雅美
西谷なおみ
金輪　美穂

特殊効果
マリックス
長谷川敏生

撮影
トランス・アーツ
関戸　宏樹
遠藤　泰久
津村　治彦
馬場　知浩
橘高　敬司
浅井　千里
内山　国博
南口　大助
木部さおり
中山田雅彦
幕田　充宏
桑原　賢治
酒井　邦彦
竹内　　尚
だいけんいち
春日　啓吾
奥井　厚子
山田　義和

編集助手
JAY　FILM
山森　重之

マンガ原稿
島崎　　穣
くら☆りっさ
速瀬　羽柴
磯田　わたこ
いわくに北斗
山下　かおり
いけつきめぐむ
OCON
竹村　久司

マンガ原稿協力
高原　　敦

タイトルロゴデザイン
根津　典彦

CGデザイン
XEBEC
古川　文男
鈴木　貴志
与沢　宏明

デジタル演出協力
高木　真司

デジタル色指定
井上佳津枝

デジタルペイント
PRODUCTION Ｉ.G
内林　裕美
佐久間未希
古川　　誠
榊原　　広
佐藤　珠香
浅野　理恵
茂木　早誉
小山千代美
伊藤　光子

2Dワークス
浅野真樹子

3D制作
ＩＫＩＦ＋
木船　徳光

官　　一徳
稲垣　　明
馬場　就大
糸曽　賢志
下之園博樹
石田　園子
呉　　新紅

PRODUCTION Ｉ.G
松本　　薫
山崎　嘉雅

稲垣　善光
河野　由美

デジタル制作デスク
内田　哲夫
西澤　正智

デジタル制作進行
黒澤　　亘
大貫　守健
小山　倫良

テロップ・リスワーク
マキプロダクション

フィルム
FUJIFILM　8532
担当　久下　理

音響効果
フィズ・サウンド
庄司　雅弘

録音調整
オーディオ・タナカ
渋江　博之

音響制作
オーディオ・タナカ

キャスティング協力
ＣＰＵ
高橋　正彦

録音スタジオ
東京テレビセンター

現像
イマジカ

タイミング
平林　弘明

オプチカル
柴田　祐男

デジタルフィルムＩ／O
辻　　英男

制作担当
千野　孝敏

制作デスク
坂部　久明

制作進行
長谷川映子

高橋　多恵
増田　英介
手島由貴子

CGワーク進行
木村　正樹

アシスタントプロデューサー
羽原　信義
高橋　知子

友情協力
會川　　昇
山口　　宏
佐藤　　徹
幾原　邦彦
堺　　三保

桜井　弘明
水島　精二
加戸　誉夫
杉谷　光一

Special thanks
石川　光久

石川　　博（ＴＶ東京）
丸山　邦江（ＴＶ東京）
五十嵐智之（ＴＶ東京）

角谷　哲生
日下　直義

岡崎　　稔

劇場特報製作
佐藤　敦紀（仕事主義）

宣伝担当
小黒祐一郎

宣伝
小出真佐樹
水野　丈一
徳原　貴之
スタジオ雄
メイジャー

製作　NADESICO製作委員会
角川書店
キングレコード
テレビ東京
ムービック
イング
XEBEC
セガ・エンタープライゼス
東映

DOLBY

配給
東映

監督
佐藤　竜雄

NADESICO製作委員会作品

イラスト／佐藤竜雄

IMPRINT

編集／スタジオ雄　構成・取材／小黒祐一郎（スタジオ雄）　編集スタッフ／小川びい、藤田毅、大河内一楼、小俣猛、町田知之、塚越美奈子　アートディレクション／根津典彦
カメラマン／馬場京子　協力／佐藤竜雄、XEBEC、キングレコード、アニメージュ編集部（徳間書店）、Newtype編集部（角川書店）

Nadesico the movie The prince of darkness

劇場オリジナルグッズ通信販売

●メタリックポスター　B2サイズ

●ポストカード 3枚組

①ポスターセット　945円

表

裏

●下敷き

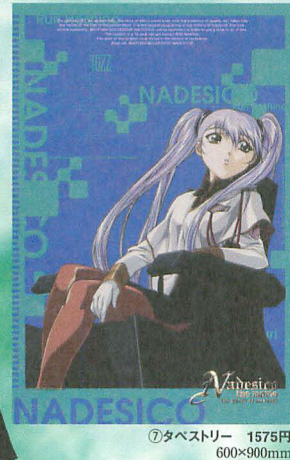
●クリアファイル　A4サイズ

②ステーショナリーセット　683円

③ZIPPOライター　6300円

側面

④キーホルダー　525円

⑨ピンズセット　1575円
キュートなルリの3ヶセット

⑤ラミカードセット 525円 5枚組

⑥Tシャツ　2625円 フリーサイズ

⑦タペストリー　1575円 600×900mm

⑧ゴールドテレカセット　4000円 3枚組

⑩テレカA　⑪テレカB　⑫テレカC
テレホンカード　各1000円　50度数

⑬ルリ等身大バスタオル 5040円 600×1400mm

⑭キャラメタル 1575円 266×366mm
アルミプレートにルリが輝く!

⑮マウスパッド　1575円

⑯アイスマグカップ（保冷カップ）　1050円

⑰招布（まねぎ）　840円 220×350mm
涼しげな夏アイテムです!

通販お申し込み方法

まず、ハガキで注文して下さい。代金は後払いです。

●ハガキの書き方　（例）〔うら〕〔おもて〕

グッズ注文の際の記入例 — ①ポスターセット×1　⑩テレカA×1

住所（県名から）、お名前、年齢、TEL — 〒□□□-□□□□　県　市　町　番地　お名前（ふりがな）年齢　TEL　捺印　保護者署名

印かんを押す（押してないものは18歳以上の方も無効です）

保護者の署名

〔おもて〕50円切手　〒173-8558　板橋区弥生町77～3　東映㈱　㈱ムービック内　「ナデシコ」通販係

●一枚のハガキで、すべての商品をお申し込みになれます。

●18才未満の方は、保護者の方に確認の上ご注文下さい。（必ずハガキに署名をもらって下さい）

●代金のお支払いは、商品と同封されている振込用紙でお近くの郵便局から2週間以内にお振り込み下さい。なお、3,000円以上商品をご注文の場合は、商品を届けた配達員に代金をお支払いいただく代引き払いとなります。

●代金は、商品代金（税込）＋荷づくり送料（一律500円）＝合計金額となります

●⑩⑪⑫のテレカのみをお申し込みの方は何枚申し込まれても荷づくり送料350円になります。

●商品のお届けは、ハガキ受付後およそ30日程かかります。

●商品が届いてから1週間以内でしたら返品できます。その場合の送料は、お客様のご負担とさせていただきますのであらかじめご了承下さい。

●お申し込み受付〆切り日は1998年9月18日(金)必着です。

商品には数に限りがございます。品切れの際はご了承ください

お問合わせ先　ナデシコ通信販売係
Tel.03-5995-7420　月～金（祭日を除く）朝10:00～夕方5:00まで
※電話でのご注文はご遠慮下さい

商品のデザインは変更になることがあります。あらかじめ御了承下さい

これらの商品は映画公開後、インターネットホームページでお取扱いする予定です。　アドレス　http://www.toei.co.jp/movie/

やるドラ

女の子にやってほしいのよ。
プレイステーションやるドラ。

みるドラマから、やるドラマへ。

やるドラ™

プレイステーションに新ジャンル登場、「やるドラ」。今までは見るだけだったTVのドラマ。「やるドラ」は、あなたが主人公になり、話し(選択し)、人によって全く別々のストーリーを味わえる、インタラクティブ・ドラマだ。全編フルボイス・フルアニメーション。PS初心者の女の子でもカンタン、オモシロイ。こいつは、やるしかないだろっ。
第三弾、第四弾も制作快調!

やるドラ第一弾

[サスペンスホラー]

ダブルキャスト
Double Cast™

記憶を失った女の子との出会い。
軽い気持ちで大学の映画研究会に誘ったあなたではあったが・・・
息もつかせないスリリングな展開。
選択次第ではあなたの命さえもあぶない。

絶賛発売中!
標準価格4,800円(税抜) SCPS-10053~54

やるドラ第二弾[恋愛系]
絶賛発売中

季節を抱きしめて™

やるドラ第三弾[バイオレンス系]
10月発売予定

やるドラ第四弾[純愛系]
11月発売予定

雪割りの花
YUKIWARI NO HANA™

GARAGE http://www.scei.co.jp/　DUAL SHOCK™対応

「ダブルキャスト」と「サンパギータ」には暴力シーンやグロテスクな表現が含まれています。

SUGAR & ROCKETS™

1998年8月8日発行　発行所／東映(株)事業推進部　印刷／三映印刷（株） 定価 1,000円（消費税込）